續國譯漢文大成

文學部 四十

309
65
帙入

始

續國譯漢文大成

文學部 第四十册（第十帙の四）

白樂天詩集 二の四

吉田律郎氏 寄贈本

昭和拾三年

309
65

白樂天詩集　卷十八

律詩　五言七言　凡九十四首

夜入瞿塘峽

瞿塘天下險。夜上信難哉。
岸似雙屏合。天如匹練開。
逆風驚浪起。拔笻闇船來。
欲識愁多少。高於灩澦堆。

夜瞿塘峽に入る

瞿塘は天下の險、夜上る信に難い哉。
岸は雙屏の合するに似、天は匹練の開くが如し、
風に逆ひて驚浪起り、篙を拔きて闇船來る。
愁の多少を識らんと欲せば、灩澦堆よりも高し。

【字解】【一】瞿塘　三峽の一。前に見ゆ。【二】雙屏　二枚の屏風。【三】匹練　一匹のねりぎぬ。【四】笻　舟をつなぐ竹の索。【五】灩澦堆　瞿塘峽口に在る大石の名。

【題義】大江を泝り夜瞿塘峽に入りし時の景況を述べた詩である。

【詩意】瞿塘峽は天下第一の難處であるから、夜之を上るのは實に危險である。兩岸は二枚の屏風を合せたやうで、天は一匹の練絹を曳いたやうだ。風に逆つて大浪が起り、竹の索を拔いてだしぬけに

船が現れて來る。その愁は灩澦堆よりも高い。

初到忠州贈李六

初めて忠州に到り李六に贈る

好在天涯李使君。江頭相見日黃昏。吏人生梗都如鹿。市井蕭疎只抵村。一隻蘭船當驛路。百層石磴上州門。更無平地堪行處。虛受朱輪五馬恩。

【題義】初めて忠州に到著し、忠州刺史たる李六（六は排行）に贈つた詩である。

【詩意】日の暮れ方に江頭で李使君の健在なる容顏を拜した。さて忠州に來て見れば吏民は無骨で鹿の如く、市街は淋しくて村落のやうだ。下は川沿になつてゐて船がすべて行通の役目をなし、上は高い石段を登つて州廳の門に達するといふ有樣で、平地と謂つては全くない。折角朱塗の馬車に乘ることの出來る刺史に任ぜられても其甲斐がない。

【字解】【一】好在　健在に同じ。
【二】李使君　使君は刺史の稱。
【三】生梗　固陋にして世情に通ぜぬこと。
【四】蕭疎　淋しきこと。
【五】蘭船　一に蘭船に作る。
【六】朱輪　朱塗の馬車。貴人の乘る所のもの。五馬は太守をいふ。

郡齋暇日憶廬山草堂兼寄二林僧社三十韻。

皆敍貶官以來出處之意

郡齋の暇日、廬山の草堂を憶ひ、兼ねて二林の僧社に寄する三十韻、皆貶官以來出處の意を敍す

諫諍知無補。遷移分所當。不堪匡聖主。只合事空王。龍象投新社。鵷鸞失故行。沈吟辭北闕。誘引向西方。便住雙林寺。仍開一草堂。平治行道路。安置坐禪牀。手版支爲枕。頭巾閣在牆。

諫諍補ひ無きを知る、遷移せらるるは分の當る所。聖主を匡すに堪へず、只合に空王に事ふべし。龍象新社に投じ、鵷鸞故行を失ふ。沈吟して北闕を辭し、誘引せられて西方に向ふ。便ち雙林寺に住し、仍て一草堂を開く。行道の路を平治して、坐禪の牀を安置す。手版は支へて枕と爲し、頭巾は閣きて牆に在り。

先生鳥几鳥。居士白衣裳。
竟歲何曾悶。終身不擬忙。
滅除殘夢想。換盡舊心腸。
世界多煩惱。形神久損傷。
正從風鼓浪。轉作日銷霜。
佛經云、生死無休、已如風鼓三海浪、又云、煩惱如霜露、盡日能消除。
吾道尋知止。君恩偶未忘。
忽蒙頒鳳詔。兼謝剖魚章。
蓮靜方依水。葵枯重仰陽。
三車猶夕會。五馬已晨裝。
去似尋前世。來如別故鄉。
眉低出鷲嶺。脚重下蛇岡。
漸望廬山遠。彌愁峽路長。
香爐峯隱隱。巴字水茫茫。

先生は鳥き几鳥、居士は白き衣裳。
歳を竟るまで何ぞ曾て悶せん、身を終るまで忙しきを擬せず。
殘夢想を滅除して、舊心腸を換盡す。
世界煩惱多し、形神久しく損傷す。
正に風の浪を鼓するに從ひ、轉た日の霜を銷すを作す。
吾が道は尋で止まるを知る、君恩は偶、未だ忘れず。
忽ち鳳詔を頒つを蒙り、兼ねて魚章を剖くを謝す。
蓮靜かにして方に水に依り、葵枯れて重ねて陽を仰ぐ。
三車猶夕に會し、五馬已に晨に裝ふ。
去ること前世を尋ぬるに似たり、來ること故鄉に別るるが如し。
眉低れて鷲嶺を出で、脚重くして蛇岡を下る。
漸く廬山の遠きを望み、彌愁峽路の長きを愁ふ。
香爐峯隱隱、巴字水茫茫。

瓢挂留庭樹。經收在屋梁。
春拋紅藥圃。夏憶白蓮塘。
唯擬捐塵事。將何答寵光。
晉時永遠二法師同隱廬山二林。
有期追永遠。
無政繼龔黃。
南國秋猶熱。西齋夜暫涼。
閒吟四句偈。靜對一爐香。
身老同丘井。心空是道場。
覓僧爲去伴。留俸作歸糧。
爲報山中侶。憑看竹下房。
會應歸去在。松菊莫教荒。

瓢は挂けて庭樹に留め、經は收めて屋梁に在り。
春は紅藥の圃を拋ち、夏は白蓮の塘を憶ふ。
唯塵事を捐てんと擬す、何を將て寵光に答へん。
期の永遠を追ふ有り、政の龔黃に繼ぐ無し。
南國秋猶熱く、西齋夜暫く涼し。
閒に四句の偈を吟じ、靜かに一爐の香に對す。
身老いて丘井に同じ、心空しきは是れ道場。
僧を覓めて去伴と爲し、俸を留めて歸糧と作す。
山中の侶に報せんが爲に、憑りて竹下の房を看る。
會ず應に歸り去ること在るべし、松菊をば荒れしむる莫れ。

【字解】【一】遷移　貶謫なり。【二】空王　佛の尊稱。【三】龍象　諸の阿羅漢の中、修行勇猛最大の力ある者をいふ。水行には龍、陸行には象、力最も大なればなり。新社は新しき仲間。【四】鵠鷺　貴官の仲間。故行はもとの行列。【五】北闕　宮廷。【六】西方　印度をいふ。ここは佛教の意。【七】叢林寺　廬山の東西二林寺。【八】手版　笏なり。【九】几案　机とクツ。【一〇】居士　佛道を修行する者。【一】魚章　魚符なり。野客叢談に「唐の故事に左魚を以て郡守に給し、右魚を以て郡庫に留め、郡守

官に之く毎に左魚を以て郡庫の右魚に合せて信となす」とある。【二】陽　日なり。奏は常に日に向つて傾く草なり。【三】三車　僧の名。神僧傳に「釋窮基、玄奘の弟子となり情懸を斷たず、行狀累載す。關輔語して三車和尚といふ」とある。【四】五馬　前詩に見ゆ。【五】鷲嶺　印度の山の名。佛嘗て此に居る。ここには廬山に比す。【六】香爐　廬山の峰の名。隱匿は分明ならざる貌。【七】巴字　巴の字のやうに曲折すること。三巴記に「國白二水南流し曲折すること巴字の如し」とあり、則ち嘉陵江の正源を指すなり。花花は廣き貌。【八】紅藥　紅なる芍藥。【九】龍光　君恩。【一〇】永遠　晉の僧慧永・慧遠。並に樂を道安に受け、精舍を廬山に建て、白蓮社を結んで念佛す。十八賢の目あり。而して慧遠之が冠たり。足山を出でず、客を送るには虎溪を以て界となす。【一一】龔黃　漢の循吏龔遂・黃霸をいふ。【一二】偈　佛家の詩。【一三】丘井　空井なり。【一四】道場　佛寺をいふ。

【題義】忠州刺史の官舍に在りて暇日に廬山の草堂を憶ひ、兼ねて東林・西林二寺の僧徒に寄せた詩で、江州司馬に貶せられて以來の出處進退の意を述べたのである。

【詩意】自分は嘗て天子を御諫め申す職に居たが、何の功もなかつたのであるから、江州に貶謫せられたのは當然の事である。聖天子を匡し奉る事が出來ない以上は佛にでも事へる外はない。因つて官吏の仲間をはづされて新に修行を積んで僧社に入り、廬山の東西二林寺に住し、そこに一草堂を構へた。それから專ら修行と坐禪とに精進し、笏をば枕の代りにし頭巾などは牆頭に打棄てたままで被らず、白衣を纏うて老僧の前に教を受け、煩惱を滅除して心の安靜を得ることが出來た。世間には惱が多いから身も心も久しくさいなまれ、風の浪を擊つが如く、日の霜を消すが如くであつたが、止足の道を悟つて敢て悶へなかつた。豈圖らんや聖天子は我を忘れ給はず、詔を賜うて忠州刺史に任せられ、身は靜かに水に依るの蓮となり、重ねて日を仰ぐの葵となつた。かくて廬山を去ることになつたので、識る所の法師たちが夕に會して我を送り、我は五馬を驅つて忠州に向つた。恰も前世を尋ねて去り、故郷に別れて來るやうな感があつた。遲遲として廬山を下り舟に乘つて江を遡れば、やがて香爐峰は隱隱として明かならず。ただ江水の茫茫たるを見るのみであつた。去りての後も庭樹に挂けた瓢や屋梁に收めて置いた經文を憶ひ出し、春は芍藥の園、夏は白蓮の塘に離れたことを悲んでゐる。ただ塵事を脫れることばかり考へて君恩に答へることも出來ず、廬山の法師たちに再會せんことを期するのみで、襲遂や黃霸の後を承けて治績を擧げようとも思はない。南國は秋でも熱いが此郡齋は夜は涼しいので、靜かに偶を吟じつつ香爐に對してゐる。身は老いて古井戸の如く、心は空虛で伽藍堂のやうだ。然るべき法師を求めて道連となし、俸を貯へて歸山の糧にしよう。廬山の法師たちに傳言をしたいと思ひ、誰か居ぬかと竹下の部室を看た。必ず其中には廬山に歸る時があるであらうから、どうぞ松や菊を荒さぬやうにして置いて貰ひたい。

贈康叟

康叟に贈る

八十秦翁老不歸。　八十の秦翁老いて歸らず、
南賓太守乞寒衣。　南賓の太守寒衣を乞はる。
再三憐汝非他意。　再三汝を憐むは他の意に非ず、

【字解】【一】秦翁　長安の老人。康叟を指す。【二】南賓太守　忠州刺史たる樂天自ら謂ふ。南賓は縣名。唐書地理志に「忠州南賓縣は武德二年浦州の武

天寶遺民見漸稀。（四）天寶の遺民見ること漸く稀なればなり。

【題義】康叟（康は姓、叟は翁なり）に贈つた詩である。

【詩意】長安生れの康叟は久しく此地に漂泊して八十の今日まで故郷にも歸らず、南賓太守たる我をたよつて來て寒衣を乞うた。我は再三汝の乞に應じて汝を惠むのは他の意ではない。天寶の遺民は近頃は過ふことも稀になり、何となく懷しく感ずるからである。

【字解】【四】天寶　唐の玄宗皇帝の年號。

鸚鵡

竟日語還默。中宵棲復驚。（一）身囚緣彩翠。（二）心苦爲分明。暮起歸巢思。春多憶侶聲。誰能拆籠破。（三）從放快飛鳴。

【字解】【一】竟日　終日。【二】彩翠　羽毛の美しきこと。【三】從放　縱放なり。解放といふが如し。

【題義】鸚鵡を詠じて暗に自己の境遇を悲んだ詩である。

【詩意】鸚鵡は何を訴へるのか終日語つたり又默つて考へ込んだりして居る。夜中には棲木に止つてゐても何を夢みるのか俄に驚くこともある。籠の中に囚はれてゐるのは羽毛の美の爲で、心の苦むのは其心が分明してゐるからだ。羽毛の美も心の分明もなければ、囚はれの身にもならないであらう。何が幸やら不幸やらわからないものだ。暮には故巢に歸りたい心が起り、春は昔の友を憶ふことが多いが、到底歸ることは出來ない。誰でもよいが籠を破つて解放し、自由に飛んだり鳴いたり出來るやうにしてやる者はあるまいか。

京使回。累得南省諸公書。因以長句詩寄謝蕭五・劉二・元八・吳十一・韋大・陸郎中・崔二十二・牛二・李七・庾三十二・李六・李十・楊三・樊大・楊十二員外

京使回り累に南省の諸公の書を得たり。因つて長句の詩を以て蕭五・劉二・元八・吳十一・韋大・陸郎中・崔二十二・牛二・李七・庾三十二・李六・李十・楊三・樊大・楊十二員外に寄せ謝す

雪壓泥埋未死身。雪壓し泥埋めて未だ死せざる身、

【字解】【一】京使　長安から來

毎勞存問媿交親。　毎に存問を勞して交親を媿づ。
浮萍漂泊三千里。　浮萍漂泊す三千里、
列宿參差十五人。　列宿參差たり十五人。
禁月落時君待漏。　禁月落つる時君漏を待ち、
畚烟深處我行春。　畚烟深き處我春を行る。
瘴鄉得老猶爲幸。　瘴鄉に老ゆるを得たるは猶幸たり、
豈敢傷嗟白髮新。　豈敢て白髮の新なるを傷嗟せんや。

【題義】京使が長安に歸つてから、尙書省に奉職してゐる蕭五等の舊友から累に手紙を貰つたので、此詩を寄せて謝意を表したのである。

【詩意】雪や泥に埋められて死に瀕してゐる我をば、いつもながら慰問してくれる親切は誠に辱い。我は浮草の如く三千里外に漂泊し、君等は星の如く天上に輝いてゐる。君等は禁月落ちて夜の明くる頃、定めの時刻に朝覲するであらうが、我は新田に烟の立ちのぼる處、春耕の樣を視察してあるいてゐる。併し瘴鄉にもせよ此地に老ゆるを得たのは、まだしも幸福といはねばならぬ。だから白髮の殖えた事などは決して悲みはしない。

た使。【二】南書　尙書省をいふ。大明宮の南に在る故。【三】元八　名は宗簡。【四】韋大　大は長男の稱。韋氏の長男に當る者。【五】崔二十二　名は韶。【六】李七　名は宗閔、字は損之。【七】李六　名は景儉。【八】存問　慰問といふが如し。【九】浮萍　うきくさ。樂天自ら喩ふ。【一〇】列宿　天上に列ぶ星。意五以下の十五人に喩ふ。【一一】畚烟　畚は新に開墾した田地。【一二】瘴鄉　炎熱烈しく瘴氣深き土地。

東城春意

風輭雲不動。郡城東北隅。　風輭にして雲動かず、郡城東北の隅。
晚來春澹澹。天氣似京都。　晚來春澹澹、天氣京都に似たり。
絃管隨宜有。杯觴不道無。　絃管宜しきに隨ひて有り、杯觴無しと道はず。
其如親故遠。無可共歡娛。　親故の遠くして、歡娛を共にすべきなきを其如せん。

【字解】【一】澹澹　浸き飜。【二】京都　長安。【三】親故　書友。

【題義】忠州郡城の東に稍〻春意の動きそめた事を述べた詩である。

【詩意】郡城の東の方を見るに風も穩かで雲も靜かである。夕方になつて稍〻春意の催して來たことが感ぜられ、天氣の模樣も餘程長安の都に似てゐる。心を樂ましむべき管絃もあり、酒も無いとは謂はれない。ただ舊友が皆遠方に離れてゐるので、歡樂を共にすることの出來ないのが遺憾である。

木蓮樹圖　并序　三首

木蓮樹生巴峽山谷間。巴民亦呼爲黃心樹。大者高五丈。涉冬不凋。身

如青楊有白文。葉如桂厚大無脊。花如蓮香色艶膩皆同。獨房蕊有異。四月初始開。自開迨謝僅二十日。忠州西北十里有鳴玉谿。生者穠茂尤異。元和十四年夏。命道士毋丘元志寫。惜其遐僻。因題三絶句云。

【字解】【一】巴峽　湖北省巴東縣の西二十里に在り、大江の巫山より巴東に入る處をいふ。【二】獨房　花びらの單一なること。【三】謝　花の散ること。【四】遐僻　遠くかたよること。

【訓讀】木蓮樹は巴峽山谷の間に生ず。巴民亦呼んで黄心樹となす。大なる者は高さ五丈。冬を涉りて凋まず。身は青楊の如くにして白文あり。葉は桂の如く、厚大にして脊なし。花は蓮の如く、香色艶膩皆同じ。獨房にして蕊異るあり。四月の初始めて開く。開より謝に迨るまで僅に二十日。忠州の西北十里に鳴玉谿あり。生ずる者穠茂尤も異り。元和十四年夏、道士毋丘元志に命じて寫さしむ。その遐僻を惜み、因つて三絶句を題すと云ふ。

【題義】道士毋丘元志の描いた木蓮樹の圖に題した詩である。

如折芙蓉栽旱地。
似抛芍藥挂高枝。
雲埋水隔無人識。
唯有南賓太守知。

【字解】【一】芙蓉　蓮花。旱地　は陸地。

【二】南賓太守　前の題に「南賓」に見ゆ。

【詩意】木蓮樹は丁度蓮を折つて陸地に栽ゑ、芍藥の花を高い枝に挂けたやうだ。此樹が僻遠の地に在つて雲に埋められ水に隔てられてゐるので、誰あつて識る者はなく、ただ風流好事の士たる南賓太守が知つてゐるのみだ。

〔一一〕

紅似燕支膩如粉。
傷心好物不須臾。
山中風起無時節。
明日重來得在無。

【字解】【一】燕支　ベニ。紅色の顔料。膩は滑澤なり。【二】好物　よきもの。木蓮樹を指す。

【詩意】花の紅なことは燕支のやうで、つやつやしてゐることは粉のやうだ。實に愛すべき結構な物ではあるが惜いかな永持がしない。山中には風が定まりなく起るが、明日重ねて來て見る時まで殘つてゐるであらうか。

〔一二〕

已愁花落荒巖底。
復恨根生亂石間。

已に花の荒巖の底に落つるを愁へ、復根の亂石の間に生ずるを恨む。

幾度欲移移不得。　幾度か移さんと欲して移し得ず、
天敎拋擲在深山。　天拋擲して深山に在らしむ。

【詩意】已に花の空しく荒巖の下に落ちて人の顧る者なきを愁へ、また根の亂石の間に生じて人の賞する者なきを恨み、幾度か移さんとして移し得ず。天は深山の間に拋棄して敢て惜まぬのである。

種桃杏

桃杏を種う

無論海角與天涯。　海角と天涯とを論ずる無く、
大抵心安卽是家。　大抵心安ければ卽ち是れ家。
路遠誰能念鄉曲。　路遠くして誰か能く鄉曲を念はん、
年深兼欲忘京華。　年深くして兼ねて京華を忘れんと欲す。
忠州且作三年計。　忠州且く三年の計を作し、
種杏栽桃擬待花。　杏を種ゑ桃を栽ゑて花を待たんと擬す。

【題義】桃や杏を栽ゑたことを述べた詩で、これも六句律である。卷十三の縣西郊秋寄三贈馬造二を參照せられよ。

【字解】【一】海角　海隅といふが如し。
【二】鄉曲　鄉里。
【三】京華　京師、長安なり。

【詩意】海角であらうと天涯であらうと、氣心の安い處が卽ち我が家とするに足るのである。路遠ければ故鄉を念ふこともなく、年久しくなつて長安の都をも忘れんとする位だ。忠州に轉任になつてから、兎も角も三年の任期の滿つるまではゐなければなるまいと思つて、杏や桃を栽ゑて花でも觀ようと考へてゐる。

新秋

二毛生鏡日。一葉落庭時。　二毛鏡に生ずる日、一葉庭に落つる時。
老去爭由我。愁來欲泥誰。　老い去ること爭でか我に由らん、愁へ來りて誰にか泥せん。
空銷閒歲月。不見舊親知。　空しく閒歲月を銷し、舊親知を見ず。
唯弄扶牀女。時時强展眉。　唯牀を扶する女を弄し、時時强ひて眉を展ぶ。

【字解】【一】二毛　白髮。【二】泥　柔言を以て要求すること。【三】扶牀　扶は伽に通ず。腰掛のまはりを遊びあるく童。
【三】展眉　喜んで愁眉を開くこと。

【題義】新秋に遇うて感想を述べた詩である。

【詩意】鏡を見れば白髮がいや增し、一葉庭に落ちて秋にさへなつた。老い去るは我に由るにあらねば亦如何ともすべからず、愁來るも誰に求めて掃はんやうもなく、空しく歲月を過して舊知に會ふこ

とも出來ず。ただ腰掛のまはりを這ひあるく女兒を相手にして、强ひて自ら慰めてゐるばかりだ。

龍昌寺荷池

冷碧新秋水、殘紅半破蓮。
從來寥落意、不似此池邊。

龍昌寺の荷池

冷碧なり新秋の水、殘紅半破れし蓮。
從來寥落の意、此の池の邊に似ず。

【字解】【一】龍昌寺　史州に在る寺の名。【二】寥落　荒れ果てて物淋しき貌。

【題義】龍昌寺の蓮池の詩である。

【詩意】今や新秋になつて池の水は冷かに澄み、蓮花は半破れて殘紅を留めてゐる。荒れ果てて物淋しき樣は從來の此池と全く變つてしまつた。

聽竹枝贈李侍御

巴童巫女竹枝歌。
懊惱何人怨咽多。
暫聽遣君猶悵望。
長聞教我復如何。

竹枝を聽いて李侍御に贈る

巴童巫女竹枝の歌、
懊惱何人か怨咽多き。
暫く聽くも君をして猶悵望せしむ、
長く聞かば我をして復如何せしめん。

【字解】【一】竹枝　土俗の瑣事を詠ずる歌。風土歌。【二】巴童　巴州の童兒。巫女は巫峽のあたりの女兒。【三】懊惱　なやみもだゆること。

【題義】忠州地方の竹枝を聽き、李侍御に呈した詩である。

【詩意】巴童巫女の歌ふ竹枝を聽いて誰が最も惱みもだゆるであらう。暫く聽いてすら君をして故郷を悵望せしめるのに、我は今後長く此歌を聞かねばならぬが、その懊惱は果して如何ばかりであらうか。

寄胡餅與楊萬州

胡麻餅樣學京都。
麪脆油香新出爐。
寄與飢饞楊大使。
嘗看得似輔興無。

胡餅を寄せて楊萬州に與ふ

胡麻の餅は樣京都を學び、
麪脆く油香しくして新に爐を出づ。
寄與飢饞楊大使に寄せ與ふ、
嘗め看て輔興に似たるを得るや無や。

【字解】【一】胡餅　今の燒餅なり。【二】飢饞　飢ゑて食り食ふ。【三】輔興　陝京兆・左馮翊・右扶風を三輔といふ。今の陝西省關中道の地。興は州名。古の漢中の地。蓋し楊萬州の鄉里ならん。

【題義】萬州刺史楊氏に胡餅を餽るについて添へてやつた詩である。

【詩意】この胡麻餅は都風に倣つて作られ、麪は柔かく油は香しく新に燒いて爐から出したばかりである。因つて胡麻餅に飢ゑてゐる楊大使に差上げるが、日頃御口になれた輔興製の胡餅のやうに味へ

るかどうか。

感櫻桃花因招飲客

櫻桃花に感じ因つて飲客を招く

櫻桃昨夜開如雪。　櫻桃昨夜開いて雪の如く、
鬢髮今年白似霜。　鬢髮今年白くして霜に似たり。
漸覺花前成老醜。　漸く覺ゆ花前老醜と成るを、
何曾酒後更顚狂。　何ぞ曾て酒後更に顚狂せん。
誰能聞此來相勸。　誰か能く此を聞きて來りて相勸むる、
共泥春風醉一場。　共に春風に泥して一場に醉はん。

【題義】櫻桃の花を觀て感ずる所あり客を招いて一酌しようとする詩である。

【詩意】昨夜から櫻桃の花が雪のやうに白く咲き、僕の頭髮も今年は霜のやうに白くなつた。追追花に對して老醜を感じ、今では酒後にも狂氣じみたことは出來ない。此分では酒を飲んで樂むのも永いことではないから、責めて今の中に樂んで置きたいが、誰か來て我に酒を勸めてくれる者はあるまいか。春風に飄んで共に一醉したいものぢやが。

【字解】【一】顚狂　くるひまはること。
【二】泥　柔言を以て求むること。

東亭閒望　按英華作二閒坐一。

東亭盡日坐。誰伴寂寥身。
綠桂爲佳客。紅蕉當美人。
笑言雖不接。情狀似相親。
不作悠悠想。如何度晚春。

東亭に盡日坐す、誰か寂寥の身に伴ふ。
綠桂を佳客と爲し、紅蕉を美人に當つ。
笑言接らずと雖も、情狀相親むに似たり。
悠悠の想を作さずんば、如何ぞ晚春を度らん。

東亭閒望　按するに英華に閒坐に作る

【題義】東亭で四方を閒望したといふ題意であるが、文苑英華にあるやうに閒坐と題した方が詩意には合ふやうに思はれる。

【詩意】吾は終日東亭に坐してゐる。誰が我が身の相手をしてゐるかといへば、吾は綠桂を佳客とし、紅蕉を美人と見做してゐる。綠桂や紅蕉は口こそきかぬが、心の中では我に親みを持つてゐるらしい。せめて此等を相手にして氣を霽さなくては、晚春の日を過すことが出來ない。

【字解】【一】盡日　終日。【二】紅蕉　一名美人蕉。形芭蕉に似て小、花は蓮荷に似て色紅。閩廣地方に多くあり。【三】悠悠　閒暇の貌。

畫木蓮花圖寄元郎中

律詩　感櫻桃花因招飲客　東亭閒望　畫木蓮花圖寄元郎中

木蓮花の圖を畫きて元郎中に寄す

花房膩(一)似紅蓮朶。　花房は膩にして紅蓮の朶に似、
艶色鮮如紫牡丹。　艶色は鮮にして紫牡丹の如し。
唯有詩人(二)應解愛。　唯詩人の應に解く愛すべきあり、
丹青寫出與君看。　丹青寫し出し君に與へて看しむ。

【題義】木蓮花の畫をかいて元郎中に寄せた詩である。

【詩意】花房はつやつやとして紅蓮の如く、艶麗な色は紫の牡丹のやうである。只我の能く此花を愛するあり、之を繪にかいて君の一覽に供する。

【字解】【一】膩　滑澤なること。【二】詩人　樂天自ら謂ふ。

和李澧州題韋開州經藏詩　李澧州の韋開州が經藏に題する詩に和す

既悟蓮花藏。須遺貝葉書。　既に悟る蓮花の藏、須らく貝葉の書を遺すべしと。
菩提無處所。文字本空虛。　菩提は處所無く、文字は本空虛なり。
觀指非知月。忘筌是得魚。　指を觀るは月を知るに非ず、筌を忘れて是に魚を得。
聞君登彼岸。捨筏復何如。　聞く君彼岸に登ると、筏を捨つること復何如。

【字解】【一】蓮花藏　佛經をいれる藏。【二】貝葉　貝多樹の葉。佛經はもと此葉に書いた。因つて經文の意に用ふ。【三】菩提　梵語。正覺といふが如し。【四】觀指　切經に如人以手指月示人、彼人因指當三應看月、若復觀指以月爲體、此人豈惟忘三失月輪、亦忘三其指一とある。【五】忘筌　筌は魚を取る竹器。莊子に筌者所三以在魚、得魚而忘筌。蹄者所三以在兎、得兎而忘蹄とある。【六】彼岸　煩惱を脱せず人間に迷ふを此岸となし、證果を得たる者を彼岸となす。

【題義】澧州刺史李建（字は杓直）の開州刺史韋大（大は長男の稱）が經藏に題した詩に和したのである。

【詩意】君は經藏を建てて經文を收藏し、之を後世に遺すさうぢやが、それは結構な事ぢや、併し悟といふものは一定の場所に據るにあらず、また空虛なる文字の末に由るのでもない。月を指して示す時、指を觀る者は眞に月を知つた者ではない。筌を忘れてこそ魚が得られるのだ。聞けば君は眞の悟道に入つたさうぢやが、筏を捨てて彼岸に登つた氣持は如何であるか。

九日題塗谿　九日塗谿に題す

蕃艸席鋪楓葉岸。　蕃艸席のごとく鋪く楓葉の岸、
竹枝歌送菊花杯。　竹枝歌送る菊花の杯。
明年尙作南賓守。　明年尙南賓の守と作らば、
或可重陽更一來。　或は重陽に更に一たび來る可し。

【字解】【一】蕃艸　忠州は南方の蕃地に近いから、かくいうた。【二】竹枝　土俗の瑣事を詠ずる歌。風土歌。菊花杯は菊花をうかべた酒。重陽には此酒を飲んで息災を祈る風習あり。【三】南賓　前の贈三康叟一を見よ。

【題義】九月九日、重陽の節句に塗縣に遊んで作つた詩である。

【詩意】楓葉の美しく紅を呈する岸に、草の敷物のやうに柔かに生えた處へ陣取つて、竹枝の歌を歌ひながら菊花の酒を酌んだ、來年も忠州刺史でゐるならば、もう一度ここに來て遊ぶであらう。此處には遊びたし、早く貶謫を赦されて都には歸りたし、心二つに身は一つぢや。

卽事寄微之

卽事、微之に寄す

畲田澁米不耕鉏。
旱地荒園少菜蔬。
想念土風今若此。
料看生計合何如。
衣縫紕類黃絲絹。
飯下腥鹹白小魚。
飽暖飢寒何足道。
此身長短是空虛。

畲田の澁米は耕鉏せず、
旱地の荒園は菜蔬少なり。
想ひ念ふに土風今此の若し、
料り看るに生計合に何如すべき。
衣は縫ふ紕類黃絲の絹、
飯は下す腥鹹白小の魚。
飽暖飢寒何ぞ道ふに足らん、
此の身の長短は是れ空虛。

【字解】〔一〕畲田　新に開墾した田地。耕鉏の鉏は鋤なり、耕作の意。
〔二〕旱地　陸地。
〔三〕生計　活計。
〔四〕紕類　ふしいと。
〔五〕腥鹹　なまぐさく、しほからし。

【題義】目前の實況を敍して元稹に寄せた詩である。

【詩意】新田を耕作して粗米を穫ることもせず、畠は荒れ果てて野菜が作つてあるでもない。想ふに此地の風土は此の如くである。これでは我が將來の活計がどうして立てられようぞ。節絲の絹を縫ひ合せた粗服を纏ひ、腥くて鹹い白小魚で飯を呑み下すといふ有樣である。併し考へて見れば生活の飽暖飢寒などは實は言ふに足らぬ問題である。此身の壽夭さへわからず、まるで一寸先は闇なのだから。

題郡中荔枝詩十八韻。兼寄楊萬州八使君

郡中の荔枝に題する詩十八韻、兼ねて楊萬州八使君に寄す

奇果標南土。芳林對北堂。
素華春漠漠。丹實夏煌煌。
葉捧低垂戶。枝擎重壓牆。
始因風弄色。漸與日爭光。
夕訝條懸火。朝驚樹點粧。
深於紅蹶躅。大校白檳榔。

奇果南土に標れ、芳林北堂に對す。
素華春漠漠、丹實夏煌煌。
葉捧げて低く戶に垂れ、枝擎げて重く牆を壓す。
始は風に因りて色を弄び、漸く日と光を爭ふ。
夕には條の火を懸くるかと訝り、朝には樹の粧を點ずるかと驚く。
紅躑躅よりも深く、校白檳榔よりも大なり。

星綴連心朶。珠排耀眼房。
紫羅裁襯殼。白玉裹塡瓤。
早歲曾聞說。今朝始摘嘗。
嚼疑天上味。嗅異世間香。
潤勝蓮生水。鮮逾橘得霜。
燕支掌中顆。甘露舌頭漿。
物少尤珍重。天高苦渺茫。
已教生暑月。又使阻遐方。
粹液靈難駐。妍姿嫩易傷。
近南光景熱。向北道途長。
不得充王賦。無由寄帝鄉。
唯君堪擲贈。面白似潘郎。

【字解】【一】南土　忠州を指して言ふ。【二】素蘂　白き花。漠漠は布列する皃。【三】丹實　赤き果實。煌煌は照り輝く皃。【四】紅蕖蘭　赤きつつじの花。【五】白檳榔　樹の名。【六】紫羅　紫の薄絹。襯は下着にする。【七】瓤　果實の中の肉。【八】燕支　紅色の顔料。【九】遐方　遠方。【一〇】妍姿　美しき姿。【一一】王賦　天子に奉つる貢物。【一二】帝鄉　帝都、長安。【一三】潘郎　晉の潘岳、姿儀美し。嘗て洛陽の道に出づれば、婦人の之に遇ふ者皆手を連れて葉擲し、之に投ずるに果を以てす。

【題義】　忠州の荔枝に題した十八韻三十六句の長律で、萬州刺史楊氏に寄せたものである。八は排行、使君は刺史の稱。白樂天の作に、荔枝圖序と題する文があるから參考の爲に其全文を此に掲げよう。

荔枝は巴峽の間に生じ、樹の形團圞として帷蓋の如く、葉は桂の如くにして冬青し、華は橘の如くにして春榮ゆ。實は丹の如くにして夏熟す。紫なること蒲萄の如く、核は枇杷の如く、殼は紅綃の如く、膜は紫綃の如く、瓤肉は瑩白なること氷雪の如く、漿液は甘酸なること醴酪の如し、大略彼が如くにして其實は之に過ぐ。若し本枝を離るれば一日にして色變じ、二日にして香變じ、三日にして味變じ、四五日の外は色香味盡く去る。元和十五年夏、南賓の守樂天工史に命じて圖して之を書せしむ。蓋し識らざる者と識りて一二三日に及ばざる者との爲にすと云ふ。

【詩意】　南方の忠州に珍しい果樹がある。林を成して我が北堂に對してゐる。春は白い花が漠漠として咲きそろひ、夏は赤い實がきらきらと輝き、枝葉の間に垂れて牆を壓するばかりになり、風にゆられて色を弄し、日と其光を爭ふに至り、夕には枝に火の懸るかと怪まれ、朝には樹に化粧を施したかと驚く位である。その紅なることは躑躅にまさり、且つ檳榔樹の實よりも大きく、星の連なるが如く珠の排ぶが如くで、殼の下には紫の薄絹のやうな膜があつて、中に白玉のやうな肉を藏してゐる。嘗て話には聞いてゐたが食べるのは今が始めてである。其風味は天上の物の如く香氣も此世の物ではな

い。蓮の實よりも潤があり橘よりも鮮かである。手に取れば燕支の珠の如く、舌に載せると甘露の漿の如くである。此物は生憎夏熟し且遠方に產し、色香が永く持たないから、遠く北方に送りて天子機へ獻上することも出來ない。ただ潘郎のやうな美貌の持主たる君には差上げることが出來る。

留北客

北客を留む

峽外相逢遠。樽前一會難。峽外相逢ふこと遠く、樽前一たび會ふこと難し。
卽須分手別。且强展眉歡。卽ち須らく手を分ちて別るべし、且く强ひて眉を展べ歡ぶ。
楚袖蕭條舞。巴絃趣數彈。楚袖蕭條として舞ひ、巴絃趣數として彈ず。
笙歌隨分有。莫作帝鄉看。笙歌分に隨ひて有り、帝鄉の看を作す莫れ。

【字解】【一】展眉　愁眉を開く。【二】楚袖　楚地の絃の舞袖。蕭條は淋しき貌。【三】巴絃　巴峽の邊の絃の絃聲。趣數は絃聲の急なこと。【四】帝鄉　帝都長安。

【題義】北方長安から來た客を引留めて別れの宴を催したことを述べた詩である。

【詩意】君と遠く峽外で相逢うたが、この後樽前に又會ふことは期し難い。今手を分つて別るるに方り、强ひて一酌して愁を霽さうではないか。舞妓の袖も物淋しく、絃聲も急促で何となく物足りないが、併し場所柄相當の所であらう。長安と同一視してはいけない。

重寄荔枝與楊使君。時聞楊使君欲種植。故有落句之戲

重ねて荔枝を寄せて楊使君に與ふ、時に楊使君種植せんと欲すと聞く。故に落句の戲あり

摘來正帶凌晨露。摘み來れば正に晨を凌ぐ露を帶び、
寄去須憑下水船。寄せ去るは須らく水を下る船に憑るべし。
映我緋衫渾不見。我が緋衫に映じて渾て見えず、
對公銀印最相鮮。公の銀印に對して最も相鮮なり。
香連翠葉眞堪畫。香は翠葉に連なりて眞に畫くに堪へ、
紅透青籠實可憐。紅は青籠に透りて實に憐む可し。
聞道萬州方欲種。聞道く萬州方に種ゑんと欲すと、
愁君得喫是何年。愁ふ君が喫するを得るは是れ何年ぞ。

【題義】重ねて萬州刺史楊八に荔枝を寄贈する時に作つた詩で、楊八が萬州に此種を植ゑようと欲す

【字解】【一】緋衫　紅色の上衣。刺史の服。【二】銀印　刺史の印。【三】可憐　愛すべしの意。

る由を聞いて結句に戯言を弄したのである。

【詩意】朝露のついた儘荔枝の果を摘み來り、之を長江を下る船に託して君に寄贈する。果の赤き色は我が緋衫に映じて全く消されてしまふが、君の銀印に對しては最も鮮に見えるであらう。香氣は綠の葉と共に畫くに堪へ、紅色は青い竹籠を透して愛すべきこと限ない。聞けば君は萬州に此種を植ゑようとしてゐるさうだが、氣の毒な事に、何年その實を賞味することが出來るであらう。

和萬州楊使君四絶句

競渡　競渡　萬州の楊使君に和する四絶句

競渡相傳爲汨羅。
不能止遏意無他。
自經放逐來憔悴。
能校靈均死幾多。

競渡相傳へて汨羅となす、
止遏する能はず意他無し。
放逐を經てより來憔悴せり、
能く靈均が死に校べて幾多ぞ。

【題義】萬州刺史楊氏（使君とは刺史の稱）に和して作つた四首の絶句で、第一は競渡の詩である。

【詩意】汨羅に投じて死んだ屈原の魂を招く爲に古來傳ふる所の競渡をなし、それを止める事の出來ないのには其處に深意があるのだ。貶謫の憂目に遇うてから益〻憔悴してしまつて、此分では屈原のやうな最後になるのも、あまり遠いことではないからだ。

【字解】〔一〕競渡　船の競走。荆楚歲時記に「屈原五月五日を以て汨羅に投ず。故に武陵此日を以て競渡をなし以て之を招く、唐人は三月三日を以て招魂節となす」とある。汨羅は屈原の身を投じて死んだ川の名。〔二〕憔悴　やせ衰へる。〔三〕靈均　屈原なり。

江邊艸　江邊の艸

聞君澤畔傷春艸。
憶在天門街裏時。
漠漠淒淒愁滿眼。
就中惆悵是江蘺。

聞く君が澤畔に春艸を傷むと、
憶ふ天門街裏に在りし時。
漠漠淒淒愁眼に滿つ、
就中惆悵するは是れ江蘺。

【題義】江邊の草を見て心を傷ましむる事を述べた詩である。

【詩意】聞けば君は貶せられて萬州に在り、澤畔に行吟して春草を傷んでゐるさうな。それを聞くにつけても昔長安に時めいてゐた頃の事が憶はれる。見渡す限り漠漠淒淒として愁を惹起す春草の中でも、最も心を傷ましめるのは江蘺であらう。

【字解】〔一〕天門街　長安の街名。〔二〕漠漠淒淒　春草の生ずる貌。〔三〕江蘺　香草の名。

嘉慶李　嘉慶李

東都綠李萬州栽。

東都の綠李萬州に栽う、

君手封題我手開。　君手づから封題して我手づから開く。
把得欲嘗先悵望。　把り得て嘗めんと欲して先づ悵望す、
與渠同別故鄉來。　渠と同じく故郷に別れて來る。

【題義】嘉慶李は韋述の兩京記に「東都（洛陽）の嘉慶坊に李樹あり。其實甘鮮京都の美たり。故に嘉慶李と稱す」とある。

【詩意】東都の嘉慶李を萬州に栽ゑ、其實が熟したので君自ら封裝し、上書して我に寄せた。我は封を開いて食べようとして先づ都の空を悵望した。我も彼と同じく故郷に別れてゐる身であるから。

【字解】【一】封題　封をして、うはがきする。【二】渠　彼なり。嘉慶李を指す。

白槿花

秋葬晚英無艶色。　秋葬晚く英きて艶色無し。
何因栽種在人家。　何に因りてか栽種して人家に在る。
使君只別羅敷面。　使君只別つ羅敷の面、
爭解回頭愛白花。　爭か解く頭を回らして白花を愛せん。

白槿花

駁、李可二共載二不、羅敷前致レ辭、云云とあつて、羅敷が使君の誘惑を拒絶した事を詠じてある。

【題義】白い木槿の花を詠じた詩である。

【詩意】木槿が秋の末に花を開いたが、一向に見映がない。なぜこんなつまらない物を人家に植ゑたのであらう。使君は羅敷の顏だけは能く見分けるが、こんな花などは見向いても見はしない。

【字解】【一】秋葬　木槿。【二】使君　萬州刺史楊氏を指す。別とは特別に見分けること。卷十五の感題一盧祕書新移菩薩一を見よ。羅敷は女子の名。陌上桑歌に、その美貌を評述せる後、使君從レ南來、五馬立踟躕、使君遣レ吏往、問是誰家姝、使君謝二羅敷一、寧可二共載一不、羅敷前致レ辭、云云とあつて、羅敷が使君の誘惑を拒絶した事を詠じてある。

和行簡望郡南山

反照前山雲樹明。　反照前山雲樹明かなり、
從君苦道似華清。　君が苦に華清に似たりと道ふに從ず。
試聽腸斷巴猿叫。　試みに聽け腸斷ゆる巴猿の叫ぶを、
早晚驪山有此聲。　早晚驪山に此聲有り。

【題義】弟行簡の郡（忠州を指す）の南山を望んで作つた詩に和したのである。

【詩意】夕日が南山に照りかへして、雲に聳ゆる樹木がありありと見える。君（行簡を指す）はその景色が華清宮に似てゐると言ふが、なるほどさうでもあらう。併し耳を傾けてあの巴猿の人の腸を千切るやうな聲を聽け、朝にせよ晚にせよ、驪山にあんな悲い聲があるか。決してありはしまい。

【字解】【一】反照　夕日のてりかへすこと。【二】華清　陝西省臨潼縣の南なる驪山の上に在る離宮の名。【三】巴猿　巴峽の猿。【四】早晚　朝にせよ晚にせよといふ意。夜航餘話上卷に詳なり。

望郡南山

郡の南山を望む

臨江一嶂白雲間。　江に臨む一嶂白雲の間、
紅綠層層錦繡斑。　紅綠層層錦繡斑なり。
不作巴南天外意。　巴南天外の意を作さずんば、
何如昭應望驪山。　何如ぞ昭應に驪山を望まん。

【題義】 注立名曰はく「按ずるに此詩もと行簡の作なり。今の本誤つて望郡南山寄行簡に作る」と。

【詩意】 長江に臨んで一山が白雲の間に聳え、木の葉は或は綠に或は紅に、層を成して錦のやうに美しい、天外の忠州に貶謫せられて憂目に遇はなければ、昭應縣から驪山を望むに似た懷かしい此景色は見られなかつたであらう。

【字解】 【一】 巴南　巴峽の南。忠州を指す。
【二】 昭應　縣の名。宮あり、驪山の下に在り。

種荔枝

紅顆珍珠誠可愛。　紅顆珍珠誠に愛す可し、
白鬚太守亦何癡。　白鬚の太守亦何ぞ癡なる。
十年結子知誰在。　十年子を結ぶも知んぬ誰か在る、
自向庭中種荔枝。　自ら庭中に向ひて荔枝を種う。

【題義】 荔枝を植ゑることを述べた詩である。

【詩意】 荔枝の果は紅玉の如く眞珠の如くで甚だ愛すべき色である、之を植ゑる太守は何と愚者であらう。これが十年たつて實がなる頃までどうして生きてゐられるであらうか。それをも知らずに庭の中にせつせと植ゑてゐる。

【字解】 【一】 荔枝　果樹の名。前の題「郡中荔枝」詩十八觀。樂營「楊萬州八使君」の題義に詳なり。【二】 紅顆　紅玉。【三】 白鬚太守　忠州太守。樂天自ら謂ふ。癡は愚なり。
【四】 知　知らずの意。

陰雨

嵐霧今朝重。江山此地深。
灘聲秋更急。峽氣曉多陰。
望闕雲遮眼。思鄉雨滴心。
將何慰幽獨。賴此北窓琴。

【字解】 【一】 雨　一に淚に作る。

【題義】 陰雨寂寥の景況を敍した詩である。

【詩意】 今朝は雲霧が特に深く、此邊は江山が錯綜してゐる。江は秋になつて灘聲が更に急に、山は

雲氣が曉に深く罩めてゐる。長安の宮闕を望めば雲が目を遮つて見えず、故郷を思へば涙が雨のやうに落ちる。何を以て淋しき心を慰めんか。ただ北窓の琴を彈ずるのみである。

送客歸京

客の京に歸るを送る

水陸四千里。何時歸到秦。
舟辭三峽雨。馬入九衢塵。
有酒留行客。無書寄貴人。
唯憑遠傳語。好在曲江春。

水陸四千里、何の時か歸りて秦に到らん。
舟は三峽の雨を辭し、馬は九衢の塵に入る。
酒の行客を留むるあり、書の貴人に寄する無し。
唯憑む遠く語を傳へんことを、好在なれ曲江の春と。

【字解】【一】秦　長安。古の秦の都なるゆゑ、かくいふ。【二】三峽　長江の雄峰。【三】九衢　長安の市街。【四】好在　ごきげんようといふ意。曲江は長安の苑池の名。

【題義】長安に歸る客を送る詩である。

【詩意】君は水陸四千里の長途を經て、いつ頃長安に歸り著くであらうか。三峽の雨を冒して舟出し馬に跨つて長安の塵に入るであらう。君を留めて離宴を催したが、長安の貴人に寄せる手紙などはない。ただ君に願むが長安の春に「健在なれ」と傳言をしてもらひたい。

送蕭處士遊黔南

蕭處士の黔南に遊ぶを送る

能文好飲老蕭郎。
身似浮雲鬢似霜。
生計拋來詩是業。
家園忘却酒爲鄉。
江從巴峽初成字。
猿過巫陽始斷腸。
不醉黔中爭去得。
磨圍山月正蒼蒼。

文を能くし飲を好む老蕭郎、
身は浮雲に似て鬢は霜に似たり。
生計拋ち來りて詩は是れ業、
家園忘却して酒を鄉と爲す。
江は巴峽より初めて字を成し、
猿は巫陽を過ぎて始めて腸を斷つ、
醉はずんば黔中に爭でか去り得ん、
磨圍山月に正に蒼蒼。

【字解】【一】生計　活計なり。【二】巴峽　三峽の一。ここから江水が屈曲して巴の字の形になる。【三】巫陽　巫峽の南。【四】磨圍　山の名。黔南に在るのであらう。蒼蒼は深青の意。

【題義】蕭處士（處士は仕へざる者の稱、蕭は其姓）の黔南（貴州省の地名）に遊ぶのを送る詩である。

【詩意】我が老蕭郎は文を能くし酒を好み、身は浮雲に似て鬢は霜の如く白い。此世の生計を拋ち去つて詩を業とし、故郷をも忘れて酒を鄉と心得てゐる。君は今此地を去つて巴峽の難處を過ぎ巫峽の猿聲を聞きつつ遠く黔南に往くのであるが、酒の力を借りて旅愁を除かなければ、到底黔南には往か

れまい。現に廬山上の月が蒼蒼として人を愁へしめてゐる。どうぞ十分に醉を盡してくれよ。

【餘論】唐宋詩醇に「音節悲涼、淸歌を聞かば應に奈何と嘆ぶべき」と評してある。山川風土の狀、友朋離合の感が能く現はれてゐる。

東樓醉

東樓に醉ふ

天涯深峽無人地。　天涯深峽人無き地、
歲暮窮陰欲夜天。　歲暮れて窮陰夜ならんと欲する天。
不向東樓時一醉。　東樓に向ひて時に一醉せずんば、
如何擬過二三年。　如何ぞ二三年を過さんと擬せん。

【題義】忠州城の東樓に一醉した時の詩である。

【詩意】天涯の深峽の人もあまり住まない地に、歲の暮の寒い夜を淋しく送る身は、せめて東樓に登つて酒でも飲まなくては、どうして二三年の任期を過されようぞ。

寄微之 時微之爲虢州司馬。

微之に寄す　時に微之は虢州司馬たり

高天默默物茫茫、　高天默默物茫茫、
各有來由致損傷。　各〻來由有りて損傷を致す。
鸚爲能言長翦翅。　鸚は能く言ふが爲に長く翅を翦られ、
龜緣難死久搘牀。　龜は死し難きに緣りて久しく牀を搘ふ。
莫嫌冷落拋閒地。　嫌ふ莫れ冷落して閒地に拋たるるを、
猶勝炎蒸臥瘴鄉。　猶炎蒸せられて瘴鄉に臥すに勝れり。
外物竟關身底事。　外物は竟に身の底事に關かる、
謾排門戟繫腰章。　謾に門戟を排して腰章を繫く。

【題義】虢州司馬たる元稹に寄せた詩である。

【詩意】天は默默として言はず物は茫茫として頓と眞意がわからないが、損傷を招くには皆それぞれ由來があるのだ。鸚鵡は能く人語を弄するから籠の中に飼はれ、龜は長生であるから臺石などにされるので、その身の長所が却つて仇をなすのである。されば君は落ちぶれて虢州に貶せられたことを嫌はぬがよい。僕のやうに蒸されるやうに熱い瘴鄉にゐるよりは遙にましである。一體身外の名利などは我が身に何の關係もないものだ。然るに此理を知らぬ世の痴者どもは、得て門戟を排べたり腰章を

【字解】【一】冷落　おちぶれる。閒地は虢州を指して言ふ。
【二】瘴鄉　毒氣の深き地。忠州を指して言ふ。
【三】外物　名利をいふ。
【四】門戟　貴顯の家の門前には戟を列ねて飾となす。腰章は腰に佩ぶる印章。

繫けたりしたがるものだ。

東樓招客夜飲　東樓に客を招き夜飲む

莫辭數數醉東樓。　辭することなかれ數數東樓に醉ふを、
除醉無因破得愁。　醉を除けば愁を破り得るに因無し。
唯有綠樽紅燭下。　唯綠樽有り紅燭の下、
暫時不似在忠州。　暫時忠州に在るに似ず。

【題義】東樓に客を招待して夜酒を飲んだことを述べた詩である。
【詩意】屢〻東樓に登つて酒を飲むことを辭するな、醉を除いては、他に愁の霽しやうがないではないか。ただ紅燭の下に綠酒を酌めば、暫時は忠州に貶せられてゐるのも忘れることが出來る。

【字解】【一】冬凌　冬の氷。
【二】律僧　禪僧。

醉後戲題　醉後戲に題す

自知清冷似冬凌。　自ら知る清冷冬凌に似たるを、
每被人呼作律僧。　每に人に律僧と呼び作さる。

今夜酒醺羅綺煖。　今夜酒醺して羅綺煖かに、
被君融盡玉壺氷。　君に融盡せらる玉壺の氷。

【題義】醉後に戲に作つた詩である。大分味な處をもらしたものらしい。
【詩意】平生は冬の氷のやうに枯淡な生活をしてゐるので、人からは禪僧のやうに謂はれてゐるが、今夜は一杯傾けた上に綾衣にくるまつて煖かに寢たので、玉壺の氷がすつかり融けたやうな感じがする。

【字解】【三】羅綺　あやぎぬ。

冬至夜　冬至の夜

老去襟懷常濩落。　老い去りて襟懷常に濩落、
病來鬚髮轉蒼浪。　病み來りて鬚髮轉た蒼浪。
心灰不及爐中火。　心灰は爐中の火に及ばず、
鬢雪多於砌下霜。　鬢雪は砌下の霜よりも多し。
三峽南賓城最遠。　三峽南賓城最も遠し、
一年冬至夜偏長。　一年冬至夜偏に長し。

【字解】【一】襟懷　心持。濩落　はうつろなる貌。
【二】蒼浪　白髮にならんとする貌。
【三】心灰　心氣の冷却すること。
【四】三峽　長江の上流に在る難處。南賓は前の贈三康叟一の南賓太守を見よ。
【五】房櫳　部屋。

今宵始覺房櫳冷。　今宵始めて覺ゆ房櫳の冷かなるを、
坐索寒衣詎孟光。　坐ろに寒衣を索めて孟光に詎す。

【題義】冬至の夜の況味を敍した詩である。

【詩意】老いては心が藥拔の殼になり、病んでは頭髮も白くなる。心は全く活氣を失つて爐中の火に及ばず、鬢の雪は庭上の霜よりも白い。吾が居る忠州は都を距ること遠く、今夜は一年中最も夜の長い晩である。それが爲か何となく部屋の寒きを感じて、坐に妻を煩はして衣を襲ねた。

【文】孟光　後漢の梁鴻の賢妻。因つて妻の意に用ふ。詎は柔言して物を求むること。

竹枝詞　四首

瞿塘峽口水煙低。　瞿塘峽口水煙低れ、
白帝城頭月向西。　白帝城頭月西に向ふ。
唱到竹枝聲咽處。　唱へて竹枝の聲咽ぶ處に到れば、
寒猿闇鳥一時啼。　寒猿闇鳥一時に啼く。

【題義】竹枝は土俗の瑣事を詠ずる風土歌である。

【詩意】瞿塘峽の入口には水煙が低く罩め、白帝城の上には月が西に傾いてゐる。竹枝の哀調を歌ふときは、流石に悲みを催すと見えて、寒猿闇鳥が一時に啼き出す。

【字解】【一】瞿塘峽　三峽の一。江の上流の險處。
【二】白帝城　四川省奉節縣の東に在る。
【三】闇鳥　暗中に鳴く鳥の聲。

〔一〕

竹枝苦怨怨何人。　竹枝苦だ怨む怨むは何人ぞ、
夜靜山空歇又聞。　夜靜かに山空しく歇みて又聞ゆ。
蠻兒巴女齊聲唱。　蠻兒巴女聲を齊うして唱ふ、
愁殺江南病使君。　愁殺す江南の病使君。

【詩意】竹枝の歌は哀怨が深いが誰があんなに怨むのであらう。夜も靜まつた空山の中に、歌んだり聞えたりしてゐる。そは他人ではない蠻兒巴女が聲を合せて歌ふのであつた。その聲が江南忠州の病刺史を殊に愁へしめる。

【字解】【一】蠻兒　南方蠻地の男。巴女は巴峽の邊の女。
【二】愁殺　うれへしめる。病使君は樂天自ら謂ふ。使君は刺史の稱。

〔二〕

巴東船舫上巴西。　巴東の船舫巴西に上り、
波面風生雨脚齊。　波面風生じて雨脚齊し。
水蓼冷花紅簇簇。　水蓼の冷花紅簇簇、
江蘺濕葉碧凄凄。　江蘺の濕葉碧凄凄。

【字解】【一】船舫　船。
【二】簇簇　むらがり咲く貌。
【三】江蘺　香草の名。凄凄は寒き貌。

【詩意】巴東の船が峽を上つて巴西に往かうとする。折しも水上には風波が起り雨さへ降つて來た。岸に生えてゐる蓼の花が簇り咲いて紅を呈し、江蘺のぬれた綠葉が寒げに見える。

〔四〕

江畔誰人唱竹枝。
前聲斷咽後聲遲。
怪來調苦緣詞苦。
多是通州司馬詩。

〔四〕

江畔誰人か竹枝を唱ふる、
前聲斷え咽び後聲遲し。
怪み來る調の苦きは詞の苦きに緣る、
多くは是れ通州司馬の詩。

【詩意】江畔で誰が竹枝を歌ふのであらう。前の聲が斷え咽び後の聲が仲仲續かない。その聲調の哀切なのは實は其詞が哀切であるからであつた。その詞といふのは多くは通州司馬の作である。

酬嚴中丞晚眺黔江見寄　　嚴中丞が晚に黔江を眺めて寄せられしに酬ゆ

江水三廻曲。愁人兩地情。
磨圍山下色。明月峽中聲。
晚後連天碧。秋來徹底清。
臨流有新恨。照見白鬚生。

江水三廻の曲、愁人兩地の情。
磨圍山下の色、明月峽中の聲。
晚れて後天に連なりて碧に、秋來りて底に徹して清し。
流に臨みて新恨有り、照し見る白鬚の生ずるを。

【字解】【一】黔江　川の名。廣西省の境に在り、其源は雲南省の烏蒙山脈中より出づ。【二】兩地　樂天の居る忠州と、嚴中丞の居る黔南。【三】磨圍山　黔南に在る山の名。前の送嚴處士遊三黔南一を見よ。【四】明月峽　今の四川省巴縣の境に在り、樂天の居る處。

【題義】嚴中丞（嚴は姓、中丞は御史中丞、此人も黔南に貶せられてゐる）が日暮に黔江を眺めた詩を寄せたので樂天が其れに酬いたのである。

【詩意】江水は幾たびか屈曲し、君と僕とは遠く離れて共に愁へ、君は磨圍山下の水色を眺め、僕は明月峽中の水聲を聞き、相俱に斷腸の思をなしてゐる。夕方になれば江水が天に連なつて綠に、秋になつてからは底まで澄んで見える。江流に對すれば更に新恨を催し白鬚の顏を水鏡に寫して見た。

寄題楊萬州四望樓　　楊萬州の四望樓に寄題す

江上新樓名四望。
東西南北水茫茫。
無由得與君攜手。
同凭欄干一望鄉。

江上の新樓四望と名づく、
東西南北水茫茫。
君と手を攜ふるを得て、
同く欄干に凭りて一たび鄉を望むに由なし。

【題義】楊萬州は前に見ゆ。寄題とは其地に到らずして遙に寄せ題すること。

【字解】【一】茫茫　ひろびろしてゐること。

【詩意】君は江邊に新樓を築き四望と名づけ、東西南北いづれを見ても水が茫茫として涯もなく廣がつてゐるさうだ。君と手を攜へて俱に欄干に凭り故郷を望みたいものだが、自由を許されぬ身には其れも叶はず、誠に殘念である。

答楊使君登樓見憶

楊使君が樓に登りて憶はれしに答ふ

忠萬樓中南北望。　忠萬樓中南北を望めば、
南州煙水北州雲。　南州は煙水北州は雲。
兩州何事偏相憶。　兩州何事ぞ偏に相憶ふ、
各是籠禽作使君。　各〻是れ籠禽使君と作る。

【題義】萬州刺史楊氏が樓に登つて遙に忠州の方を望み樂天を憶うたといふ詩に答へたのである。

【詩意】僕は忠州に居り君は萬州にゐて南北相望めば、南の忠州は煙水茫茫として居り、北の萬州は雲に遮られて見えない。お互に貶謫せられて籠の禽となり刺史となつてゐるので、同病相憐む所から相憶ふの情も深いわけである。

【字解】【一】忠萬　二州の名。樂天は忠州に在り、楊使君は萬州に在る。

【二】使君　刺史の稱。

除夜

歲暮紛多思。天涯渺未歸。　歲暮紛として思多し、天涯渺として未だ歸らず。
老添新甲子。病減舊容輝。　老いて新甲子を添へ、病みて舊容輝を減ず。
鄉國仍留念。功名已息機。　鄉國仍念を留め、功名已に機を息む。
明朝四十九。應轉悟前非。　明朝四十九、應に轉た前非を悟るべし。

【字解】【一】紛　衆多の貌。【二】渺　遙なる貌。【三】新甲子　新なる齡。【四】舊容輝　もとの容色。【五】息機　機心をやめる。得たいと思はぬこと。【六】前非　從來の過失。淮南子原道訓に「蘧伯玉年五十にして四十九年の非あり」とある。

【題義】大晦日の夜の感慨を述べた詩である。

【詩意】歲の暮に臨むと特に感慨が深い。まして天涯に漂泊してゐる身は尙更である。老いて更に新齡を重ね、病んで舊の容色が衰へ、故郷の事は今でも忘れないが、功名の念は全く絕えた。明朝は四十九になる。蘧伯玉ではなくても、そろそろ前非を悟るべき年頃になつて來た。

聞雷

雷を聞く

瘴地風霜早。溫天氣候催。　瘴地風霜早く、溫天氣候催す。
窮冬不見雪。正月已聞雷。　窮冬雪を見ず、正月已に雷を聞く。

震蟄蟲蛇出。驚枯艸木開。蟄を震ひて蟲蛇出で、枯を驚かして艸木開く。
空餘客方寸。依舊似寒灰。空しく餘す客の方寸、舊に依りて寒灰に似たり。

【字解】〔一〕瘴地　炎熱の地。忠州を指していふ。〔二〕蟄蟄　穴ごもりの蟲を震ひ驚かす。禮記月令に「仲春の月雷乃ち聲を發し、蟄蟲みな動く」とある。〔三〕客方寸　客は樂天自ら謂ふ。方寸は心なり。

【題義】春雷の聲を聞いて作つた詩である。

【詩意】暖國は氣候の進みが早く、正月になると大分溫かになる。窮冬にも雪を見ないが、正月になると最早雷が鳴る、冬籠の蟲も動き出し枯木も芽を吹き出すが、ただ他鄉に漂泊する我が心は、相變らず寒灰の如くで少しも生氣がない。

春至

若爲南國春還至。若爲ぞ南國春還至る、
爭向東樓日又長。爭ひて東樓に向ひて日又長し。
白片落梅浮澗水。白片の落梅澗水に浮び、
黃梢新柳出城墻。黃梢の新柳城墻を出づ。

【字解】〔一〕南國　忠州を指して言ふ。〔二〕東樓　注本には東流に作る。

春至る

開拈蕉葉題詩詠。開に蕉葉を拈りて詩を題して詠じ、
悶取藤枝引酒嘗。悶して藤枝を取りて酒を引きて嘗む。
樂事漸無身漸老。樂事漸く無くして身漸く老ゆ、
從今始擬負風光。今より始めて風光に負かんと擬す。

【題義】春が新に巡つて來た時の情景を述べた詩である。

【詩意】待ちもせぬのに又忠州に春が巡つて來て、春の日ざしを吾が東樓に投げ、いやが上にも日の長きを感ぜしめる。白い梅の花が落ちて澗水に浮び、淺黃色の新柳が牆の外に出てゐる。靜かに芭蕉の葉を拈つて詩を題して見たり、煩悶の極、藤の枝を弄して酒を飲みなどして見たが、年を取るに隨つて樂みも無くなり、何を見てもつまらない。今後は全く風光をよそに日を送らうと思ふ。

【語】藤枝　博物志に「酒杯藤は西域に出づ。藤の大きさ臂の如く、業は葛に似、花實は梧桐の如し。實堅くして杯となすべし云云」とある。以て酒と藤と緣故のあることがわかる。

感春

巫峽中心郡。巴城四面春。巫峽中心の郡、巴城四面の春。
草青臨水地。頭白見花人。草は青し水に臨む地、頭は白し花を見る人。
憂喜皆心火。榮枯是眼塵。憂喜は皆心火、榮枯は是れ眼塵。

春に感ず

除非一杯酒。何物更關身。一杯の酒を除非して、何物か更に身に關せん。

【字解】【一】巫峽　前に見ゆ。【二】巴城　巴州。【三】除非　とりのぞく。

【題義】春に感じて作つた詩である。

【詩意】巫峽を中心として巴州のあたりは一帶に春である。江に臨んで岸草青く、花に對する我が髮は白い。憂喜は心の火のやうなもので、榮枯は眼の塵のやうなものだ。そんなものは深く頓著するに足らぬ。ただ酒を措いては外に何物も我が身に關係はない。

春江

炎涼昏曉苦推遷。不覺忠州已二年。
閉閣只聽朝暮鼓。上樓空望往來船。
鶯聲誘引來花下。草色勾留坐水邊。

【字解】【一】朝暮鼓　朝晩の時を報ずる鼓の音。【二】勾留　ひきとめる。

春江

炎涼昏曉苦推遷、覺えず忠州已に二年。
閉を閉ぢて只聽く朝暮の鼓、樓に上りて空しく望む往來の船。
鶯聲に誘引せられて花下に來り、草色に勾留せられて水邊に坐す。

唯有春江看未厭。榮砂遶石綠潺湲。

【題義】春江の眺を詠じた詩である。

【詩意】寒暑晝夜がめまぐるしく推移して忠州に來てから早くも二年を過ぎた。閉を閉ぢて只朝晩の鼓の音を聽き、樓に登つて空しく往來する船を眺め、鶯の聲に誘ひ出されて花下に來り、草の色に引き留められて水邊に坐しなどして日を送つてゐる。ただ春江の砂を榮り石を遶つて潺湲として流るる樣は、いくら看ても見飽きない。

【餘論】此詩を引いて嵯峨帝が小野篁と問答したことは、本書卷頭の總說に擧げた。

唯春江の看て未だ厭かざる有り、砂を榮り石を遶りて綠潺湲。

【二】潺湲　水の流るる貌。

題東樓前李使君所種櫻桃花

東樓の前の李使君が種ゑし所の櫻桃花に題す

身入青雲無見日。手栽紅樹又逢春。
唯留花向樓前看。

身は青雲に入りて見る日無く、手づから紅樹を栽ゑて又春に逢ふ。唯花を留め樓前に向つて看しめ、

【字解】【一】李使君　李は姓、使君は刺史の稱。【二】青雲　高官に喩ふ。【三】紅樹　櫻桃樹をいふ。【四】故故　杜甫の月の詩に、時時

(四)故故拋愁與後人。　故故愁を拋ちて後人に與ふ。

はコトサラニといふ意ではあるまいか。

【題義】忠州城の東樓の前の李使君が栽えた櫻桃の花を看て所感を述べた詩である。詩意に據れば李使君は前の忠州刺史で、今は京に召還せられて顯職に就いてゐるらしい。

【詩意】李使君は手づから此櫻桃を栽えたにも拘はらず、自ら看る間もなく京に召還せられて顯位に登り、唯後任者たる我をして此花を見て愁を起さしめる。謂はば故に愁を人に轉嫁したやうなものだ。

閑三暗室、故故滿三青天一とあり、仇註に、故故猶言三屢屢一とあるが、ここ

巴水

城下巴江水。春來似麴塵。
軟砂如渭曲。斜岸憶天津。
影蘸新黃柳。香浮小白蘋。
臨流搔首坐。惆悵爲何人。

【字解】【一】巴江　川の名。【二】麴塵　淺黃色をいふ。【三】渭曲　長安の近所の渭水のほとりの地名。【四】天津　橋の名。洛陽に在り。【五】新黃柳　新に黃色な芽を出した柳。

【題義】巴江の流を見て洛陽・長安の舊友を憶うたことを述べた詩である。

【詩意】忠州城下の巴江の水が春になつて淺黃色になつた。その軟かな砂は長安の渭曲の如く、斜なる岸は洛陽の天津橋かと思はれる。新芽を吹いた柳の影をうつし、小さな蘋の香を漂はしてゐる。流に臨み髮を搔いて坐し、舊友を憶うて心を痛ましめた。

野行

草潤衫襟重。沙乾屐齒輕。
仰頭聽鳥立。信脚望花行。
暇日無公事。衰年有道情。
浮生短於夢。夢裏莫營營。

【字解】【一】屐齒　下駄の齒。【二】道情　宗教的感情。【三】浮生　人生なり。【四】營營　あくせくすること。

【題義】春日郊行の情景を敍した詩である。

【詩意】草が潤つて著衣の重きを感じ、砂が乾いて下駄の齒が輕い。仰いで鳥の聲を聽きて立ち、足に任せて花を尋ねて行く。休日には役向の仕事もなく、年老いては後生氣が增す。人生は夢よりも短

い。その短い夢の中に名利を逐うてあくせくするのは、馬鹿の骨頂だ。

送高侍御使廻。因寄楊八

高侍御が使して廻るを送り、因つて楊八に寄す

(一)明月峽邊逢制使。　明月峽邊制使に逢ふ、
(二)黃茆岸上是忠州。　黃茆岸上是れ忠州。
到城莫說忠州惡。　城に到りて說くこと莫れ忠州の惡しきを、
無益虛教楊八愁。　益無くして虛しく楊八をして愁へしめん。

【字解】【一】明月峽　四川省巴縣の東に在る。制使は天子の使者。高侍御を指す。　【二】黃茆　黃色な茅。

【題義】勅使たる高侍御が忠州を去つて萬州に往くのを送り、因つて萬州刺史たる楊八（前の題三郡中荔枝一詩十八韻、兼寄二楊萬州八使君一によつて楊八の萬州刺史たることがわかる。）に寄せた詩である。

【詩意】明月峽の邊で勅使に逢うた。これから萬州に行くのださうだが、黃茅の生茂つてゐる岸の上が丁度萬州だ。（第二句の忠州は萬州の誤ではあるまいかと思ふが、どの本にも忠州とある。今萬州の誤と見て解釋する）萬州に著いても忠州はいやな處だとは言つてくれるな。虛しく楊八をして愁へしめるであらうから。

奉酬李相公見示絶句。時初聞二國哀一。

李相公の絶句を示されしに酬い奉る　時に初めて國哀を聞く

(一)碧油幢下捧新詩。　碧油幢下新詩を捧ぐ、
(二)榮賤雖殊共一悲。　榮賤殊なりと雖も共に悲みを一にす。
涕淚滿襟君莫怪。　涕淚襟に滿つ君怪む莫れ、
(三)甘泉侍從最多時。　甘泉に侍從せしこと最も多時。

【字解】【一】碧油幢　宰相の用ふる幕。　【二】榮賤　貴賤。　【三】甘泉　宮殿の名。

【題義】李相公から絶句を寄せられたのに酬いた詩で、公の詩に因つて初めて憲宗皇帝の崩御を知つたのである。

【詩意】相公の幕下に此詩を獻上致します。承れば憲宗皇帝が崩御遊ばされたさうで御坐るが、公と我とは貴賤の相違こそあれ、陛下の崩御を悲む情は全く同じで御坐る。我が涙の襟に滿つるを怪み給ふな、我は甘泉宮に於て陛下に侍從致したことが最も長かつたので御坐るから。

戲贈蕭處士・清禪師

戲に蕭處士・清禪師に贈る

(一)三杯嵬峨忘機客。　三杯嵬峨たり機を忘るる客、

【字解】【一】蕭處士　前に見ゆ。

百衲頭陀任運僧。　百衲の頭陀運に任する僧。
又有放慵巴郡守。　又放慵なる巴郡の守有り、
不營一事共騰騰。　一事を營まず共に騰騰。

【題義】　戯に蕭處士と清禪師とに贈つた詩である。

【詩意】　常に名利を忘れ、酒を飲めば忽ち氣が大きくなる蕭處士と、つぎはぎの僧衣を纏ひ運に任せて行脚してあるく清禪師と、放埒でだらしのない忠州刺史白樂天とは、これといふ事もせずに徒らに遊情に耽つてゐる。

清禪師は禪僧の名。【二】東峨　氣の大きくなること。宏機は機心なく名利の念のないこと。【三】百衲　僧衣なり。衲は補綴をいふ。つぎはぎの多きこと。頭陀は行脚僧。【四】放慵　放埒で怠慢なこと。巴郡守は忠州刺史。樂天自ら謂ふ。【五】騰騰　遊惰に耽る貌。

錢虢州以三堂絶句見寄。因以本韻和之

錢虢州、三堂の絶句を以て寄せらる、因つて本韻を以て之に和す

同事空王歲月深。　同く空王に事へて歲月深し、
相思遠寄定中吟。　相思ひて遠く寄す定中の吟。
遙知清淨中和化。　遙に知る清淨中和の化、
祇用金剛三昧心。　祇金剛三昧の心を用ひたるを。

【字解】【一】空王　佛を尊んでいふ。
【二】定中　坐禪の中。

予早歲與錢若水同習金剛三昧經故云。

【題義】　韓愈の和劉虢州山堂新題二十一詠序に「虢州刺史の宅は水池竹林に連なる。往往亭臺を島渚に爲り、其處を目して三堂となす云云」とある。劉虢州とは劉伯芻、字は素芝で、元和八年に虢州刺史になつた。樂天の此詩は虢州刺史錢氏が三堂の絶句を寄せられたので、その原韻を用ひて和したといふのである。

【詩意】　君と僕とは久しく俱に佛を信奉した仲であるので、君は僕を憶うて遙に參禪中の詩を寄せられた。其詩を讀んで見て、君の清淨中和の感化は、嘗て共に習讀した金剛三昧經から來たことを知つた。

三月三日

暮春風景初三日。　暮春の風景初三の日、
流世光陰半百年。　流世の光陰半百の年。
欲作閒遊無好伴。　閒遊を作さんと欲するも好伴無し、
半江惆悵却回船。　半江に惆悵して却つて船を回す。

【題義】三月三日に作つた詩である。

【詩意】いよいよ春の末の第三日となり、水の流よりも急な歳月に我は早くも五十になつた。閑遊をなさうとしたが、好い伴もないので、傷心のあまり途中から船を回して歸つた。

寒食夜

寒食の夜

四十九年身老日。　四十九年身の老いたる日、
一百五夜月明天。　一百五夜月の明かなる天。
抱膝思量何事在。　膝を抱いて思量す何事か在る、
癡男騃女喚鞦韆。　癡男騃女喚びて鞦韆す。

【字解】〔一〕四十九年　時に樂天は年四十九である。前の除夜の詩を見よ。〔二〕一百五夜　冬至から百五日を寒食といふ。この日には火を禁ずる風習あり。〔三〕思量　考へ込むこと。〔四〕癡男騃女　愚な男女。鞦韆は、ぶらんこ。一種の遊戯。

【題義】寒食の夜の樣を敍した詩である。

【詩意】四十九といふ老の身には、寒食などといふ物日に遇ひ、殊に明月などを見ると、誠に感慨に堪へない。膝を抱いて考へ込んでも此れといふ目星い事もない。窓外の庭では、たはけた男女が相喚んで鞦韆に乘つて遊んでゐる。その呑氣さが羨ましい。

代州民問

州民に代つて問ふ

龍昌寺底開山路。　龍昌寺底山路を開き、
巴子臺前種柳林。　巴子臺前柳林を種う。
官職家鄉都忘却。　官職家鄉都て忘却す、
誰人會得使君心。　誰人か會し得ん使君の心。

【題義】忠州の民に代つて問を發した詩である。

【詩意】吾が忠州の刺史殿は官職のことも故郷のことも全く忘れて、龍昌寺の下に山を開いて道をつけたり、巴子臺の前に柳を竝べ植ゑたりして樂んでゐる。あんな馬鹿げた刺史殿の料簡は恐らく誰にもわかるまい。

【字解】〔一〕龍昌寺　忠州に在る寺。〔二〕巴子臺　忠州に在る臺の名。〔三〕使君　刺史の尊稱。樂天を指して言ふ。

答州民

州民に答ふ

宦情抖擻隨塵去。　宦情抖擻塵に隨ひて去り、
鄉思銷磨逐日無。　鄉思銷磨日を逐ひて無し。
唯擬騰騰作閒事。　唯騰騰として閒事を作さんと擬す、

【字解】〔一〕宦情　官職に就ての野心。抖擻は拂ひ去ること。〔二〕鄉思　鄉里を思ふ心。〔三〕騰騰　遊情に耽る樣。閒事は役にも立たぬむだ事。

遮渠不道使君愚。遮渠して使君愚なりと道はざらしむ。

【題義】前の州民の問に答へた詩である。

【詩意】官情も塵と共に拂ひ去られ、郷里を思ふ心も日を逐うて消滅してしまつて、唯塵塵として閑事をなして目前の慰みをなすのである。されば州民共も刺史殿は馬鹿だなどと、決して言つては相成らぬぞ。

【訓】遮渠　彼を遮るといふ意。人をさしとめる語。

荔枝樓對酒　荔枝樓にて酒に對す

荔枝新熟雞冠色。荔枝新に熟す雞冠の色、
燒酒初開琥珀香。燒酒初めて開く琥珀の香。
欲摘一枝傾一盞。一枝を摘みて一盞を傾けんと欲す、
西樓無客共誰嘗。西樓客無し誰と共にか嘗めん。

【題義】荔枝樓で酒に對して作つた詩である。

【詩意】荔枝が新に熟して其色が雞冠のやうに赤く、燒酒が琥珀色をして香氣を放つてゐる。荔枝を

【字解】【一】荔枝　果實の名。前の題三郡中荔枝一詩十八韻。參考三楊萬州八使宮一の題義に詳なり。【二】燒酒　酒の名。琥珀は纖物の名。【三】一盞　一杯。【四】西樓　荔枝樓をいふ。方輿勝覽に「荔枝樓は南賓郡の西南隅に在り、白公置くと」ある。

肴に燒酒を酌まうと思ふが、不幸にして相手がないのが殘念だ。

房家夜宴喜雪。戲贈主人　房家に夜宴し雪を喜び、戲に主人に贈る

風頭向夜利如刀。風頭夜に向ひて利きこと刀の如し、
賴此溫爐輭錦袍。此溫爐輭錦の袍を賴む。
桑落氣熏珠翠暖。桑落氣熏じて珠翠暖かに、
柘枝聲引管絃高。柘枝聲引きて管絃高し。
酒鈎送盞推蓮子。酒鈎盞を送りて蓮子を推し、
燭淚粘盤壘蒲萄。燭淚盤に粘して蒲萄を壘す。
不醉遣儂爭散得。醉はずんば儂をして爭か散じ得しめん。
門前雪片似鵝毛。門前の雪片鵝毛に似たり。

【字解】【一】風頭　風。【二】輭錦　軟な錦。【三】桑落　酒なり。陣書錄に、河東の桑落坊に井あり、桑の落つる時に至る毎に水を取りて酒を釀すに甚だ美なり。故に桑落酒と名づくとある。熏は薰に同じ。【四】柘枝　瑣碎錄に「柘枝舞はもと北魏拓拔の名。拓を易へて柘となし、拔を易へて枝となすなり。唐人、柘枝詞を作りてより則ち舞ふ者の執る所と、歌ふ者の詞と、精相應ず」とある。【五】酒鈎　酒を釣詩鈎といふ。詩を釣る釣針の意。盞は杯。蓮子は蓮の實。ここは蓮の實の形をなせる杯をいふならん。【六】燭淚　蠟燭の蠟が燒けて流れること。蒲萄は葡萄なり、ここも燭淚が固まつて葡萄の房の如くなれるをいふ。【七】鵝毛　鷺鳥の毛。

【題義】房氏の家で夜宴を張り、然も雪の降つたのを喜んで戲に主人公に贈つた詩である。

【詩意】風は夜に入つて刀のやうに利くなつた。が、幸に暖爐と錦袍とに頼つて少しも寒さを感じない。且酒氣が薫じて其色は珠翠の如く、柘枝の聲が長く引いて管絃の調も高い。益〻興が湧いて來て蓮子の杯を推して人に勧め、燭涙が燭臺に溜つて葡萄のやうである。大分夜も更けて來たやうだが、十分醉はないうちは我をして散會せしめることは出來ない。門前には雪が鵝毛の如く飛んでゐるから。

醉後贈人

醉後人に贈る

香毬趁拍廻環匝。　香毬をば趁ひ拍ちて廻環して匝ふ、
花盞拋巡取次飛。　花盞拋ち巡りて取次に飛ぶ。
自入春來未同醉。　春に入りてより來た未だ同く醉はず、
那能夜去獨先歸。　那ぞ能く夜去りて獨先づ歸らん。

【題義】醉後に人に贈り夜まで倶に樂まんことを望んだ詩である。

【詩意】香毬を打つて興を添へ、杯は次から次へと飛び巡る。實に愉快な宴會である。君とは春になつてからまだ一度も一緒に飲まないのだから、たとひ夜になつても獨り先に歸ることは出來ない。夜の更けるまで樂まう。

【字解】【一】香毬　舞人の撥弄して以て飾をなすもの、曲とりの玉なり。【二】花盞　美しき杯。取次は次第にの意。

初除尚書郎脫刺史緋

初めて尚書郎に除せられ刺史の緋を脫す

親賓相賀問何如。　親賓相賀して何如と問ふ、
服色恩光盡反初。　服色恩光盡く初に反る。
頭白喜拋黃牛峽。　頭白くして黃牛峽を拋つを喜び、
眼明驚拆紫泥書。　眼明にして紫泥の書を拆くに驚く。
便留朱紱還鈴閣。　便ち朱紱を留めて鈴閣に還り、
却著青袍侍玉除。　却りて青袍を著て玉除に侍す。
無奈嬌癡三歲女。　奈ともする無し嬌癡三歲の女、
繞腰啼哭覓銀魚。　腰を繞り啼哭して銀魚を覓むるを。

刺史のおびる魚袋。

【題義】元和十五年冬、尚書郎に任ぜられ、刺史の服たる緋袍を脫ぎ青袍を著る身分になつたことを述べた詩である。

【詩意】親賓相倶に我の新任を賀し感想如何にと問うた。服の色も變り天子の恩寵も初に反つたので嬉しさに堪へない。黃牛峽を去つて都に歸るのを喜び、詔書を拜しては自ら驚いた。さて今後は刺史

【字解】【一】恩光　天子樣の御恩寵。【二】黃牛峽　湖北省宜昌縣の西に在り、江流紆曲數宿を經るも猶之を望見す。行く者謠うて曰く、朝發二黃牛一、暮宿三黃牛一。三朝三暮、黃牛如レ故と。【三】紫泥書　詔書なり。天子の印は紫泥を用ふ。【四】朱紱　朱綬。鈴閣は將帥の居る所の地なり。【五】青袍　尚書郎の服。玉除は天子の階除。【六】嬌癡　無邪氣で愛嬌のあること。【七】銀魚　魚袋。

の朱紱を此地に留めて鈴閣に還り、青袍を著て宮廷に侍するであらう。ただ頑是のない女兒が刺史の魚袋を殘して行くのを惜しがつて、やたらにせがむには弱つた。

留題開元寺上方

東寺臺閣好。上方風景清。　東寺臺閣好く、上方風景清し。
數來猶未厭。長別豈無情。　數來るも猶未だ厭かず、長く別れて豈情無からんや。
戀水多臨坐。辭花剩繞行。　水を戀ひて多く臨み坐し、花に辭して剩へ繞り行く。
最憐新岸柳。手種未全成。　最も憐む新岸の柳、手づから種ゑて未だ全く成らず。

【字解】【一】東寺　開元寺なり。忠州城東に在り。【二】上方　地勢最高の處。

【題意】忠州を去るに方り開元寺の上方に此詩を題して後に留めたのである。

【詩意】開元寺の建物もよく高臺の景色もよい。幾度遊んでも飽きることがない。長く別れるとなつては感慨が深い。因つて池の水に對して別を惜み、花に別を告げて復繞り眺めた。殊に感に堪へないのは、自分が栽ゑた岸の柳が未だ全く成長せぬのに、見棄てて此處を去ることだ。

別種東坡花樹兩絕

東坡に種ゑし花樹に別る、兩絕

三年留滯在江城。　三年留滯して江城に在り、
草樹禽魚盡有情。　草樹禽魚盡く情有り。
何處殷勤重回首。　何れの處にか殷勤に重ねて首を回さん、
東坡桃李種新成。　東坡の桃李種ゑて新に成る。

【字解】【一】江城　忠州を指して言ふ。【二】殷勤　ねんごろに。

【題意】忠州城東の堤に植ゑた花樹に別れることを述べた二絕句。

【詩意】自分は三年間忠州刺史として此地に留つてゐたので、草でも樹でも禽でも魚でも皆懷しさを感ずる。最も心を引かれて幾度となく頭を回らすのは、自分が栽ゑてやつと近頃成長した東坡の桃李である。

〔一〕

花林好住莫顧頻。　花林好住顧頻する莫れ、
春至但知依舊春。　春至らば但知れ舊に依るの春。
樓上明年新太守。　樓上明年新太守、
不妨還是愛花人。　妨げず還是れ花を愛する人。

〔二〕

【字解】【一】好住　健在といふが如し。顧頻は悲んで痩せ衰へること。

【詩意】花林よ、我此地を去るとも顧頓することなく、幸に健在なれ。明春になつたら、またもとのやうに美しく花を開くがよい。明年は新任の刺史殿が來て、我と同じやうにお前を愛好するであらうから、何も不足に思ふことはあるまい。

別橋上竹

穿橋迸竹不依行。　橋を穿つ迸竹行に依らず、
恐礙行人被損傷。　恐らくは行人を礙げて損傷せられん。
我去自慙遺愛少。　我去りて自ら慙づ遺愛少く、
不教君得似甘棠。　君をして甘棠に似るを得しめざるを。

【題義】橋の上の竹に別を告げた詩である。

【詩意】橋をつきぬいて發え立つ竹が行列もなく亂生してゐる。恐らくは我去つて後、道行く人の邪魔になるので伐り倒されはせぬかと氣掛りになる。我に召伯の如き德がないから、お前をして甘棠の如くに「翦ること勿れ伐ること勿れ、召伯の茇りし所」と謂つて愛せしめることの出來ないのは、自ら顧みて慚愧に堪へない。

【字解】【一】迸竹　發え立つ竹。【二】遺愛　あとにのこすいつくしみ。【三】甘棠　竹を指して言ふ。甘棠は木の名。詩經の篇名。召伯南國を巡行し以て文王の政を布く時、或は甘棠の下に舍す。後人其德を思ひて其樹を愛し因つて此詩を賦す。

發白狗峽次黃牛峽登高寺却望忠州

白狗峽を發して黃牛峽に次り、高寺に登り、却つて忠州を望む

白狗次黃牛。灘如竹節稠。　白狗より黃牛に次る、灘は竹節の如く稠し。
路穿天地險。人續古今愁。　路は天地の險を穿ち、人は古今の愁を續ぐ。
忽見千花塔。因停一葉舟。　忽ち千花の塔を見て、因つて一葉の舟を停む。
畏途常迫促。靜境暫淹留。　畏途常に迫促し、靜境暫く淹留す。
巴曲春全盡。巫陽雨半收。　巴曲春全く盡き、巫陽雨半收まる。
北歸雖引領。南望亦廻頭。　北に歸りて領を引くと雖も、南望みて亦頭を廻らす。
昔去悲殊俗。今來念舊遊。　昔去るとき殊俗を悲み、今來りて舊遊を念ふ。
別僧山北寺。拋竹水西樓。　僧に別る山北の寺、竹を拋つ水西の樓。
郡樹花如雪。軍厨酒似油。　郡樹花雪の如く、軍厨酒油に似たり。
時時大開口。自笑憶忠州。　時時大いに口を開き、自ら笑ひて忠州を憶ふ。

【字解】【一】長途　世路の難。【二】淹留　留滯すること。【三】巴曲　巴江の屈曲する處。【四】殊俗　風俗の全く異ること。

【題義】白狗峽を發して黄牛峽（前の初除二尚書郎一脱二刺史緋一の詩に見ゆ）に次り、山上の寺に登つて忠州を回望したことを敍した詩である。

【詩意】白狗峽を舟出して黄牛峽に次つた。其間に急流の多いこと竹の節のやうだ。ここは天地間稀に見る險難の地で、古來多くの人を愁へしめた處だ。忽ち花の咲き亂れた中に聳ゆる塔を見、そこに我が舟を停めて上陸した。常に世路の難に脅かされてゐるので、暫く心を落著けて此靜境に留滯する事にした。巴曲のあたりは既に春も盡き、巫陽のあたりは雨が半霽れた。自分は北に歸る身ではあるが、又南の方を望んで名殘を惜んだ。嘗て忠州に赴任する時風俗の差異を悲んだが、今は舊遊を思うて懷しく感ずる。寺の僧や樓下の竹に別れて郡廳に入れば、庭樹は花雪の如く庖厨には油のやうな酒がある。時時大口をあいて笑ひつつ忠州を回想した。

棣華驛見楊八題夢兄弟二詩

棣華驛にて楊八が題せる兄弟を夢みし詩を見る

遙聞旅宿夢兄弟。遙に聞く旅宿兄弟を夢みしことを、
應爲郵亭名棣華。應に郵亭の棣華と名づくるが爲なるべし。

【字解】【一】郵亭　驛亭なり。棣華は詩經に常棣篇あり、中に常棣之華、鄂不二韡韡一、凡今之人、莫レ如二兄弟一の句あり。【二】早晚　どの位の年月を經たかといふ意。

名作二棣華一來早晚。名づけて棣華と作して來早晚、
自題詩後屬楊家。自ら詩後に題して楊家に屬す。

【題義】棣華驛で楊八（萬州刺史であらう。前に見ゆ）が兄弟を夢みて作つた詩を壁に題しておいたのを見て、此詩を作つたのである。

【詩意】嘗て君から旅宿で兄弟を夢みたことを聞いたが、この驛の名が棣華というて兄弟に緣があるからであらう。一體いつ頃から此驛を棣華と名づけたものか。自分も君の尻馬に乘つて君の詩後に此詩を題する。

商山路有感

萬里路長在。六年身始歸。萬里路長く在り、六年身始めて歸る。
所經多舊館。大半主人非。經る所舊館多く、大半主人非なり。

商山の路にて感ずるあり

【題義】都への歸途、商山を過ぎ感ずる所ありて作つた詩である。

【詩意】萬里の路が長く續いてゐる。我は嘗て此路を經て江州へ往つたが、今六年ぶりで歸るのである。經る所の舊館を見るに、半過ぎ前の主人は死んでしまつた。實に人の身の變遷ほど早いものは

ない。

商山路驛桐樹、昔與微之前後題名處

商山路驛の桐樹、昔微之と前後名を題せし處

與君前後多遷謫。君と前後多く遷謫せらる、
五度經過此路隅。五度經過す此路隅。
笑問中庭老桐樹。笑ひて問ふ中庭の老桐樹、
這回歸去免來無。這回歸り去りて來るを免るるや無やと。

【題義】商山驛の桐樹に題した詩である。ここは嘗て元稹と屢〻名を題した處である。

【詩意】君と我とは前後屢〻貶謫に遇ひ、それが爲に此地をば五回通つた。因つて笑つて庭の桐樹に問うた。今度都へ歸つたら、もう二度と貶謫せられて此處を通るやうな事はあるまいかと。

【字解】【一】君　元稹、字は微之を指す。

德宗皇帝挽歌詞　四首

執象宗玄祖。貽謀啓孝孫。象を執りて玄祖を宗とし、謀を貽して孝孫を啓く。
文高栢梁殿。禮薄灞陵原。文は栢梁殿よりも高く、禮は灞陵原よりも薄し。
宮仗辭天闕。朝儀出國門。宮仗天闕を辭し、朝儀國門を出づ。
生成不可報。二十七年恩。生成して報ず可からず、二十七年の恩。

【字解】【一】象　範といふが如し。手本。玄祖は遠祖なり。【二】孝孫　孝心深き子孫。【三】栢梁殿　漢の武帝栢梁臺を建て羣臣を會して聯句をなした。【四】灞陵原　漢の文帝の陵墓。文帝は質素儉約を以て名あり。【五】宮仗　大葬の儀仗。天闕は宮城。【六】生成　一人前の人になること。【七】二十七年　德宗在位二十七年。

【題義】德宗皇帝の崩御を悼んだ詩である。

【詩意】德宗皇帝は遠祖の德に則り、善謀を貽して子孫を啓き導き給ひ、その文は漢の武帝にもまさり、質素儉約な事は漢の文帝以上であらせられた。今や大葬の儀仗が宮闕を辭して都門を出る所である。我は生成して一人前の人となるとも、最早此君の御恩に報いることは出來ない。誠に悲みに堪へぬ所である。

〔二〕

虞帝南巡後。殷宗諒闇中。虞帝南巡の後、殷宗諒闇の中。
初辭鑄鼎地。已閉望仙宮。初めて鑄鼎の地を辭し、已に望仙の宮を閉づ。

曉落當陵月。秋生滿旆風。
前星承帝座。不使北辰空。

【字解】【一】 陵帝　舜なり。舜は南に巡狩して崩ず。【二】 殿宗　殿の高宗。諒闇は天子の喪に居る稱。論語に「高宗諒闇三年言はず」とある。【三】 鼎地　黄帝銅を採りて鼎を鑄る。鼎成るや龍に乘りて天に上る。【四】 望仙宮　宮殿の名。元稹の詩に、上皇正在望仙樓、太眞同覓蓬萊頂立とある。【五】 陵　天子の陵墓。【六】 前星　太子の稱。漢書に「心大星は天王なり、其前星は太子、後星は庶子なり」とある。【七】 北辰　北極星。天子に喩ふ。

【詩意】 先帝が崩御になつて、憲宗皇帝が喪に服して居られる。今や大葬の禮も滯りなく濟んで、曉に淋しく月の御陵に懸るのを仰ぎ、秋風の御旗を翻してゐるのを悼む。併し早速太子が御位を嗣ぎ帝位を空しからしめないのは、誠に結構な事である。

〔三〕

業大承宗祖。功成付子孫。
睿文詩播樂。遺訓史標言。
節表中和德。方垂廣利恩。
懸知千載後。理代數貞元。

〔三〕

業大にして宗祖を承け、功成りて子孫に付す。
睿文は詩樂に播し、遺訓は史言を標はす。
節は中和の德を表はし、方は廣利の恩を垂る。
懸に知る千載の後、代を理めて貞元を數へんことを。

【字解】【一】 宗祖　祖宗に同じ。【二】 千載　千年。【三】 貞元　德宗の年號。

【詩意】 功業は祖宗の後を承けて之を子孫に傳へ、文德は詩章を音樂に播して民をして之を誦せしめ、遺訓は史官之を記錄して後世に垂れた。その節は中和の德に合ひ、恩澤は徧く四方に及んだ。かかる明君であらせられたから、千載の後まで治世の績を語る者は必ず貞元時代を擧げるであらうと恐察する。

〔四〕

夢減三齡壽。哀延七月期。
寢園愁望遠。宮仗哭行遲。
雲日添寒慘。笳簫向晚悲。
因山有遺詔。如葬漢文時。

〔四〕

夢に三齡の壽を減じ、哀みて七月の期を延ぶ。
寢園愁へ望むこと遠く、宮仗哭し行くこと遲し。
雲日寒を添へて慘み、笳簫晚に向ひて悲む。
山に因りて遺詔有り、漢文を葬むりし時の如し。

【字解】【一】 寢園　陵墓。【二】 宮仗　儀仗。【三】 笳簫　大葬の儀仗の吹く笛。

【詩意】 德宗の崩ずるや天下皆之を悼み奉らざる者はなかつた。遠く陵墓を愁へ望んで儀仗の哭行すること爲に遲く、天日も雲に遮られて寒く、笳簫の聲も悲げに響き渡つた。山に因つて遺詔のあつたことは、漢の文帝を葬むつた時と同じであつた。

【餘論】此より以下の詩は皆貞元の末、元和の初頃の作であるが、誤つて忠州の詩の後に編せられてゐる。

昭德王后挽歌詞

仙去遥遥境。詩留窈窕章。
春歸金屋少。夜入壽宮長。
鳳引曾辭輦。鸞休昔採桑。
陰靈何處感。沙麓月無光。

仙去す遥遥の境、詩は留む窈窕の章。
春金屋に歸ること少に、夜壽宮に入りて長し。
鳳引きて曾て輦を辭し、鸞休みて昔桑を採る。
陰靈何れの處にか感ずる、沙麓月光無し。

【字解】【一】窈窕　詩經の關雎篇に窈窕淑女、君子好逑とある。【二】金屋　王后の宮。【三】壽宮　廟宮なり。【四】辭輦　漢の成帝後庭に遊び、嘗て班婕妤と輦を同うして載らんと欲す。婕妤辭して曰く「古の圖畫を觀るに賢聖の君皆名臣の側に在るあり、三代の末主乃ち嬖女あり。今輦を同うせんと欲するは、之に近似するなきを得んや」と。【五】採桑　申豐に、帝耕三籍田、后桑三宮室」とある。【六】陰靈　月就に日以陽德、月以陰靈とある。【七】沙麓　漢書元后傳に「元城の建公曰く、昔春秋沙麓崩る。晉史之を卜して曰く、陰・陽の爲となり土木相乘ず。故に沙麓の崩るるあり。後六百四十五年宜しく聖女ありて興るべし。其れ齊田か云云」とあり。元后の崩ずるや場嬙誄を作りて曰く、太陰之精、沙麓之靈、作合三於漢、配元生成云云と。

【題義】昭德は謚、王后は皇后王氏。新唐書に貞元二年十一月皇后崩ずとあつて氏を書いてない。蓋し淑妃王氏が久しく疾んでゐたので、德宗皇帝が立てて皇后となし、冊し畢ると間もなく崩御になつたのであらう。此詩は崩御を悼み奉つた作である。

【詩意】王皇后の靈上仙して天に登り、唯詩章を此世に留むるのみで、春にも金屋に歸ることなく永く夜臺に入り給うた。后は嘗て天子と輦を同うすることを辭し、桑を採りて蠶室にいそしむなど、賢明の行が多くおはしました。今や沙麓の月光なく、人をして感慨に堪へざらしめる。

太平樂詞　二首　已下七首、在二翰林一時、奉二敕撰進一。

太平樂詞　二首　已下七首、翰林に在りし時、敕を奉じて撰進す。

歲豐仍節儉。時泰更銷兵。
聖念長如此。何憂不太平。

歲豐にして仍節儉し、時泰くして更に兵を銷す。
聖念長く此の如し、何ぞ太平ならざるを憂へん。

【題義】天下の太平を頌する詩である。

【詩意】今や歲豐なるも尙節儉し、時泰くして更に兵戰を止めてゐる。聖天子の思召が此の如くである以上は、天下が太平にならぬ筈はない。

〔一一〕

〔一一〕

澹露浮二堯酒一。薰風起二舜歌一。

澹露堯酒に浮び、薰風舜歌に起る。

願同堯舜意。所樂在人和。

【字解】【一】 湛露　詩經の篇名。湛湛露斯、匪陽不晞、厭厭夜飲、不醉不歸の句あり。【三】 薰風　琴五絃の琴を彈じ薰風の詩を歌ひて天下治まる。

【詩意】 堯の如く大德ある我が君が諸侯に宴を賜ふや、湛露の詩の如く、歌唱は舜の薰風の歌の如くである。ただ偏に堯舜と其德を一にせんことを期し給ひ、民人の和合を樂みとしていらせられる。

小曲新詞　二首

舞色鮮宮殿。秋聲脆管絃。
聖明千歲樂。歲歲似今年。

【題義】 小曲とは大曲に對する名で、短篇詩をいふ。

【詩意】 宮殿のあたりが霽れ渡り、管絃の聲が秋天に冴えて響く。聖天子の樂みは毎年此の如くである。

〔一〕

紅裙明月夜。碧簟早秋時。

〔二〕

紅裙明月の夜、碧簟は早秋の時。

小曲新詞　二首

舞色宮殿鮮かなり、秋聲管絃脆し。
聖明千歲の樂み、歲歲今年に似たり。

好向昭陽宿。天涼玉漏遲。

【字解】【一】 紅裙　美人なり。【二】 碧簟　青きたかむしろ。【三】 昭陽　宮殿の名。三輔黃圖に「武帝の後宮八區、昭陽殿あり」とある。【四】 玉漏　水時計。

【詩意】 早秋明月の下、我が君は碧簟に坐し給ひ、美人が侍してゐる。天涼しく夜も更けた。これから昭陽殿におとまりになるのであらう。

閨怨詞　三首

朝憎鶯百囀。夜妬燕雙棲。
不慣經春別。唯知到曉啼。

【字解】【一】 雙棲　雌雄相並んで塒に棲むこと。

【題義】 婦人の夫に對する戀情を歌つた詩である。

【詩意】 朝は鶯の囀るのを憎み、夜は燕の並び棲むのを妬む。春尖に別れてゐるのは今年が始めであるが、實にせつないものだ。毎朝戀ひ慕つて泣いてゐる。

〔二〕

(一)珠箔籠寒月。(二)紗牕背曉燈。珠箔寒月を籠め、紗牕曉燈に背く。
夜來巾上淚。一半是春氷。夜來巾上の淚、一半は是れ春氷。

【字解】【一】珠箔　玉のすだれ。【二】紗牕　紗を張つた窓。

【詩意】玉の簾を隔て寒月に對して夜を明かし、曉には燈を背にして紗窓に對する。庭前の春の氷は半ば吾が昨夜からの巾上の淚が凍つたのであらう。

〔三〕

關山征戍遠。閨閣別離難。關山征戍遠く、閨閣別離難し。
苦戰應(一)顦顇。寒衣不要寬。苦戰應に顦顇すべし、寒衣は寬きを要せず。

【字解】【一】顦顇　痩せ衰へること。

【詩意】吾が夫は關山遠く出征して、我ひとり空閨を守つて心を痛めてゐる。夫は幾度か苦戰して定めて痩せたであらうから、冬著を送らうと思ふが、身幅をつめて縫ふがよからう。

殘春曲　禁中口號。

(一)禁苑殘鶯三四聲。禁苑の殘鶯三四聲、
(二)景遲風慢暮春情。景遲く風慢し暮春の情。
日西無事墻陰下。日西にして事無し墻陰の下、
閒蹋宮花獨自行。閒に宮花を蹋みて獨自ら行く。

【題義】宮苑の殘春の景況を敍した詩である。口號とは口に隨つて號吟した詩といふ意である。

【詩意】禁中の御苑には鶯が聲聲に啼き、日もうらうらとして風も穩かに情致が深い。日が西に傾いた時、これといふ仕事もなく、落花を蹋んで墻陰を閑歩した。

【字解】【一】禁苑　禁中の御苑。
【二】景　日景。

長安春

(一)青門柳枝軟無力。長安の春
(二)東風吹作黃金色。青門の柳枝軟かにして力無し、東風吹きて黃金の色を作す。
街東酒薄醉易醒。街東酒薄くして醉醒め易し、
滿眼春愁消不得。滿眼の春愁消し得ず。

【字解】【一】青門　長安の城門の名。
【二】東風　春風。
【三】黃金色　柳の若芽の色。

【題義】長安の春の情景を敍した詩である。

【詩意】青門の柳の枝がなよなよと垂れ、春風に吹かれて黄色の若芽が萌えてゐる。街東の酒は薄いのですぐに醒めてしまひ、春愁を消さうとしても消しやうがない。

長樂坡送人賦得愁字

行人南北分征路。　流水東西接御溝。
終日坡前恨離別。　謾名長樂是長愁。

【題義】長樂坡に人を送り、多くの人と韻を分けて詩を作り、愁の字を得て此詩を作つたといふ意。

【詩意】旅立つ友は其れ其れ南北に別れて旅路に就き、川の水は東から西に流れて御溝に續く。我は坡前に立つて終日離別を恨んでゐる。されば長樂とは名づくるものの實は長愁と名づくべきである。

【字解】【一】長樂坡　江蘇省吳縣の西南に在り、吳王闔閭遊宴の處。【二】行人　旅立つ人。征路は旅路。【三】御溝　宮城のまはりの溝。

長洲苑

春入長洲艸又生。　鷓鴣飛起少人行。
年深不辨娃宮處。　夜夜蘇臺空月明。

【題義】長洲苑の遺跡の荒涼たる樣を述べた詩である。

【詩意】長洲苑には春草が生じ、ただ鷓鴣の飛びかふのみで訪ふ人も稀である。今や年久しくなつて館娃宮の跡も何處やらわからず、夜夜明月が空しく姑蘇臺を照してゐるのみだ。

【字解】【一】長洲苑　江蘇省吳縣の西南に在り、吳王闔閭遊宴の處。【二】鷓鴣　鳥の名。【三】娃宮　館娃宮。吳王夫差宮を硯石山上に作り以て西施を館す。之を館娃宮といふ。【四】蘇臺　姑蘇臺。吳王の都した處。

憶江柳

曾栽楊柳江南岸。　一別江南兩度春。
遙憶青青江岸上。　不知攀折是何人。

江柳を憶ふ

曾て楊柳を栽う江南の岸、
一たび江南に別れて兩たび春を度る。
遙に憶ふ青青江岸の上、
知らず攀折るすは是れ何人ぞ。

【題義】江柳を憾うて作つた詩である。

【詩意】嘗て江南の岸に柳を栽ゑたが、一別以來早くも二年になつた。憾ふに今や岸上に青青と茂つてゐるであらうが、誰が我に代つて攀折してゐるやら。

南浦別

南浦凄凄別。西風嫋嫋秋。
一看腸一斷。好去莫回頭。

南浦に別る

南浦に凄凄として別る、西風嫋嫋の秋。
一たび看れば腸一たび斷ゆ、好し去つて頭を回す莫れ。

【字解】〔一〕凄凄　悲む貌。〔二〕嫋嫋　風の吹く貌。

【題義】南浦に友と別ることを悲んだ詩である。

【詩意】秋風の淋しく吹く時、悲みを抱いて君と南浦に別れたが、一たび看れば腸が千切れる思がする。どうか振り回らずに去つてくれ。

三年別

悠悠一別已三年。相望相思明月天。
腸斷青天望明月。別來三十六回圓。

三年の別

悠悠として一たび別れて已に三年、相望み相思ふ明月の天。
腸斷え青天明月を望むに、別來三十六回圓かなり。

【字解】〔一〕悠悠　遙なる貌。

【題義】三年の別を述べた詩である。

【詩意】一別以來早くも三年になつた。明月を望んでは遙に相思うてゐる。毎に心を痛ましめつつ既に三十六回の滿月を見た。

傷春詞

深淺檐花千萬枝。碧紗牕外囀黃鸝。
殘粧含淚下簾坐。盡日傷春春不知。

傷春詞

深淺の檐花千萬の枝、碧紗の牕外黃鸝囀ずる。
殘粧淚を含みて簾を下して坐す、盡日春を傷めども春知らず。

【字解】〔一〕深淺　紅色の深淺。〔二〕黃鸝　うぐひす。〔三〕殘粧　盛りを過ぎた婦人。〔四〕盡日　終日。

【題義】春を傷むことを敍した詩である。

【詩意】檐の前の千朶萬朶の花が薄く濃く紅の色に咲き滿ち、紗を張つた窓の外には鶯が囀いて

ゐる。盛りを過ぎた女が涙を含んで簾の中に坐し、終日春を傷んでゐるが、春は知らず顔に時めいてゐる。

後宮詞

涙濕羅巾夢不成。　涙は羅巾を濕して夢成らず、
夜深前殿按歌聲。　夜深けて前殿歌聲を按ず。
紅顔未老恩先斷。　紅顔未だ老いず恩先づ斷え、
斜倚薰籠坐到明。　斜に薰籠に倚りて坐して明に到る。

【字解】【一】羅巾　薄絹のハンケチ。【二】前殿　漢宮の名。未央宮に在り、天子の宴する處。王昌齢の春宮曲に未央前殿月輪高とある。按二歌聲一は歌の調子を取ること。

【題義】宮女の寵を失ひ夜の長きを嘆く樣を敍した詩である。

【詩意】羅巾も涙にぬれて眠らうとしても眠れない。前殿では夜更くるまで君の寵を得てゐる宮女どもが、御宴に侍して歌の調子を取る聲が聞える。我は紅顔未だ衰へざるに早くも君寵を失ひ、身の薄命を嘆きつつ伏籠に倚りかかつて夜を明かした。

【餘論】この詩は王建の宮詞だといふが、ただ唐詩紀事には白樂天の作としてある。

白樂天詩集　卷十九

律詩　五言七言　凡九十八首

吟元郎中白鬚詩兼飲雪水茶因題壁上

元郎中が白鬚の詩を吟じ、兼ねて雪水の茶を飲み、因つて壁上に題す

吟詠霜毛句。閒嘗雪水茶。　霜毛の句を吟詠し、閒に雪水の茶を嘗む。
城中展眉處。只是有元家。　城中眉を展ぶる處、只是れ元家有り。

【字解】【一】霜毛　白毛。【二】元家　元氏の家。

【題義】元郎中の家を訪ひ、たまたま元の作る所の白鬚の詩を吟じ、兼ねて雪を融かして煎じた茶を飲み、此詩を作つて壁に題したのである。

【詩意】君が作つた白鬚の詩を吟じ、靜かに雪を融かして煎じた茶を啜つてくつろいだ。長安の城下の中で僕が愁を忘れてのびのびすることの出來るのは、ただ君の家ばかりだ。

吳七郎中山人待制班中偶贈絶句

吳七郎中山人待制、班中偶贈絶句を贈る

(一)金馬東門隻日開。　金馬の東門は隻日に開け、
(二)漢庭待詔重仙才。　漢庭の待詔は仙才を重んず。
(三)第三松樹非華表。　第三の松樹は華表に非ず、
那得(四)遼東鶴下來。　那ぞ遼東の鶴の下り來るを得たる。

【字解】【一】待制　唐の制に、文官六品以上日を輪して待制し、以て顧問に備ふ、或は集賢門に待制す。【二】班中　その列位の中。【三】金馬　宮門の名。試驗及第者の詔命の下るを待つ處。隻日は奇數の日。【四】漢庭　漢の朝廷。實は唐であるが漢を借りて言ふ。待詔は待制に同じ。【五】第三松樹　唐創に、天子は隻日を以て朝を視る。【六】遼東　仙人の居る處に在る松。ここは宮中の松に喩ふ。曾景修の詩に曾向三天台上見、石橋南畔第三株とある。華表は標柱なり。【七】遼東鶴　丁令威は遼東の人なり。仙道を學び得て意の欲する所に任す、化して白鶴となり郭城門の華表の柱頭に集り、言うて曰く「我は是れ丁令威なり、家を去つて千載、今來り歸る。城郭舊の如きも人民非なり。何ぞ仙を學ばざる塚纍纍たり」と。ここは吳七郎中に喩ふ。

【題義】山人吳七が試驗に及第して金馬門に待制することになつたので、役所で此絶句を贈つたといふのである。

【詩意】奇數の日に金馬門を開き、仙才を重んじ之を待詔せしめることにした。宮中の松の樹は華表でないのに、どうして仙人が降つて來たのであらう。

和張十八祕書謝裴相公寄馬

張十八祕書が裴相公の馬を寄するを謝するに和す

齒齊鷹(一)足毛頭膩。　齒齊しく鷹足り毛頭膩し、
祕閣(二)張郎叱撥駒。　祕閣の張郎叱撥駒。
洗了領花飜假錦。　洗ひ了れば領花假錦を飜へし、
走時蹄汗蹋眞珠。　走る時は蹄汗眞珠を蹋む。
青衫(三)乍見曾驚否。　青衫乍ち見て曾て驚くや否や。
紅粟(四)難賒得飽無。　紅粟賒り難く飽くを得るや無や。
丞(五)相寄來應有意。　丞相寄せ來る應に意有るべし、
遣君騎去上雲衢(六)。　君をして騎り去りて雲衢に上らしめん。

【字解】【一】鷹足　肥肉の十分なること。【二】祕閣　祕書省。叱撥駒は馬の名。續博物志に「唐の天寶中大宛汗血の馬六匹を進む。一に曰く紅叱撥云云」とある。【三】青衫　祕書郎の著る青色の服。【四】紅粟　古くなつて變色した米。賒は代金後拂で買ふこと。【五】丞相　裴相公なり。【六】雲衢　天上。高官に喩ふ。

【題義】張十八は張籍である張籍は貞元十五年の進士で、太常寺太祝を授けられ、久しうして祕書郎に遷つた。裴相公は裴度であらう。此詩は張籍が裴相公から馬を贈られたのを謝した詩に和したのである。

【詩意】祕書郎張君の駿馬は齒並よく肉肥え毛並が美しい。洗へば領の花の如き模樣が錦を飜すか

と怪まれ、走る時は歸の汗が珠を散すやうである。宰相から賜はつて始めて張君の青衫を見た時はさぞ驚いたであらう。張君は懷工合がよくないので、古米さへ買へないから、いつも腹が減つてゐはしまいか。併し裴相公が君に此馬をくれたのは深意があるのであらう。君をして此馬に乘つて天上に飛躍せしめようといふのではあるまいか。

答山侶

山侶に答ふ

領下髭鬚半是絲。
光陰向後幾多時。
非無解挂簪纓意。
未有支持伏臘資。
冒熱衝寒徒自取。
隨行逐隊欲何爲。
更慙山侶頻傳語。
五十歸來道未遲。

領下の髭鬚半是れ絲、
光陰向後幾多時ぞ。
簪纓を解き挂く意無きにあらざるも、
未だ伏臘を支持する資有らず。
熱を冒し寒を衝き徒らに自ら取り、
行に隨ひ隊を逐ひて何をか爲さんと欲する。
更に慙づ山侶の頻りに語を傳ふるを、
五十にして歸り來るも道未だ遲からずと。

【題意】山中の舊友に答へた詩である。

【字解】〔一〕絲　白毛。
〔二〕光陰　歳月。
〔三〕簪纓　簪は冠をとめるカンザシ。纓は冠の紐。
〔四〕伏臘　六月と十二月の祭。
〔五〕慙　感謝すること。

【詩意】領の下の鬚も半は白毛になつた。今後どれだけ生きられるであらうか。僕も官職を退いて高臥したくないでもないが、生活を支へる資力がないから如何ともし難い。つまらなく熱さ寒さを凌ぎ官列に伍して其日其日を過してゐる。君等が度度傳言して五十になつて歸つても遲くはないから、成るべく早く山へ歸つて來いと言つてくれるのは、深く感謝する所である。

早朝思退居

早朝して退居を思ふ

霜嚴月苦欲明天。
忽憶閒居思浩然。
自問寒燈夜半起。
何如暖被日高眠。
唯慙老病披朝服。
莫慮飢寒計俸錢。
隨有隨無且歸去。
擬求豐足是何年。

霜嚴かに月苦なり明けなんと欲する天、
忽ち閒居を憶ひて思ひ浩然たり。
自ら問ふ寒燈夜半に起くるは、
何ぞ被を暖かにし日高くるまで眠るに如かんや。
唯慙づ老病朝服を披ることを、
飢寒を慮つて俸錢を計ること莫れ。
隨ひて有れば隨ひて無し且歸り去らん、
豐足を求めんと擬するも是れ何の年ぞ。

【字解】〔一〕浩然　盛なる貌。
〔二〕寒燈　夜燈。

【題意】朝早く參朝し官を退いて隱居せんことを思うた詩である。

【詩意】曉天に參朝すれば霜寒く月冴えて夜も明けなんとしてゐる。忽ち隱居の氣樂さを憶うて頻に官を退きたくなつた。思ふに夜中から起きて燈下に參朝の支度をして騷ぐよりは、暖かに夜著にくるまつて日の高く升るまで寢てゐる方が遙によい。老病の身に官服を纏ふのも氣恥かしく、生活の爲に宮仕へするのは好ましくない。俸祿を戴いても有るかと思へば忽ち無くなつてしまふのだから、いつそ山へでも歸らう。不足がなくなるのはいつの事やらあてもない。

曲江亭晚望

曲江岸北凭欄干。
水面陰生日脚殘。
塵路行多綠袍故。
風亭立久白鬚寒。
詩成闇著閒心記。
山好遙偸病眼看。
不被馬前提省印。

曲江亭晚望

曲江の岸北欄干に凭る。
水面陰生じて日脚殘す。
塵路行くこと多く綠袍故り、
風亭立つこと久しうして白鬚寒し。
詩成り闇に著して閒心記し、
山好し遙に偸みて病眼に看る。
馬前に省印を提せられずんば、

【字解】【一】日脚殘　日足の西に傾いたこと。
【二】綠袍　綠色の上衣。官服。
【三】闇著　暗記すること。
【四】省印　役所の印。
【五】郎官　郎中、員外等をいふ。

何人信道是郎官。
何人か信に是れ郎官なりと道はん。

時に樂天校書郎たり。

【題意】曲江は長安の池の名で都人士遊賞の地である。此詩は其處の亭上から夕方の景色を眺めて作つたのである。

【詩意】曲江の北亭なる亭上から見渡すと、西に傾いた日足が池の水にうつつて美しい。吾は世路の塵に汙れた綠袍を著、白鬚を生やして風前に立つた。詩が成つて暗に心に記憶し、山の景色が好いので病眼を擧げて眺めた。吾が馬前に役所の印が下つてゐなければ、誰も此が郎官だと思ふ者はあるまい。

初除主客郎中。知制誥。與王十一・李七・元九三舍人中書同宿。話舊感懷

初めて主客郎中・知制誥に除せられ、王十一・李七・元九三舍人と中書に同宿し、舊を話り懷に感ず

閒宵靜話喜還悲。
聚散窮通不自知。
已分雲泥行異路。

閒宵靜かに話りて喜び還悲む、
聚散窮通自ら知らず。
已に分とす雲泥異路に行くを、

【字解】【一】閒宵　靜かな夜。
【二】雲泥　一は雲となり一は泥となる。一は榮進し一は貶謫せられたこと。

忽驚鷄鶴宿同枝。　忽ち驚く鷄鶴同枝に宿るを。
紫垣曹署榮華地。　紫垣の曹署榮華の地、
白髮郎官老醜時。　白髮の郎官老醜の時。
莫怪不如君氣味。　怪む莫れ君が氣味に如かざることを、
此中來校十年遲。　此中來り校ぶれば十年遲し。

【題義】初めて主客郎中・知制誥（官名）に任せられ、王十一（王起なり）・李七（李宗閔）・元九（元稹）三人の中書舍人（官名）と中書省に同じく宿直し、昔語りをした感懷を述べた詩である。

【詩意】靜かな夜昔語りをすれば、聚散窮通は深く意に介せぬ積りであるが、喜ばしくもあり又悲しくもある。君等は雲となりて榮進し僕は泥となりて貶せられたのは固より當然であるが、今貴賤同じく中書に宿直するのは驚喜に値する。君等は中書舍人として榮華の地位に在るが、僕が白髮の身で微官に居るのは情ない。君等のやうに氣勢の揚らないのも不思議はあるまい。君等と比べると僕は十年ぐらゐ昇進が後れてゐるから。

【餘論】唐宋詩醇に「居易元和十年を以て江州司馬に貶せられ、十五年の冬忠州より召還せられ、尙書司門員外郎に拜せられ、主客郎中・知制誥に轉ず、外に在ること凡て六年、今を撫し昔を追ひ、無限の感慨あり、驚喜の二字一篇の綱領たり。第三句悲み、第四句喜び、第六句悲み、末二句喜中悲あり、其實悲の意喜より多し、深厚蘊藉、細玩して自ら知る。居易祿位に沾沾たるものにあらず。故に曰はく、聚散窮通不二自知一と。蓋し其命に安んずること素あり」と評してある。

【字解】【一】鷄鶴　鷄の如き賤き者と鶴の如き貴き者。
【二】紫垣曹署　中書舍人をいふ。
【三】白髮郎官　樂天自ら謂ふ。

西省對花憶忠州東坡新花樹。因寄題東樓

西省にて花に對し忠州東坡の新花樹を憶ひ、因つて東樓に寄題す

毎看闕下丹青樹。　毎に闕下丹青の樹を看て、
不忘天邊錦繡林。　天邊錦繡の林を忘れず。
西掖垣中今日眼。　西掖の垣中今日の眼、
南賓樓上去年心。　南賓の樓上去年の心。
花含春意無分別。　花は春意を含んで分別なく、
物感人情有淺深。　物は人情を感せしめて淺深有り。
最憶東坡紅爛熳。　最も憶ふ東坡紅爛熳、
野桃山杏水林檎。　野桃山杏水林檎。

【題義】中書省の花を看て忠州の東坡（東方の堤）の花を憶ひ出し、因つて州城の東樓に寄題したの

【字解】【一】西省　中書省。
【二】丹青　或は紅に或は青く。
【三】天邊　天涯といふが如し。忠州を指して言ふ。
【四】西掖　中書省。
【五】南賓　郡名。忠州なり。

である。寄題とは其地に往かずに遙に題すること。

【詩意】宮中の紅綠、色とりどりの花樹を見る毎に、忠州の錦の如き花樹を憶ひ出す。今日は中書省の花を看てゐるが、去年までは忠州に愁心を抱いてゐたのであつた。花は何等の分別もなく春の粧を凝らしてゐるが、人の心は物に感じて樣樣に動く、今頃は東坡の桃や杏や林檎の花が、爛熳と咲き亂れてゐるであらう。

寄題忠州小樓桃花　忠州小樓の桃花に寄題す

再遊巫峽知何日。再び巫峽に遊ぶは知んぬ何れの日ぞ、
總是秦人說向誰。總て是れ秦人說きて誰にか向ふ。
長憶小樓風月夜。長く憶ふ小樓風月の夜、
紅欄干上兩三枝。紅欄干上兩三枝。

【題義】忠州の小樓の前の桃花に寄題した詩である。寄題は前の詩に解した。

【詩意】再び忠州に遊び花を賞するのはいつの事か殆ど期し難く、周圍の人は皆長安の人ばかりだから、忠州の花の美しさを語つて聞かせてもわからない。ただ小樓の風月の夜に、朱塗の欄干の上に二枝三枝桃の咲いてゐる風情を獨り遙に憶ひ出してゐる。

【字解】【一】巫峽　忠州の近くの峽。知とは不知といふ意。【二】秦人　長安の人。

中書連直寒食不歸因憶元九

中書に連に寒食に直して歸らず、因つて元九を憶ふ

去歲清明日。南巴古郡樓。去歲清明の日、南巴古郡の樓。
今年寒食夜。西省鳳池頭。今年寒食の夜、西省鳳池の頭。
併上新人直。難隨舊伴遊。併せ上る新人の直、舊伴に隨ひて遊び難し。
誠知視草貴。未免對花愁。誠に草を視るの貴きを知るも、未だ花に對して愁ふるを免れず。
鬢髮莖莖白。光陰寸寸流。鬢髮は莖莖白く、光陰は寸寸流る。
經春不同宿。何異在忠州。春を經て同じく宿せずんば、何ぞ忠州に在るに異ならんや。

【字解】【一】清明　一年二十四氣節の一。寒食の直後。【二】南巴　郡名。忠州なり。【三】西省　中書省。鳳池は鳳凰池で、禁苑中の池の名。中書省の在る處。【四】新人　新參者。【五】視草　詔勅の草文を見る。

【題義】寒食（冬至から百五日をいふ）の頃連に中書省に宿直して自宅に歸らなかつたので、元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】去年の清明の頃は忠州にゐたが、今年の寒食には中書省に奉職し、新參者と一緒に宿直し

て昔の仲間と遊ぶことも出來ない。誠に詔の草文を視る貴い役目だとは思ふが、花に背くの愁を免れない。徒らにあくせくしてゐると、鬢髮は益〻白くなり歲月は遽慮なく去つてしまふ。春中君と同じく宿直しなければ、忠州に貶せられて君と遠く離れてゐた時と同じことだ。折角都に歸つたかひもない。

春憶二林寺舊遊。因寄郎・滿・晦三上人

春二林寺の舊遊を憶ひ、因つて郎・滿・晦三上人に寄す

一別東林三度春。一たび東林に別れて三たび春を度る、
每春常似憶情親。春毎に常に親を憶情するに似たり。
頭陀會裏爲逋客。頭陀會の裏逋客となり、
供奉班中作老臣。供奉班中老臣と作る。
清淨久辭香火伴。清淨久しく辭す香火の伴、
塵勞難索幻泡身。塵勞索め難し幻泡の身。
最慙僧社題牆處。最も慙ぢ僧社牆に題せし處、

【字解】【一】二林寺　廬山の東林寺と西林寺。
【二】頭陀會　佛敎修行の會。逋客　は逋逃の士。
【三】供奉班　天子に侍從する官位。
【四】香火伴　佛寺の友。
【五】塵勞　世俗の功勞。
【六】僧社　僧侶の仲間。

十八人名空一人。十八人の名一人を空しうするを。

【題義】春嘗て東西二林寺に遊んだ時の事を憶ひ、郎・滿・晦の三法師に寄せた詩である。

【詩意】一たび東林寺に別れ去つてから三度春を閱した。春の來る每に親兄弟を憶ふやうな懷しさを感ずる。今は佛敎修行の會を逃れて、陛下に侍從する老臣となり、久しく淸淨の仲間を離れ、泡沫夢幻の身を以て世俗の功勞を立てようとしても立て難い。嘗て十八人の仲間の名を牆に題したが、僕一人缺けてしまつたのは慚愧の至りだ。

和元少尹新授官

元少尹が新に官を授けらるるに和す

官穩身應泰。春風信馬行。官穩かにして身應に泰かるべし、春風馬に信せて行く。
縱忙無苦事。雖病有心情。縱ひ忙はしくとも苦事無けん、病むと雖も心情有り。
厚祿兒孫飽。前驅道路榮。厚祿兒孫飽き、前驅道路榮かなり。
花時八入直。無暇賀元兄。花時八たび直に入り、元兄を賀するに暇なし。

【字解】【一】元兄　元少尹を指す。

【題義】元少尹（小尹は官名）が新に官を授けられて作つた詩に和したのである。

【詩意】君は官事穏かに身も安泰で、馬に任せて春風の中を行き、たとひ忙しくとも苦労はなく、病むとも亦風情があるであらう。厚祿を食んでゐるから子孫まで豐に暮すことが出來、前驅がついて華華しく出入するであらう。僕は花咲く春に八回も宿直したので、君の新任を賀する暇もなくて失禮してゐる。

朝回和元少尹絶句

朝より回りて元少尹の絶句に和す

朝客朝回回望好。
盡紆朱紫佩金銀。
此時獨與君爲伴。
馬上青袍唯兩人。

朝客朝より回りて回望すること好し。
盡く朱紫を紆うて金銀を佩ぶ。
此時獨り君と伴を爲し、
馬上の青袍唯兩人のみ。

【字解】〔一〕朝客　朝廷の役人。〔二〕朱紫　印綬の色。金銀は官印なり。〔三〕青袍　青い上衣。官服。

【題義】朝廷から回つて元少尹の作つた絶句に和したのである。

【詩意】朝廷の役人達が朝廷から退出する所の有樣は仲仲の觀物だ。金銀朱紫の印綬が目もあやに輝いてゐる。僕は丁度君と道連になつたが、みすぼらしく馬上に青袍を著てゐるのは、君と僕だけであつた。

重和元少尹

重ねて元少尹に和す

鳳閣舍人京亞尹。
白頭俱未著緋衫。
南宮起請無消息。
朝散何時得入銜。

鳳閣舍人京の亞尹、
白頭にして俱に未だ緋衫を著けず。
南宮の起請消息なし、
朝散何の時か銜に入ることを得ん。

【字解】〔一〕鳳閣舍人　中書舍人。樂天時に中書舍人たり。京亞尹は京の少尹。〔二〕緋衫　緋色の上衣。〔三〕南宮　尚書省。〔四〕朝散　朝散大夫。銜は官吏の位階。

【題義】重ねて元少尹の詩に和したのである。

【詩意】僕は中書舍人、君は京の少尹で、俱に白髮の身でありながら、未だ緋衣を著る資格を得ない。尚書省の申請はどうなつてゐるか消息がない。いつになつたら、朝散大夫の位階を得られるであらう。待ち遠いことだ。

中書夜直夢忠州

中書に夜直して忠州を夢む

閣下燈前夢。巴南城裏遊。
覓花來渡口。尋寺到山頭。
江色分明綠。猿聲依舊愁。

閣下燈前の夢、巴南城裏に遊ぶ。
花を覓めて渡口に來り、寺を尋ねて山頭に到る。
江色分明に綠に、猿聲舊に依りて愁ふ。

禁鐘驚睡覺。唯不上東樓。

【字解】〔一〕閣下　閣は鳳閣。中書省をいふ。〔二〕巴南　忠州。〔三〕渡口　わたし場の口。〔四〕禁鐘　宮中で鳴らす鐘。〔五〕東樓　忠州城東の樓。

【題義】中書省に宿直して忠州を夢みたことを述べた詩である。

【詩意】中書省の燈下で忠州に遊んだ夢を見た。花を尋ねて渡津に來り、寺を訪うて山頂に往つたりした。長江の水は綠の色が鮮かで、猿の聲は昔ながらに悲しかつた。禁中の鐘の音に忽ち夢を破られて、遂に東樓へは登らないでしまつた。

醉後

酒後高歌且放狂。
門前閑事莫思量。
猶嫌小戸長先醒。
不得多時住醉鄉。

【字解】〔一〕閑事　つまらない事。思量は考慮すること。〔二〕小戸　下戸なり　酒量の少い人。

【題義】醉後に作つた詩である。

【詩意】醉後には高聲に歌ひ且つ狂態を演ずるがよい。世間のつまらない事などは敢て頓著するには及ばない。ただ下戸な奴があつて、忽ち醒めてしまつて、生眞面目な顏をしてゐるのが氣に食はない。

待漏入閣書事奉贈元九學士閣老

漏を待つて閣に入るとき事を書して元九學士閣老に贈り奉る

衙排宣政仗。門啓紫宸關。
彩筆停書命。花甎趂立班。
稀星點銀礫。殘月墮金環。
闇漏猶傳水。明河漸下山。
從東分地色。向北仰天顏。
碧縷爐煙直。紅垂珮尾閒。
綸闈慙竝入。翰苑忝先攀。
笑我青袍故。饒君茜綬殷。
詩仙歸洞裏。酒病滯人間。
好去鴛鴦侶。冲天便不還。

【字解】【一】漏　水時計。入朝の時刻。闕は風聞、卽ち中書省。時に樂天は中書舍人たり。【二】闕老　中書舍人の年久しき者の稱。【三】銜排　長官儀仗を陳設し僚屬次を以て參謁するを排銜といふ。宣政は宮殿の名。【四】紫宸　宮殿の名。雍錄に「含光の北を宣政となし、宣政の北を紫宸となす」とある。【五】花甎　美しき敷瓦。班は官列。【六】閣漏　水時計。【七】明河　あまのがは。【八】天顏　天子の御顏。【九】珠尾　佩玉の末。【一〇】綸闈　制誥を擬議する處。【一一】翰苑　翰林なり。【一二】青袍　青色の上衣。官服。【一三】曹綬　朱綬。綬は君にかなはぬ故、君にゆるして讓るとなり。【一四】詩仙　元稹を指す。【一五】鴛鷺侶　仕官の同僚。【一六】沖天　天上に飛びあがること。

【題義】定めの時刻が來て宮門の開くのを待ち、中書省に入る時、所感を書して元稹に贈つた詩である。

【詩意】定めの時刻が來て宣政殿に儀仗を排列し、紫宸殿の門が開かれると、彩筆を執り、停りて心覺えに詔命を書し、美しき敷瓦の上を進み行きて己の列位に立つ。時にまばらな星が銀の礫のやうに點點し、殘月が金の環のやうに山の端に懸り、水時計の水は猶流れて止まず、天の河は遠山の末に垂れ、東の方から段段に夜が明け離れると、やがて天子樣が出御になり、一同北に向つて拜謁する。殿に昇れば香爐の綠煙が絲の如く眞直に上り、役人だちの帶の端が紅に垂れてゐる。嘗て君より先に翰林學士になつたが、今は君と相竝んで中書省に入る。いつまでも青袍を纏うてゐるのを自ら笑ひ、君が苦色の綬の色鮮かなのには一歩を讓らざるを得ない。君の如き詩仙は仙洞の裏に歸り、僕の如き酒病は俗界に沈淪するのは當然なことだ。君の如きは、あつばれ官吏の仲間を去つて高く天空に飛び上り、永久に俗界には歸り來ぬであらう。

晚春重到集賢院

晚春重ねて集賢院に到る

官曹清切非人境。　官曹清切人境に非ず、
風日鮮明是洞天。　風日鮮明是れ洞天。
滿砌荆花鋪紫毯。　砌に滿つる荆花は紫毯を鋪き、
隔墻榆莢撒青錢。　墻を隔つる榆莢は青錢を撒す。
前時謫去三千里。　前時謫去三千里。
此地辭來十四年。　此地辭し來りて十四年。
虛薄至今慙舊職。　虛薄今に至るまで舊職を慙づ、
院名擡舉號爲賢。　院を擡舉と名づけ號を賢と爲す。

【題義】春の末に重ねて集賢院（役所の名）に往つた時作つた詩である。樂天は元和二年に集賢校理に任ぜられ、此役所に務めてゐたのである。

【詩意】此役所は清淨な地で、まるで仙境のやうだ。庭には一面に紫の絨緞を敷いたやうに荆の花が咲いて居り、墻を隔てて榆の實が青い錢をちらしたやうに落ちてゐる。嘗て自分は三千里外の江州に謫せられ、此役所を去つてから既に十四年になる。僕のやうな愚物が此役所に務めてゐたことを今以

【字解】【一】官曹　役所。集賢院を指す。【二】洞天　仙人の居る處。【三】荆花　いばらの花。紫毯は紫の絨緞。【四】榆莢　にれの實。【五】擡擧　其人を奬拔するなり。

て慙ぢてゐる。何となれば此役所の名は集賢院といふのだもの。

紫薇花

紫薇花

絲綸閣下文書靜。絲綸閣下文書靜かなり、
鐘鼓樓中刻漏長。鐘鼓樓中刻漏長し。
獨坐黃昏誰是伴。獨坐黃昏誰か是れ伴ふ、
紫薇花對紫薇郎。紫薇花は紫薇郎に對す。

【題義】紫薇花は百日紅なり。中書省には多く紫薇を植ゑてあるといふ。

【詩意】中書省には文書が穩かで、鐘鼓樓では時を告げる聲がのんびりとしてゐる。我夕方獨り坐する時、誰が相手をしてゐるかといふに、紫薇花が相對して咲いてゐるばかりだ。

【字解】〔一〕絲綸閣　詔勅を擬撰する處、中書省。〔二〕鐘鼓樓　時刻を報ずる鐘樓・鼓樓。刻漏は時刻。〔三〕紫薇郎　中書郎。樂天自ら謂ふ。

卜居

遊宦京都二十春。京都に遊宦すること二十春、
貧中無處可安貧。貧中處として貧を安んず可き無し。
長羨蝸牛猶有舍。長へに羨む蝸牛の猶ほ舍有るを、
不如碩鼠解藏身。如かず碩鼠の解く身を藏すに。
且求容立錐頭地。且つ錐頭を容立する地を求めて、
免似漂流木偶人。漂流せる木偶人に似るを免る。
但道吾廬心便足。但道ふ吾が廬は心便ち足ると、
敢辭湫隘與囂塵。敢て辭せんや湫隘と囂塵と。

【題義】新に新居を定めたことを述べた詩である。

【詩意】京に出て役人生活をしてから二十年になるが、我が貧を安んじてくれるやうな處はどこにもない。蝸牛でさへ家を持ち、碩鼠でさへ身をかばふことを知つてゐるのに、自分は我が身を掩ふ家もないとは、蟲けらにさへ劣つたことだ。どうか錐を立てるだけの小さい土地でも欲しいと思つてゐたが、やつと新居を卜することが出來て、まあ雨に押し流される木偶人たるを免れた。ただ心靜かにすることが出來れば、狹くともうるさくとも敢て問ふ所ではない。

【字解】〔一〕遊宦　官吏となつて他郷にゆくこと。〔二〕蝸牛　かたつむり。〔三〕碩鼠　鼠の類にして大なり。〔四〕漂流　ただよふ。木偶人は木で作つた人形。史記孟嘗君傳に、雨が降れば木偶人が流し去られる話がある。〔五〕湫隘　土地低くして狹きこと。囂塵　はうるさきこと。

題新居寄元八

新居に題し元八に寄す

青龍岡北近西邊。
移入新居便泰然。
冷巷閉門無客到。
煖簷移榻向陽眠。
階墀寬窄纔容足。
墻壁高低粗及肩。
莫羨昇平元八宅。
自思買用幾多錢。

【題義】新居に題し、元八（京兆少尹）に寄せた詩である。卷十五の和三元八侍御升平新居二四絶句を參照せよ。

【詩意】青龍岡の北の西に寄つた新居に落附いて始めて安泰を感じた。淋しき町に門をしめ切つておくので誰訪ふ者もなく、暖かな簷先に腰掛を移して陽ぼつこをしてゐる。庭の廣さは纔かに足を容るるに足り、牆の高さは肩までしかない。昇平里の君の家に較べると見劣りがするが、値段が値段だから仕方がない。

【字解】【一】青龍岡　岡の名。
【二】冷巷　さびしき町。
【三】階墀　階庭。寬窄は廣狹。
【四】昇平　長安の里の名。

新居に移り入りて便ち泰然。
冷巷門を閉ぢて客の到る無く。
煖簷榻を移して陽に向ひて眠る。
階墀寬窄纔に足を容れ、
墻壁高低粗肩に及ぶ。
羨む莫れ昇平元八が宅、
自ら思ふ買ひ用ふること幾多錢ぞ。

登龍尾道南望憶廬山舊隱

龍尾道邊來一望。
香爐峯下去無因。
青山舉眼三千里。
白髮平頭五十人。
自笑形骸紆組綬。
將何言語掌絲綸。
君恩壯健猶難報。
況被年年老逼身。

【題義】龍尾道（含元殿の前の升殿の道で、下から上ると傾斜してゐて屈曲七轉、龍尾の下垂するやうだから此名がある）に登つて南を望み廬山の舊隱を憶うて作つたのである。

【詩意】龍尾道の邊から南を望んで廬山の舊隱を憶ひ出したが、今や香爐峯下の山居に歸らうにも歸れない。眼を擧げると三千里外の青山が見えるやうな氣がする。自分も今、丁度五十歲の白毛爺になつた。印綬を紆うて宮仕するさへ苦笑に堪へないのに、文字を弄して詔書を掌るのは尙更である。達

【字解】【一】香爐峯　廬山の峰の名。
【二】平頭　丁度の意。
【三】組綬　印綬なり。
【四】絲綸　詔勅。時に樂天中書舍人として詔書を掌ることを掌る。

龍尾道邊來りて一望し、
香爐峯下去るに因なし。
青山眼を擧ぐれば三千里、
白髮平頭五十の人。
自ら笑ふ形骸に組綬を紆ふを、
何を將てか言語絲綸を掌る。
君恩は壯健なるも猶報い難し、
況んや年年老に逼らるる身をや。

者な時でさへ君恩に報いることが出來なかつたのに、年年老いさらぼひ行く身は、思ひも寄らない。早く引退したいものだ。

馮閣老處見與嚴郎中酬和詩因戲贈絶句

馮閣老の處にて嚴郎中と酬和せる詩を見、因つて戲に絶句を贈る

乍來天上宜清淨。不用回頭望故山。
縱有舊遊君莫憶。塵心起卽墮人間。

【題義】馮閣老の處で嚴郎中と酬和した詩を見て、戲に此絶句を作つて呈したといふのである。

【詩意】苟くも天上にも比すべき中書省に來た以上は、宜しく心を清淨にすべきである。故郷の事などを回想すべきではない。たとひ舊遊があつてもそんなことは念頭に置かぬがよい。少しでも俗念が湧けば忽ち下界に墮ちてしまふであらう。

【字解】〔一〕馮閣老　馮は姓。閣老とは中書舍人の年久しき者の稱。〔二〕天上　中書省をいふ。〔三〕塵心　俗氣。人間は俗世間。

見于給事暇日上直寄南省諸郎官詩因以戲贈

于給事暇日直に上り南省の諸郎官に寄せし詩を見て、因つて以て戲に贈る

倚作天仙弄地仙。天仙と作るに倚りて地仙を弄す、
誇張一日抵千年。誇りて一日を張りて千年に抵る。
黃麻敕勝長生籙。黃麻の敕は長生の籙に勝り、
白紵詞嫌內景篇。白紵の詞は內景の篇を嫌ふ。
雲彩誤居青瑣地。雲彩誤りて青瑣の地に居り、
風流合在紫微天。風流合に紫微の天に在るべし。
東曹漸去西垣近。東曹漸く去つて西垣近し、
鶴駕無妨更著鞭。鶴駕更に鞭を著くるに妨げなし。

【題義】于給事中が暇日に宿直所に上り、尙書省の郎官連に寄せた詩を見て、戲に于給事に贈つた詩である。

【詩意】君は天仙の身で下り來りて地仙を弄し、一日の暇日を千年に當てて樂んでゐる。やはり天宮

【字解】〔一〕于給事　于は姓、給事は給事中の略。官名。〔二〕南省　尙書省をいふ。〔三〕天仙　天上の仙人。于給事に喩ふ。地仙は地上に居る仙人。南省の諸郎官に喩ふ。〔四〕黃麻　詔書を書く紙。長生籙は仙方の書。〔五〕白紵　布の細くして潔白なるもの。古樂府に「白紵歌あり、實は輕雲の如く色は霜の如し」の句あり。朝廷の文書に喩ふ。內景は道書黃庭經の異稱なり。〔六〕青瑣　宮門なり。連瑣の模樣を刻し、青く塗る故此名あり。〔七〕紫微　天子の居る處。〔八〕東曹　門下省。給事中は此省に屬す。西垣は中書省。〔九〕鶴駕　仙人の乘物。列仙傳に「周の靈王の太子晉、七月七日白鶴に乘り、山嶺に駐り、時人に謝して飛び上る」とある。

の詔書の方が仙人の書よりも勝つてゐるから、君は彩雲の間を下つて宮中に來たのであらう。然も門下省を去つて中書省に移るのも遠くはあるまいから、もう一鞭鞭つて鶴駕を進めるがよい。

【餘論】蔡寛夫詩話に「唐制に諫議大夫は給事中の上に班し、中書舍人は班又之に次ぐ、然れども外より入りて諫議たる者は歳滿ちて始めて給事中に遷り、歳滿ちて始めて舍人に遷る。蓋し下を以て進むとなす。故に上坡下坡の説あり。樂天が贈二于給事一詩の雲彩誤居青瑣地の四句は、以て戯となすと雖も、亦當時の實事なり」とある。

題新昌所居

宅小人煩悶。泥深馬鈍頑。
街東閒處住。日午熱時還。
院窄難栽竹。墻高不見山。
唯應方寸内。此地覓寛閒。

新昌の所居に題す

宅小にして人煩悶す、泥深くして馬鈍頑なり。
街東閒處に住し、日午熱時に還る。
院窄くして竹を栽ゑ難く、墻高くして山を見ず。
唯應に方寸の内、此地寛閒を覓むべし。

【字解】(一)院　庭。(二)方寸　心なり。

【題義】新昌里(樂天は長慶元年二月に長安の新昌里に卜居した)の新居に題した詩である。

【詩意】家が小さいので氣がくさくさし、泥が深くて出入に痩馬が難む、町の東の靜かな處に住み、日中の熱い時還つて來る。庭が狹いので竹を栽ゑる餘地もなく、牆が高くて山を眺めることも出來ない。ゆつくりとした住ひなどは、此世では、唯心中に求めるより外はない。

西省北院新構小亭。種竹開窓。東通騎省。與李常侍隔窓小飲。因題四韻

西省の北院、新に小亭を構へ、竹を種ゑ窓を開き、東のかた騎省に通ず。李常侍と窓を隔てて小飲し、因つて四韻を題す

結託白鬚伴。因依青竹叢。
題詩新壁上。過酒小窓中。
深院晚無日。虛簷涼有風。
金貂醉看好。回面紫垣東。

結託す白鬚の伴、因依す青竹の叢。
詩を題する新壁の上、酒を過ごす小窓の中。
深院晚れて日無く、虛簷は涼しくして風有り。
金貂は醉うて看ること好し、面を回らす紫垣の東。

【字解】(一)西省　中書省。北院は北の庭。(二)騎省　散騎常侍の役所。(三)李常侍　李は姓。常侍は散騎常侍。(四)金貂　侍中・常侍の冠の飾。(五)紫垣　禁中をいふ。

【題義】中書省の北庭に新に小亭を構へ、竹を栽ゑ窓を開いて東の方散騎常侍の役所に通ずるやうにし、散騎常侍李氏と窓を隔てて酒を飲んだ。因つて此八句四韻の詩を題したといふのである。

【詩意】白髮の老人仲間と結託し、小亭を構へて竹叢に依り、新壁の上に詩を題したり、小窓の中に酒を飲んだりして樂んでゐると、いつしか日が暮れて、亭中に涼風が吹き入り、誠に快いことである。折しも君の金貂が特に目についたので、東の方の君の役所を望み見た。

【餘論】蘇東坡曰はく「元祐元年予中書舍人たりし時、執政本省の事多く漏泄するを患へ、舍人の廳後に於て籬を作り、同省の往來を禁せんと欲す。予諸公に白す、應に須らく簡要清通なるべし。何ぞ必ずしも籬を栽ゑ棘を揷まんと。諸公笑うて止む。明年竟に之を作る。暇日樂天の此詩を讀み、乃ち知る、唐時の西掖の後、窓を作り以て東省に通ずるを。而して今日本省往來するを得ず。歎ずべし」と。

酬元郎中同制加朝散大夫書懷見贈

元郎中が同じく朝散大夫を制加せられ、懷を書して贈られしに酬ゆ

命服雖同黃紙上。　命服は黃紙の上に同じと雖も、
官班不共紫垣前。　官班は紫垣の前に共にせず。
青衫脫早差三日。　青衫は脫ぐこと早し差三日、
白髮生遲校九年。　白髮は生ずること遲し校九年。
曩者定交非勢利。　曩者交を定めしは勢利に非ず、
老來病是詩篇。　老來病を同じくするは是れ詩篇。
終身擬作臥雲伴。　身を終るまで臥雲の伴と作らんと擬す、
逐月須收燒藥錢。　月を逐ひて須らく藥を燒く錢を收むべし。
五品足爲婚嫁主。　五品は婚嫁の主と爲るに足れり、
緋袍著了好歸田。　緋袍著了りて好し田に歸らん。

【字解】【一】朝散大夫　文官の德行聲望ある者に加ふる位階。從五位下なり。制加は詔ふ以て加ふること。
【二】命服　官吏の位階に依りて定められてゐる制服。黃紙は詔書。
【三】官班　官位。紫垣は紫宸殿。
【四】青衫　青い上衣。官服。
【五】臥雲　隱遁すること。
【六】五品　五位。
【七】緋袍　緋の上衣。

【題義】元郎中が樂天と同時に詔を以て朝散大夫を加へられたので、感懷を書して樂天に贈つた。

【詩意】君と僕とは官職こそ異なれ、詔に因つて同じく命服を賜はつた。僕は君より三日早く青衫を脫いだが、齡は君の方が僕より九歲若い。嘗て君と交りを訂したのは勢利を求むる爲ではない。併し詩を好む病癖は老來相同じである。早く官を退いて俱に隱遁しよう。就いては月月仙藥を錬る資金を貯へて置かう。五位になつたからには子女の緣組の助にもなるから、緋袍を著て故山に歸らう。

初著緋戲贈元九

初めて緋を著て戯に元九に贈る

晩遇緣才拙。先衰被病牽。
晩く遇するは才の拙きに縁り、先づ衰ふるは病に牽かるる。
那知垂白日。始是著緋年。
那ぞ知らん白を垂るるの日、始めて是れ緋を著るの年。
身外名徒爾。人間事偶然。
身外名徒爾、人間事偶然。
我朱君紫綬。猶未得差肩。
我は朱にして君は紫綬、猶未だ肩を差ぶるを得ず。

【字解】【一】遇　幸運にめぐりあつたこと。【二】垂白　髮を垂れる。【三】徒爾　つまらないこと。【四】人間　世間。

【題義】初めて緋袍を著る資格を得た時、戯に元稹に呈した詩である。

【詩意】やつと今頃になつて幸運にめぐり遇つたのは吾が才が鈍いからで、先づ老衰したのは病氣の爲である。白毛頭になつて始めて緋袍を著ることが出來るやうになつた。身外の名などはつまらぬものの、我は朱綬であるのに君は一段上の紫綬を帶びてゐるのだから、やはり肩を比べてあるくことは出來ない。

和韓侍郎苦雨

韓侍郎が雨に苦むに和す

潤氣凝柱礎。繁聲注瓦溝。
潤氣柱礎に凝り、繁聲瓦溝に注ぐ。
閣留窓不曉。涼引簟先秋。
閣留りて窓曉けず、涼引きて簟先づ秋なり。
葉濕蠶應病。泥稀燕亦愁。
葉濕ひて蠶應に病むべし、泥稀にして燕亦愁ふ。
仍聞放朝夜。誤出到街頭。
仍聞く放朝の夜、誤り出でて街頭に到るを。

【字解】【一】放朝　羣臣朝會を免ぜられて朝會せぬこと。白樂天の詩に「歸騎紛紛下三九衙、放朝三日爲泥塗」とあり、又宋史に仁宗天聖四年六月、京師大水、壞民舍、溺死者數百人、時宰執方晨朝、未入、有旨放朝とあれば、事ある時朝會を免ぜらるるなり。

【題義】韓侍郎は兵部侍郎韓愈である。此詩は韓愈が雨に苦む詩に和したのである。

【詩意】柱礎には濕氣が凝集し、瓦の溝には雨の流れる聲が繁く聞え、窓のあたりはいつまでも暗く、簟の上に臥してゐると秋の來たやうに涼しい。葉がぬれて蠶が病に罹るであらう。泥がなくなつて燕も巣を作るのに困るであらう。聞けば君も放朝の晩に、誤つて町中に出て難儀されたさうな。

連雨

連雨

風雨閣蕭蕭。雞鳴暮復朝。
風雨閣に蕭蕭たり、雞鳴暮復朝。
碎聲苦竹籠。冷翠芭蕉。
碎聲苦竹に籠り、冷翠芭蕉に落つ。
水鳥投簷宿。泥蛙入戸跳。
水鳥は簷に投じて宿し、泥蛙は戸に入りて跳る。
仍聞蕃客見。明日欲追朝。
仍聞く蕃客見え、明日朝を追はんと欲すと。

【字解】【一】蕭蕭　淋しき風。【二】疎竹　竹に風雨の當る聲。苦竹は竹の一種。【三】春客　外國の賓客。【四】進朝　登朝すること。

【題義】連日連夜雨の降る樣を敍した詩である。

【詩意】雨風が淋しく降りそそぎ、鷄は朝となく晩となく鳴き、竹叢にはさらさらと聲がして、芭蕉の葉影がつめいたやうに見え、水鳥さへ人の軒端に逃げ込み、蛙も戸の中に飛び入る。聞けば外夷の來賓が明日は參朝して拜謁の禮を行ふさうだが、さぞ難儀なことであらう。

初加朝散大夫又轉上柱國

初めて朝散大夫を加へられ又上柱國に轉ず

紫微今日煙霄地。紫微今日煙霄の地、
赤嶺前年泥土身。赤嶺前年泥土の身。
得水魚還動鱗鬣。水を得たる魚は還鱗鬣を動かし、
乘軒鶴亦長精神。軒に乘る鶴も亦精神を長ず。
且慙身忝官階貴。且つ慙づ身の官階の貴きを忝くするを。
未敢家嫌活計貧。未だ敢へて家は活計の貧を嫌はず。

【字解】【一】朝散大夫　文官の徳行聲望ある者に加ふる位階、從五位下なり。上柱國は勳等の最も尊きもの。【二】紫微　中書省をいふ。煙霄は煙たなびく大空、天上の仙境。【三】赤嶺　赤肌の逃山。【四】得水魚　貶謫を敍された身に喩ふ。【五】乘軒鶴　大夫の車に乘る鶴。樂天自ら君寵を得た身に喩ふ。【六】活計　生計。【七】生人　生民なり。人民をいふ。

柱國勳成私自問。柱國勳成りて私に自ら問ふ、
有何功德及生人。何の功德有りて生人に及ぶと。

【題義】初めて朝散大夫を加へられ又上柱國に轉じた時に作つた詩である。

【詩意】去年までは忠州に貶せられてゐたが、今日は宮中に仕へ奉ることになり、もとのやうに君恩を蒙り、身も心も安らかに活動の出來るやうになつた。かくの如き貴き官階に陞つたのは誠に忝ないことで、生計の貧しいことなどは問題ではない。おまけに上柱國といふ最高の勳記まで賜はることになつたので「一體お前は人民に對して何の功德があつたのか」と、私かに自ら問うて見た。

行簡初授拾遺同早朝入閣因示十二韻

行簡初めて拾遺を授けられ同じく早朝して閣に入る、因つて十二韻を示す

夜色尙蒼蒼。槐陰夾道長。
聽鐘出長樂。傳鼓到新昌。
宿雨沙隄潤。秋風樺燭香。
馬驕欺地軟。人健得天涼。
待漏排閶闔。停珂擁建章。

夜色尙蒼蒼たり、槐陰路を夾みて長し。
鐘を聽きて長樂を出で、鼓を傳へて新昌に到る。
宿雨沙隄潤ひ、秋風樺燭香ばし。
馬驕りて地の軟かなるを欺き、人健にして天の涼を得たり。
漏を待ちて閶闔を排し、珂を停めて建章を擁す。

爾隨黃閣老。吾次紫微郎。
竝入連稱籍。齊趨對折方。
闕班花接蕚。綽立鴈分行。
近職誠爲美。微才豈合當。
綸言難下筆。諫紙易盈箱。
老去何僥倖。時來不料量。
唯求致身地。相誓答恩光。

【字解】【一】行簡　樂天の弟。【二】蒼蒼　暗き貌。【三】槐陰　唐時天街の兩畔に槐樹多し、因つて槐衙と號す。行列を成すこと排衙の如きをいふなり。【四】長樂　宮の名。【五】新昌　長安の町の名。【六】宿雨　よひの雨。【七】棒燭　棒の皮を以て蠟を卷きて燭となす。【八】欹　侍るといふが如し。【九】待漏　入朝の時刻を待つ。闕闕は宮門。【一〇】珂　馬のくつわ。述宰は宮名。【一一】黃閣　門下省をいふ。左拾遺は此省に屬す。【一二】紫微郎　中書舍人。【一三】猶ノ籍　己の名札を差出す。【一四】折ノ方　方向を轉ずる。【一五】闕班　朝班の左右合するをいふ。唐書武后紀に「御殿日昧爽、宰相兩省の官香案の前に闕班す。扇の開くを俟ちて事を通じて贊拜す」とある。【一六】綽立　ゆるやかに立つ。【一七】近職　天子の側近に仕ふる官職。【一八】綸言　詔書。【一九】諫紙　諫奏の書。【二〇】恩光　天子の御恩。

【題義】行簡が初めて拾遺（官名）に任ぜられ、相俱に朝早く參内する時、十二韻二十四句の此詩を作つて示したといふ意。

【詩意】夜未だ全く明けずして薄暗く、槐が道を挾んで長く續き、長樂宮で鳴らす鐘や鼓が新昌里まで聞え、雨あがりの沙道が潤ひ秋風に樺燭が香ばしい。馬は勢がよくて地の柔かなのを偸り、人は涼氣を受けて身の健なるを覺える。定めの時刻が來て宮門が開かれると、參内の官吏が一同建章宮の周圍に馬を停める。汝は門下省に務め我は中書舍人であるので、竝び入りて名札を捧げ、やがて方向を轉ずる。朝官の列の相對するは花の蕚を接するが如く、緩かに立てる樣は雁の行列を分つが如くである。天子の側近に仕ふるは身の榮華ではあるが、實は吾等の如き鈍才の敢て當る所ではない。故に詔文を認める（中書舍人）に筆を下し難く、諫書（拾遺）が停滯して箱に盈ち易い。併し老いて今日の官職に陞つたのは、實に僥倖であつて、好運の來るのは全く豫期し難いものである。ただ身を致すの地位を求めて、誓つて君恩に報いることを心懸けよう。

立秋日登樂遊園

獨行獨語曲江頭。
回馬遲遲上樂遊。
蕭颯涼風與衰鬢。
誰教計會一時秋。

立秋の日樂遊園に登る

獨行き獨語る曲江の頭、
馬を回らし遲遲として樂遊に上る。
蕭颯たり涼風と衰鬢と、
誰か計會して一時に秋ならしむる。

【字解】【一】樂遊園　長安の曲江の邊に在る。地勢高敞、眺望絶佳である。【二】遲遲　遲行のおそき貌。【三】蕭颯　淋しき貌。【四】計會　會計に同じ、計算すること。

【題義】立秋の日に樂遊園に遊んだ詩である。

【詩意】曲江の邊を獨語をいひながら馬に跨つてとぼとぼと樂遊園に登つた。涼風が衰鬢を吹いて坐ろに身のあぢきなさを感せしめる。誰が計算を立てて、かくは一時に憔悴せしめるのであらう。

新秋早起。有懷元少尹

新秋早起、元少尹を懷ふあり

秋來轉覺此身衰。　秋來りて轉た覺ゆ此身の衰へたるを、
晨起臨階盥漱時。　晨に起き階に臨みて盥漱する時。
漆匣鏡明頭盡白。　漆匣鏡明かにして頭盡く白く、
銅缾水冷齒先知。　銅缾水冷かにして齒先づ知る。
光陰縱惜難留住。　光陰は縱ひ惜むも留住し難く、
官職雖榮得已遲。　官職は榮ゆと雖も得ること已に遲し。
老去相逢無別計。　老い去りて相逢うも別計なし、
強開笑口展愁眉。　強ひて笑口を開きて愁眉を展ぶ。

【題義】秋の初に朝早く起きて元少尹（前に見ゆ）を懷うた詩である。

【詩意】秋に入つてからは特に我が身の衰へを感じる。朝起きて顏を洗ふにも、鏡を見れば頭髮は盡く白く、漱の水が齒にしみる。歲月はいくら惜むとも引留めては置けず、官職は高くとも得ることの遲かつたのが殘念である。老いては君と逢うても別によい考もない。ただ強ひて口を開いて笑つたり、愁眉を展べたりする位のものだ。

【字解】〔一〕漆匣　漆で塗った鏡箱。
〔二〕銅缾　銅の水さし。
〔三〕留住　引きとめておく。

夜箏

紫袖紅絃明月中。　紫袖紅絃明月の中、
自彈自感闇低容。　自ら彈じ自ら感じて闇に容を低る。
絃凝指咽聲停處。　絃凝り指咽びて聲の停る處、
別有深情一萬重。　別に深情一萬重なるあり。

【題義】夜箏を彈じて作つた詩である。

【詩意】明月の前で、紫の著物を著て紅の絃の箏を彈じ、深く自ら感動しうつむいて悲んだ。絃が凝り指が停つて暫く聲の絕える處に、萬倍の深情がこもつてゐる。

【字解】〔一〕指咽　彈く指が滯ること。

妻初授邑號告身

弘農舊縣授新封。
鈿軸金泥誥一通。
我轉官階常自愧。
君加邑號有何功。
花牋印了排窠濕。
錦標裝來耀手紅。
倚得身名便慵墮。
日高猶睡綠窓中。

【題義】樂天の妻が初めて弘農縣君（唐の制によれば五品の人の母や妻は縣君に封ぜられる定めである。）封ぜられた時に作つた詩である。

【詩意】吾が妻は新に弘農縣君の封爵を授けられ、金泥で書いて鈿軸に卷いた詔書一通を賜はつた。我が官階の進んだのをさへ自ら愧ぢてゐるのに、妻まで何の功もなくて封號を加へられたのは誠に忝ない。封爵の辭令書の美しい紙に印窠が潤ひ、錦の標裝が手に輝いて紅である。併し妻は邑號を賜はつてからは得意になつて懶者になり、日の高く升るまで寢込んでゐる。

【字解】〔一〕邑號　縣邑の稱號。告身は封爵の符。
〔二〕弘農　縣名。
〔三〕鈿軸　金鈿を以て飾つた卷物の軸。金泥は文字を書く泥。誥一通は一通の詔書。
〔四〕君　妻を指す。
〔五〕花牋　美しき紙。窠は刻印の周圍の界格。
〔六〕錦標　錦の標帙。
〔七〕慵墮　墮は惰に通ず。

送客南遷

我說南中事。君應不願聽。
曾經身困苦。不覺語丁寧。
燒處愁雲夢。波時憶洞庭。
春畬煙勃勃。秋瘴露冥冥。
蚊蚋經冬活。魚龍欲雨腥。
水蟲能射影。山鬼解藏形。
穴掉巴蛇尾。林飄鴆鳥翎。
颶風千里黑。藪草四時青。
客似驚弦鴈。舟如委浪萍。
誰人勸言笑。何計慰漂零。
愼勿琴離膝。長須酒滿瓶。

客の南遷を送る

我南中の事を說くも、君應に聽くを願はざるべし。
曾て經て身困苦し、覺えず語丁寧。
燒く處雲夢を愁へ、波たつ時洞庭を憶ふ。
春畬煙勃勃、秋瘴露冥冥。
蚊蚋冬を經て活き、魚龍雨らんと欲して腥さし。
水蟲能く影を射、山鬼解く形を藏す。
穴には巴蛇の尾を掉ひ、林には鴆鳥の翎を飄へす。
颶風千里黑く、藪草四時青し。
客は弦に驚く鴈に似たり、舟は浪に委する萍の如し。
誰人か言笑を勸めん、何の計か漂零を慰めん。
愼みて琴を膝より離す勿れ、長く須らく酒を瓶に滿たすべし。

大都從此去。宜醉不宜醒。

【字解】【一】南中　南の地方。【二】丁寧　くどくどと説き立てる。【三】雲夢　楚の大澤の名。【四】洞庭　江南の大湖の名。【五】春舍　新に墾した田地を舍といふ。【六】秋瘴　瘴は惡氣。冥冥は暗き貌。【七】蚊蚋　蟲の名。か。【八】水蟲　水蓐なり。蟲の名。水中に在りぬかを含んで人を射る。【九】鳥　鳥の名。其羽に毒あり、よく人を殺す。【十】藜草　山菜なり。四時は春夏秋冬。

【直義】南方に貶せられる人を送る詩である。

【詩意】我南方の事を話すとも、恐らく君は聽くことを願はぬであらう。我は南方で色色苦辛を重ねたから、覺えず話がくどくなるが、燒くやうに熱い處は雲夢にでも居るかと愁へ、大波の立つ時は洞庭もかくやと憶ひ、春の畠には煙がもやもやと升り、秋には毒氣がむらむらと起り、冬でも蚊が飛びまはり、雨の降る時は魚龍が腥さく、水弩が水の中から人を射、山鬼が山陰に身を潛め、穴には蛇が尾を掉ひ、林には鴆鳥が羽を飄へし、颶風の吹く時は千里も暗くなり、野菜は年中青青と茂つてゐる。こんな處に貶せられる人は弓弦の音に驚く雁の如く、一刻も安き心はなく、舟は浪のまにまに漂ふ萍の如くである。誰あつて倶に言笑する者なく、沈淪を慰める方便もない。ただ琴を彈じ酒を飲んで自ら心を遣る外はない。一旦此地を去つたら、いつも醉つてゐるがよいのだ。

【餘論】唐宋詩醇に云く「將に南中の苦を詳說せんと欲して先づ、君應不願聽の五字を著す。曲折具擧。中幅風土物產を鋪敍し、末に之を送るの情を結び出す。此詩は前の送客春遊嶺南二十韻（卷十七）と同一機局なり。然れども彼は宦遊に係る。故に規するに貪らざるを以てし、此は遷謫に係る。故に進むるに自ら遣らんことを以てす。義各〻取るあるのみ」と。

暮歸

不覺百年半。何曾一日閒。
朝隨燭影出。暮趁鼓聲還。
甕裏非無酒。墻頭亦有山。
歸來常困臥。早晚得開顏。

【字解】【一】百年　人の一生をいふ。【二】鼓聲　日暮を報ずる鼓の聲。【三】開顏　愁を舞らす。

【直義】暮に役所から退出して自宅に歸る感懷を述べた詩である。

【詩意】忽ち人生の半を過ぎて五十の坂を越してしまつたが、未だ嘗て一日でも閑な時とてはなかつた。朝は夜の明けないうちに起き、燈下に支度を整へて出勤し、夕方は暮の鼓の聲を聞いて始めて歸宅する。甕の中には憂を掃ふべき酒があり、墻の上には眺むるに足る山があるけれども、歸つて來ると疲れ果てて先づ寢ころんでしまふ。いつになつたら晴晴とした顏が出來るであらう。

寄遠

欲忘忘未得。欲去去無由。
兩腋不生翅。二毛空滿頭。
坐看新落葉。行上最高樓。
暝色無邊際。茫茫盡眼愁。

遠きに寄す

忘れんと欲して忘るること未だ得ず、去らんと欲して「去るに由無し。」
兩腋には翅を生ぜず、二毛は空しく頭に滿つ。
坐しては新落葉を看、行きては最高樓に上る。
暝色邊際無し、茫茫として眼を盡して愁ふ。

【字解】【一】二毛　白毛。【二】暝色　夕暮の色。

【題義】遠方に居る友に寄せた詩である。

【詩意】君を忘れようとしても忘れられず、君の許に往かうにも往かれない。兩腋に羽が生えて飛仙となることも出來ず、ただ空しく白毛頭になるばかりだ。新に秋に入つて木の葉の落つるを悲み、最高樓に登つて望を馳すれば、暮色が蒼然として際涯なく、我をして愁を增さしむるのみである。

舊房

遠壁秋聲蟲絡絲。
入簷新影月低眉。

舊房

壁に遠き秋聲は蟲絲を絡ひ、
簷に入る新影は月眉を低る。

【字解】【一】絡絲　はたおりといふ蟲の鳴くこと。【二】低眉　三日月の出ること。

牀帷半故簾旌斷。
仍是初寒欲夜時。

牀帷半は故りて簾旌斷ゆ、
仍是れ初寒夜ならんと欲する時。

【題義】舊房室の悽然たる樣を寫した詩である。

【詩意】壁を隔てて機織といふ蟲が鳴き、簷には三日月の影がさし込んでゐる。微寒を催す夕暮に當り、簾も帷も古けて處處破れてゐる。

【三】牀帷　蓐蓙やとばり。

錢侍郎使君以題廬山草堂詩見寄。因酬之

錢侍郎使君廬山の草堂に題する詩を以て寄せらる、因つて之に酬ゆ

殷勤江郡守。悵望披垣郎。
慙見新瓊什。思歸舊草堂。
事隨心未得。名與道相妨。
若不休官去。人間到老忙。

殷勤なり江郡の守、悵望す披垣の郎。
慙らくは新瓊什を見、舊草堂に歸らんことを思ふ。
事心に隨ふこと未だ得ず、名と道と相妨ぐ。
若し官を休めて去らずんば、人間老に到るまで忙はしか「らん。」

【字解】【一】使君　刺史の稱。【二】殷勤　れんごろなこと。江郡守は江州刺史。【三】披垣郎　中書舍人。樂天自ら謂ふ。【四】新瓊什　錢侍郎の詩をほめていふ。

【題義】錢侍郎とは錢徽をいふ。錢徽、字は蔚章、起の子である。進士に及第して中書舍人に累遷し、

承旨を加へられ、後禮部侍郎に拜せられた。段文昌・李紳の二人が各〻己の親善する所の者を徽に誘して及第を求めたが、徽が應じなかつたので、二人之を擠し、遂に江州刺史に貶せられた。此詩は餞徽が樂天の嘗て營んだ廬山の草堂に題した詩を樂天に寄せたので、樂天が其れに酬いたのである。

【詩意】江州刺史たる錢侍郎が親切にも中書舍人たる我を悵望し、新作の玉の如き詩を寄せられたのを謝するに當り、廬山の舊草堂に歸りたくなつた。併し事は思ふ儘にはならないもので、名の爲にすれば道の爲にはならないものだ。思ひ切つて官を辭して退くのでなければ、一生涯閑になることはない。

寄山僧　時年五十。

眼看過半百。早晚掃巖扉。
白首誰留住。青山自不歸。
百千萬劫障。四十九年非。
會擬抽身去。當風抖擻衣。

【字解】【一】半百　五十。【二】巖扉　草堂の扉。【三】留住　引きとめておくこと。前の新秋早起有懷二元少尹一を見よ。【四】百千萬劫障　永遠に消えない罪障。【五】四十九年非　淮南子原道訓に、蘧伯玉年五十而有二四十九年非一とある。【六】抖擻　振扇

山僧に寄す　時に年五十

眼のあたり半百を過ぐるを看る、早晚巖扉を掃はん。
白首誰か留住する、青山自ら歸らず。
百千萬劫の障、四十九年の非。
會身を抽きて去らんと擬し、風に當りて衣を抖擻す。

【意義】山寺（多分廬山であらう）の僧に寄せた詩である。

【詩意】みすみす五十を過ぎてしまつた。早く山中の草堂に歸臥したいものだ。頭の白毛は引き留めることは出來ず、青山には勝手に歸らずにゐる。身は永く消えない罪障を積み、つらつら昨の非なるを悟つた。會官を辭し職を解いて去らうとして、風に對して吾が塵衣を振つた。

慈恩寺有感　時杓直初逝、居敬方病。

自問有何惆悵事。
寺門臨入却遲迴。
李家哭泣元家病。
柿葉紅時獨自來。

慈恩寺にて感あり　時に杓直初めて逝き、居敬方に病めり

自ら問ふ何の惆悵する事か有る、
寺門に臨み入りて却りて遲廻す。
李家は哭泣して元家は病めり、
柿葉紅なる時獨り自ら來る。

【字解】【一】遲迴　躊躇する。【二】李家　李建、字は杓直を指す。元家は元居敬を指す。

【題義】慈恩寺（長安に在る寺の名）で感じた所を述べた詩である。

【詩意】寺の門にはひらうとして却つて躊躇した。因つてどんな悲い事があるのぢやと自ら問うた。そは他ではない。吾が友李杓直は死し元居敬は病み、然も柿の葉の色づく秋に唯獨り此寺に來たのだから、悲むのも當然ではないか。

酬嚴十八郎中見示　嚴十八郎中の示さるるに酬ゆ

口厭含香握厭蘭。　口は香を含むに厭き握は蘭に厭けり。
紫微青瑣擧頭看。　紫微青瑣頭を擧げて看る。
忽驚鬢後蒼浪髮。　忽ち驚く鬢後蒼浪の髮、
未得心中本分官。　未だ得ず心中本分の官。
夜酌滿容花色暖。　夜酌容に滿ちて花色暖かに、
秋吟切骨玉聲寒。　秋吟骨に切にして玉聲寒し。
承明長短君應入。　承明長短君應に入るべし。
莫憶家江七里灘。　憶ふ莫れ家江七里灘。

【題義】嚴郎中から詩を示されたのに酬いた作である。

【詩意】君は尚書郎となりて既に久しく、口は香を含むに厭き手は蘭を握るに厭きてゐる。僕は中書に居り君は尚書にゐて頭を擧げては互に見合せてゐるが、君も近頃は驚くばかり老けて來た。けれどもまだ自ら滿足する程の官職にもありつけずに、夜酒を飲んではほんのりと櫻色になり、秋詩を吟じては玉の如き聲を發して慨嘆してゐる。併し遠かゐず侍從の臣にもなれるであらうから、家鄕に歸隱しようなどとは思はぬがよい。

【字解】【一】含香　漢官儀に、尚書郎は雞舌香を含んで伏して事を奏すとある。握蘭　漢官儀に、尚書郎は香を懷にし、蘭を握りて丹墀に趨走すとある。嚴郎中の尚書郎たることをいふ。【二】紫微　中書省をいふ。樂天は中書舍人なり。青瑣　は尚書省。【三】蒼浪　青き波。【四】滿容　全身にまはる。【五】承明　承明廬は漢時侍從の臣の居りし處。中書省を指して言ふ。長短　は早晩に同じ。近日の意。【六】七里　浙江省桐廬縣嚴陵山の西に在り、連亙すること七里、兩山夾峙し、水駛ること箭の如し。

寄王祕書　王祕書に寄す

霜菊花萎日。風梧葉碎時。　霜菊花萎むの日、風梧葉碎くる時。
怪來秋思苦。緣詠祕書詩。　怪み來る秋思の苦きを、祕書が詩を詠ずるに緣る。

【題義】王祕書（王は姓、祕書は官名）に寄せた詩である。

【詩意】霜に菊の花の萎み、風に梧桐の葉の落つる時、君の詩を詠ずると、不思議な程秋思の情が深くなる。

中書寓直　中書に寓直す

繚繞宮墻圍禁林。　繚繞せる宮墻禁林を圍む、
半開閶闔曉沈沈。　半開閶闔を開きて曉沈沈。
天晴更覺南山近。　天晴れて更に覺ゆ南山の近きを、

【字解】【一】閶闔　宮門なり。沈沈は宮殿の奥深き貌。【二】南山　長安の南に在る終南山。

月出方知西掖深。　月出でて方に知る西掖の深きを。
病對詞頭慙彩筆。　病んで詞頭に對して彩筆に慙ぢ、
老看鏡面愧華簪。　老いて鏡面を看て華簪に愧づ。
自嫌野物將何用。　自ら嫌ふ野物將た何ぞ用ひん、
土木形骸麋鹿心。　土木の形骸麋鹿の心。

【語義】中書省に宿直した時の感懷を述べた詩である。

【詩意】宮牆が御所の苑林を圍み、宮門が曉に半開かれてゐる。天が晴れて終南山が手に取るやうに見え、中書省の奥に殘月が傾いてゐる。病の爲に文詞が拙になつて彩筆に慙ぢ、老いて鏡を看て簪に愧ぢる。體は土木に同じく、心は麋鹿に同じき野人同樣で、取柄のない我が身がつくづく厭になつた。

【注】(一) 西掖　中書省。
(二) 詞頭　頭は句頭の頭なり。趙嘏北の詩に、詞頭夜急桥とある。
(三) 華簪　冠をとめるカンザシ。
(四) 野物　野人といふが如し。

自問　自問

黑花滿眼絲滿頭。　黑花眼に滿ちて絲頭に滿つ、
早衰因病病因愁。　早衰は病に因り病は愁に因る。
宦途氣味已諳盡。　宦途の氣味、已に諳んじ盡せり、
五十不休何日休。　五十にして休せずんば何れの日か休せん。

【語義】自ら問ふ詩である。

【詩意】目は霞み頭は白毛になつた。こんなに早く衰へたのは病に起因するので、その病は心の愁に起因するのである。もう大抵官吏生活の味もわかつたから、ここらで足を洗ひたいものだ。五十になつて足を洗はなければ洗ふ時はあるまい。

【字解】(一) 黑花　目が花が咲いたやうに霞むこと。絲は白毛。
(二) 宦途　役人生活。

曲江獨行招張十八

曲江新歲後。氷與水相和。　曲江に獨行し張十八を招く
南岸猶殘雪。東風未有波。　曲江新歲の後、氷と水と相和せり。
偶遊身獨自。相憶意如何。　南岸猶殘雪を殘し、東風未だ波有らず。
莫待春深去。花時鞍馬多。　偶遊身獨自、相憶ふ意如何。
　　春の深け去るを待つこと莫れ、花時鞍馬多し。

【語義】曲江（長安の池の名、都人士の遊賞地である）に獨り遊び張十八（張籍なり）を招いた詩である。

【詩意】曲江には春とはいふものの、水と氷と相半して、南岸にはまだ雪が殘つて居り、春風が吹いても波も立たない。僕は今獨りで遊びに來たが、誰か連れがあればよいと思つてゐる。徒に春の深け

るのを待つべきではない。流石に花の時節だから馬に跨つて春を賞する人も多くある。君も來てはどうぢや。

新居早春　二首

新居早春　二首

靜巷無來客。深居不出門。
鋪沙蓋苔面。掃雪擁松根。
漸暖宜閒步。初晴愛小園。
覓花都未有。唯覺樹枝繁。

靜巷來客無し、深居して門を出でず。
沙を鋪きて苔面を蓋ひ、雪を掃ひて松根を擁す。
漸く暖かにして閒步に宜し、初めて晴れて小園を愛す。
花を覓むるに都て未だ有らず、唯樹枝の繁きを覺ゆ。

【題義】新昌里に新居を構へ早春に遇うた景況を寫した詩である。

【詩意】訪ひ來る人もなき閑靜な處に獨り門を閉ぢて安居し、庭の苔の上に沙を撒いたり、松の根本に雪を掃き溜めたりなどした所が、段段暖かになつて來て閒步するに宜しく、晴れて小園の風情が增した。花を尋ねたがまだ何處にもない。ただ樹の枝だけは十分に繁つてゐる。

〔二〕

池潤東風暖。閒行蹋草芽。

〔二〕

地潤ひて東風暖かなり、閒行して草芽を蹋む。

呼童遣移竹。留客伴嘗茶。
霤滴簷氷盡。塵浮隙日斜。
新居未曾到。鄰里是誰家。

童を呼びて竹を移さしめ、客を留めて伴ひて茶を嘗む。
霤滴りて簷氷盡き、塵浮びて隙日斜なり。
新居未だ曾て到らず、鄰里是れ誰が家ぞ。

【字解】〔一〕霤　あまだれ。〔三〕隙日　戸のすきまからさしこむ日光。

【題義】春風が暖かに吹いて地の潤つてゐる處を、新芽の萌えた草を蹋んで閒行し、童を呼んで竹を栽ゑかへさせたり、客を引留めて俱に茶を飲んだりしてゐると、簷の氷柱も盡きて雨滴が落ち、斜に戸の隙から射し込む日光に塵の浮動するのが見える。鄰近所の人もまだ來ないので、誰が近所に住んでゐるのか一向知らない。

新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士

新昌新居、事を書す四十韻、因つて元郎中・張博士に寄す

買寵已三遷。歸朝始二年。
囊中貯餘俸。郭外買閒田。
狐兎同三逕。蒿萊共一壥。

寵を買りて已に三遷し、朝に歸りて始めて二年。
囊中餘俸を貯へ、郭外に閒田を買ふ。
狐兎三逕を同くし、蒿萊一壥を共にす。

新園聊刻穢。舊屋且扶顛。
簷漏移傾瓦。梁欹換蠹椽。
平治遶臺路。整頓近階甎。
巷狹開容駕。墻低壘過肩。
門閭堪駐蓋。堂室可鋪筵。
丹鳳樓當後。青龍寺在前。
市街塵不到。宮樹影相連。
省吏嫌坊遠。豪家笑地偏。
敢勞賓客訪。或望子孫傳。
不覓他人愛。唯將自性便。
等閑栽樹木。隨分占風煙。
逸致因心得。幽期遇境牽。
松聲疑澗底。草色勝河邊。
虛潤氷銷地。晴和日出天。

新園聊か穢れたるを刻り、舊屋且つ顛へりたるを扶く。
簷漏りて傾瓦を移し、梁欹ちて蠹椽を換ふ。
平治す臺を遶る路、整頓す階に近き甎。
巷狹く開きて駕を容れ、墻低く壘肩を過ぐ。
門閭蓋を駐むるに堪へ、堂室筵を鋪く可し。
丹鳳樓は後に當り、青龍寺は前に在り。
市街塵到らず、宮樹影相連なる。
省吏は坊の遠きを嫌ひ、豪家は地の偏なるを笑ふ。
敢て賓客の訪を勞し、或は子孫に傳へんことを望む。
他人の愛を覓めず、唯自性と便なり。
等閑に樹木を栽ゑ、分に隨ひて風煙を占む。
逸致は心に因りて得、幽期は境に遇うて牽かる。
松聲澗底と疑ひ、草色河邊に勝る。
虛潤にして氷地に銷え、晴和にして日天に出づ。

苦行滑如簟。莎坐軟於綿。
簾每當山卷。帷多待月褰。
籬東花掩映。窓北竹嬋娟。
迹慕青門隱。名慙紫禁仙。
假歸思晚沐。朝去戀春眠。
拙薄才無取。疎慵職不專。
題墻書命筆。沽酒率分錢。
柏杵春靈藥。銅瓶漱暖泉。
爐香穿蓋散。籠燭隔紗然。
陳室何曾掃。陶琴不要絃。
屏除俗事盡。養活道情全。
尙有妻孥累。猶爲紅綬纏。
終須拋爵祿。漸擬斷腥羶。
大抵宗莊叟。私心事竺乾。

苦に行けば滑かなること簟の如く、莎に坐すれば綿よりも軟かなり。
簾は每に山に當りて卷き、帷は多く月を待ちて褰ぐ。
籬東花掩映し、窓北竹嬋娟たり。
迹は青門の隱を慕ひ、名は紫禁の仙を慙づ。
假に歸りて晚沐を思ひ、朝より去りて春眠を戀ふ。
拙薄にして才取る無く、疎慵にして職專らならず。
墻に題するは書命の筆、酒を沽ふは率分の錢。
柏杵靈藥を舂き、銅瓶暖泉に漱ぐ。
爐香蓋を穿ちて散じ、籠燭紗を隔てて然ゆ。
陳室何ぞ曾て掃はん、陶琴絃を要せず。
屏除して俗事盡き、養活して道情全し。
尙妻孥の累あり、猶紅綬の纏ひを爲す。
終に須らく爵祿を拋つべし、漸く腥羶を斷たんと擬す。
大抵莊叟を宗とし、私心竺乾を事とす。

浮榮水劃字。眞諦火生蓮。
梵部經十二。玄書字五千。
是非都付夢。語默不妨禪。
博士官猶冷。郎中病已痊。
多同僻處住。久結靜中緣。
緩步攜筇杖。徐吟展蜀箋。
老宜閒語話。悶憶好詩篇。
蠻榼來方瀉。蒙茶到始煎。
無辭數相見。鬢髮各蒼然。

【字解】【一】三遷　忠州より召還せられてから尚書司門員外郎となり、主客郎中に轉じ、更に中書舍人に任ぜられたこと。【二】閑田　棄てられてゐた田地。【三】三逕　庭中の小徑。【四】蒿萊　蓬の日おほひ。馬車の意なり。【五】丹鳳樓　天子の宮城。【六】青龍寺　寺の名。【九】坊　町。【一〇】自性　自分。【一一】逸致　高尚な趣。【一二】興期　人と會合すること。謝靈運の詩に石壁期雨知賢、蚤攜景雨示信とある。【一三】掩映　うつりあふ。【一四】輝媚　美しき貌。【一五】青門隱　青門は長安の城門の名。漢の東陵公邵平官を退いて青門に瓜を作りし故事。【一六】紫蘭仙　中書舍の大官。【一七】假歸　暇を賜はつて家に歸る。【一八】晚沐　夕に髮を洗ふこと。【一九】書命筆　詔を書く筆。【二〇】自分　國家の祿の名。【二一】蹤跡　ふるき都屋。【二二】陶琴　陶潛の無絃琴一張あり。【二三】道情　道家の心。【二四】組綬　官職に喩ふ。【二五】縈滯　なまぐさき匂。【二六】莊叟　莊子。【二七】坐乾　佛法。【二八】水劃字　水に書いた字。直に消ゆること。【二九】眞諦　佛語。出世間法をいふ。【三〇】玄書　老子道德經。【三一】筇杖　竹の杖。【三二】濁箋　蜀から產する紙。【三三】蒙茶　蜀の蒙山に產する茶。【三四】蒼然　白髮にならんとする貌。

【題義】新昌里に新居を構へた事を敍して四十韻八十句より成る長篇を作り、元郎中（字は居敬）と張博士（張籍）とに寄せたのである。

【詩意】忠州から召還せられて既に二年。其間に君恩に浴して三たび官職が遷つた。多少の貯も出來たので郭外に棄ててあつた田地も買つた。庭中の徑には狐や兎が出沒し、蓬が茫茫と生えてゐる。職草を刈り除いて、顚れかかつた古屋を扶け起し、傾いた瓦を移して雨漏を防ぎ、蟲の食つた椽を取り換へ、家のまはりの路を修理し、階段の前の敷瓦を整頓しなどした。巷は狹く、やつと乘物を容るるに足り、土塀は低く纔かに肩を越す位である。門は來客の車を駐むるに足り、籬を敷いて室の不足を補ふことも出來る、宮城は丁度後に當り、青龍寺はすぐ前に在る、市街の塵も飛び到らず、御所の樹影がここまで續いてゐる。省吏は我が町の遠きを嫌ひ、豪家は地の偏鄙なのを笑ふ。客の來るには御苦勞であるが、自分は至極氣に入つて子孫に傳へようと思つてゐる。他人は氣に入らうが入るまいが問ふ所ではない。ただ自分の都合さへよければ結構である。心任せに木を栽ゑたり、身分相應に風情を添へなどした所が、ちよつと氣に入つた趣が出て、友達の集會でもしようといふ氣になつた。松風の音は澗底に聞くが如く、草の色は河の邊にも勝つてゐる。氷も融けて地が潤ひ、晴れた日が天に現

れた時、昔むす徑を行けば簟のやうに滑かで、芝生に坐すれば綿よりも柔かである。山に對して簾を捲き、月を待つて帷を掲げ、籬の東には花がうつりあひ、窓の北には竹が美しく生えてゐる。青門に隠れた邵平の迹を慕ひ、中書舍人などといふ名を慙ぢる。暇を賜りて家に歸れば沐浴して安眠することばかり考へ、短才で懶惰と來てゐるから職務にも專念しない。詔を書く筆で腦に詩を題し、國庫支辨の金で酒を買ひ、靈藥を呑き暖泉に漱ぎ、俗事を一掃し去つて唯道念を養つてゐる。まだ妻子の羈や官職の累があるけれども、ゆくゆくは官爵を辭し佛道に入らうと思ひ、大抵莊子や佛經を讀んでゐる。浮榮は水に書く字と同じで直ぐに消え、眞諦は火中に蓮花の生ずるが如く容易に得難い。十二部の佛典と五千言の老子とを讀んで、是非を一夢に付し禪定に入らう。張君は博士(官名)であるが、あまり實入りの多い役目ではなく、元君は病氣がやつと癒えたばかりだ。我は兩君と久しく交際を結んで來たが、老いては靜かに語り合ふことを好み、悶えては好い詩でも吟じたくなる。君等が來てくれれば何はなくとも蠻檻を瀉ぎ蒙茶を煎じよう。どうか遠慮なしに度度來て下され、お互に鬢髮が白くなつて餘命もあまり長くないだらうから。

【餘論】唐宋詩醇に「新居を鋪敍し、詩中に畫あり。或は其俚俗瑣碎を議す。然れども及ぶべからざる處正に此に在り。他人の手に入らば必ず此の如く詳細なる能はず。詳悉を過求すれば必ず此の如く位置妥帖なる能はず。竹頭木屑皆棄物に非ず。亦其の之を用ふる者何如を顧るのみ」と評してある。

喜敏中及第偶示所懷

敏中が及第を喜び偶〻懷ふ所を示す

自知羣從爲儒少。　自ら知る羣從の儒と爲るもの少きを、
豈料詞場中第頻。　豈料らんや詞場中第頻ならんとは。
桂折一枝先許我。　桂一枝を折りて先づ我を許し、
楊穿三葉盡驚人。　楊三葉を穿ちて盡く人を驚かす。
始予進士及第。行間次之。敏中又次之。

轉於文墨須留意。　轉た文墨に於て須らく意を留むべし、
貴向煙霄早致身。　煙霄に向ひて早く身を致すを貴ぶ。
莫學爾兄年五十。　學ぶ莫れ爾が兄年五十、
蹉跎始得掌絲綸。　蹉跎として始めて絲綸を掌るを得るを。

【語義】從弟白敏中が進士の試驗に及第したことを喜び、懷ふ所を敍して示した詩である。

【詩意】吾が從兄弟には儒となる者は少からうと思ひしに、案外にも進士の試驗に及第する者が續續と出た。我先づ第一著に及第するや、一族揃つて三人まで及第して世人を驚かした。今後とも文詞に心を用ひて榮達を期するがよい。汝の從兄樂天が年五十になつて、やつと中書舍人になつたやうなへ

【字解】【一】羣從　多くのいとこなり。
【二】詞場　試驗場。中第は及第。
【三】桂折一枝　進士の試驗に及第すること。
【四】楊穿三葉　三人揃つて及第すること。
【五】文墨　文詞。
【六】煙霄　青雲といふが如し。高き官位に喩ふ。
【七】爾兄　樂天自ら謂ふ。
【八】蹉跎　蹉く貌。絲綸は詔敕。

まな眞似はせぬがよい。

久不見韓侍郎戲題四韻以寄之

久しく韓侍郎を見ず、戯に四韻を題し以て之に寄す

近來韓閣老。疎我我心知。　近來韓閣老、我を疎んずること我が心に知りぬ。
戸大嫌甜酒。才高笑小詩。　戸大にして甜酒を嫌ひ、才高くして小詩を笑ふ。
靜吟乖月夜。閒醉曠花時。　靜吟月夜に乖き、閒醉花時を曠しくす。
還有愁同處。春風滿鬢絲。　還愁の同じき處有り、春風滿鬢の絲。

【字解】【一】韓侍郎　兵部侍郎韓愈。【二】韓閣老　韓愈を指す。【三】戸大　大酒家なこと。甜酒はあまき酒。【四】絲　白毛。

【題義】韓愈と相會せざること久しきに及んだので、戯に四韻八句の詩を書いて寄せたのである。

【詩意】近來君が僕を疎んじてゐることは自分も心得てゐる。君は大酒家で僕等の飲む甘たるい酒は口に合はず、才が高くて僕等の作る小詩をば冷笑つてゐるから、春光花月の夜にも我と醉吟を俱にせぬのであらう。併しお互に兩鬢が白くなり愁を同じうする身で、かなり話の合ふ處もあるのだから、全く見限つたものでもあるまい。

寄白頭陀

白頭陀に寄す

近見頭陀伴。云師老更慵。　近ろ頭陀の伴を見るに、云ふ師老いて更に慵しと。
性靈閒似鶴。顏狀古於松。　性靈は鶴よりも閒に、顏狀は松よりも古びたり。
山裏猶難覓。人間豈易逢。　山裏猶覓め難し、人間豈逢ひ易からんや。
仍聞移住處。太白最高峯。　仍聞く移り住する處、太白の最高峯なりと。

【字解】【一】頭陀伴　僧侶のなかま。【二】顏狀　顏貌。【三】人間　世間。【四】太白　山の名。陝西省鄠縣の東南に在る。

【題義】老僧に寄せた詩である。

【詩意】近ごろ識合の僧侶に遇つて承はれば、老師には老いて益〻世事に慵く、心は鶴よりも閒に貌は松よりも古び、山中ですら容易に求め難い位だから、世間では到底見られない。おまけに太白山の最高峯に移り住んで居られると申すことであつた。

和韓侍郎題楊舍人林池見寄

韓侍郎が楊舍人の林池に題して寄せられしに和す

渠水閣流春凍解。　渠水閣に流れて春凍解け、

【字解】【一】韓侍郎　兵部侍郎

風吹日炙不成凝。風吹き日炙りて凝を成さず。
鳳池冷暖君諳在。鳳池の冷暖は君諳んじて在り、
二月因何更有氷。二月何に因りて更に氷有らん。

【題義】韓愈が楊舍人の林池に題し且樂天に寄せた詩に和したのである。

【詩意】氷が解けて溝の水がちよろちよろと流れ、春風が吹き日が照すので氷は復たとはらない。それも其筈である。君も鳳凰池の冷暖は能く御存じであらうが、二月になつて氷のはる事は未だ嘗てない。

勤政樓西老柳　勤政樓西の老柳

半朽臨風樹。半は朽つ風に臨む樹、多情なり馬を立つる人。
多情立馬人。
開元一株柳。開元一株の柳、長慶二年の春。
長慶二年春。

【字解】【一】勤政樓　唐書玄宗紀に、天寶十三載五月壬戌、親饗于勤政樓」とある。【二】開元　玄宗皇帝の年號。【三】長慶二年　此詩を作つた時。

【題義】勤政樓の西の老柳を見て感慨を述べた詩である。

【詩意】半朽ちた風に臨める老柳樹に對し、馬を立てて相憐む多情漢（樂天自ら謂ふ）がある。此柳こそ開元年中に植ゑられ、長慶二年の春まで永らへて、今や見る影もなく老い朽ちてしまつた。我が身につまされて人事とは思はれない。

偶題閣下廳　偶〻閣下の廳に題す

靜愛青苔院。靜は愛す青苔の院、深は宜し白髮の翁。
深宜白髮翁。
貌將松共瘦。貌は松と共に瘦せ、心は竹と俱に空し。
心與竹俱空。
暖有低簷日。暖は簷に低るる日有り、春は幕を颺ぐる風多し。
春多颺幕風。
平生閒境界。平生の閒境界、盡く五言の中に在り。
盡在五言中。

【字解】【一】院　庵。

【題義】聽事の役所に題した詩である。

【詩意】青苔の生えた庭は閑靜で奥深く、白髮の老人には誠に結構である。我が貌は庭前の松と同じく老い、心は窓外の竹と俱に空虛である。今や春正に酣であつて、簷端を照す日も暖かに、幕を揚げる風も軟かである。我が平生の閑生涯の狀は、すべて此五言詩の中に含まれてゐる。

韓愈。【三】楊舍人　中書舍人楊氏。【三】渠水　溝の水。【四】鳳池　鳳凰池の略。禁中の池の名。中書省の在る處。

予與故刑部李侍郎早結道友以藥術爲事與
故京兆元尹晚爲詩侶有林泉之期周歲之間
二君長逝李住曲江北元居昇平西追感舊遊
因貽同志

予故の刑部李侍郎と早に道友を結び藥術を以て事となす。故の京兆の元尹と晩に詩侶となり林泉の期あり、周歲の間二君長逝す。李は曲江の北に住し元は昇平の西に居る、舊遊を追感し因つて同志に貽る

從哭李來傷道氣。李を哭してより來道氣を傷り、
自亡元後減詩情。元を亡ひてより後詩情を減ず。
金丹同學都無益。金丹の同學都て益無し、
水竹鄰居竟不成。水竹の鄰居竟に成らず。
月夜若爲遊曲水。月夜若爲ぞ曲水に遊ばん、
花時那忍到昇平。花時那ぞ昇平に到るに忍びん。
如年七十身猶在。如し年七十にして身猶在らば、
但恐傷心無處行。但恐る心を傷しめて行くに處無からんことを。

【字解】【一】李侍郎　刑部侍郎李建、字は杓直。長慶元年二月二十三日夜、疾なくして長安の修行里の第に卒す。【二】京兆元尹　京兆少尹元氏。集中に元八とあるは此人である。【三】曲江　長安の池の名。前に見ゆ。【四】昇平　長安の里の名。【五】道氣　道術を修むる氣力。【六】金丹　仙藥。【七】曲水　曲江なり。

【題義】予は故の刑部侍郎李建と夙に道術の友となり俱に仙藥を煉つた。又故の京兆少尹元氏と晩年詩友となり、俱に林泉の間に遊賞の會をなした。圖らずも長慶元年中に二君ともに死亡してしまつた。李は曲江の北に住み元は昇平里の西に住んでゐた。因つて舊遊を追感して此詩を作り、之を同志の友に貽つた。

【詩意】李建の死を哭してからは我が修道の氣力が鈍り、元氏の死を悲んでからは我が詩情が減退した。俱に仙藥を煉り長生を謀つても何等の效驗なく、永く水竹林泉の好處に鄰して住むことも出來なかつた。今後は明月の夜にも曲江に遊ばうとは思はず、花の時節にも昇平里に往くに忍びないであらう。若し七十まで我が身が健在であるとして、この調子で續續友達が死ぬとすれば、どこに往つても我が心を傷ましめ、終に往く處がなくなつてしまふであらう。

送馮舍人閣老往襄陽

馮舍人閣老の襄陽に往くを送る

紫微閣底送君回。紫微閣庭君を送りて回れば、
第二廳簾下不開。第二の廳簾下して開かず。

【字解】【一】馮舍人　中書舍人馮氏。前に見ゆ。馮一に馬に作る。閣老とは中書舍人の年久しきものの

莫懸漢南風景好。(四)　懸ふ莫れ漢南風景の好きを、
峴山花盡早歸來。　峴山花盡きなば早く歸り來れ。

【語義】馮舍人が襄陽（湖北省襄陽府）に往くのを送つた詩である。
【詩意】中書省の邊に君の行を送つて還れば、君が居ないので第二廳の簾は下されたままであつた。たとひ襄陽の風景が好くとも、峴山に花が盡きたら早く歸つて來るがよい。

は漢南に在る。【四】峴山　襄陽の山の名。

莫走柳條詞送別

南陌傷心別。(一)東風滿把春。　南陌傷心の別、東風把に滿つる春。
莫欺楊柳弱。(二)勸酒勝於人。　欺く莫れ楊柳の弱きを、酒を勸むるは人よりも勝れり。

【字解】【一】南陌　南方の道。【二】東風　春風。把は握なり。【三】欺　侮る意。
【語義】楊柳の條を借りて送別の情を述べた詩である。
【詩意】南方の道に互に心を傷ましめて相別るる折しも、春風が袖に滿ちて暖かである。柳の條の弱きを馬鹿にするな。酒を勸めることは人よりも遙かに勝つてゐる。あの春風に吹かれる柳の風情を見ては覺えず杯を重ねずにはゐられぬ。

酬韓侍郎張博士雨後遊曲江見寄

韓侍郎・張博士が雨後に曲江に遊びて寄せられしに酬ゆ

小園新種紅櫻樹。(一)　小園新に種う紅櫻樹、
閒遶花行便當遊。　閒は花を遶りて行き便ち遊に當つ。
何必更隨鞍馬隊。　何ぞ必ずしも更に隨はん鞍馬の隊、
衝泥蹋雨曲江頭。(二)　泥を衝き雨を蹋む曲江の頭。

【字解】【一】小園　樂天の家の庭園。
【二】曲江　長安の池の名。都人士女の遊賞地である。
【語義】兵部侍郎韓愈・國子博士張籍が雨後に曲江に遊び、樂天に寄せたのに酬いた詩である。
【詩意】自分の家の庭にも近頃紅櫻樹を栽ゑたから、花の間を閒歩して居れば行遊するも同樣である。何も鞍馬の隊に加はつて曲江の邊の泥路をあるきまはるには及ばない。

元家花

今日元家宅。櫻桃發幾枝。　元家の花
稀稠與顏色。(一)一似去年時。　今日元家の宅、櫻桃幾枝をか發ける。
失却東園主。春風可得知。　稀稠と顏色と、一に去年の時に似たらん。
失却す東園の主、春風知るを得可けんや。

【一】紫薇閣庭　中書省のほとり。【二】第二廳　馮舍人の執務する處。【三】漢南　漢水の南。襄陽

【字解】【一】 繁蕚　花の少きと多きと。顏色は花の色あひ。

【題義】 故の京兆少尹元氏の家の花を憶ひて作つた詩である。元氏の長慶元年に死んだ事は前の予與二故刑部李侍郎一云云と題する詩にある。

【詩意】 今日元氏の櫻桃の花はどの位開いたであらう。花の多少や色合は、去年と變りはあるまい。主人の死んだ事などは春風は知らう筈がないから。

代人贈王員外

好在王員外。平生記得不。
共賒黃叟酒。同上莫愁樓。
靜接殷勤語。狂隨爛熳遊。
那知今日眼。相見冷於秋。

人に代つて王員外に贈る

好在なり王員外、平生記得するや不や。
共に黃叟の酒を賒り、同く莫愁の樓に上る。
靜かに殷勤の語を接へ、狂ひて爛熳の遊に隨ふ。
那ぞ知らん今日の眼、相見て秋よりも冷かならんとは。

【字解】【一】 好在　他在に同じ。【二】 記得　記憶してゐる。【三】 黃叟　黃は姓。叟は老人の稱。【四】 莫愁　洛陽の女の名。【五】 爛熳　狂亂の貌。

【題義】 人に代つて王員外に贈つた詩である。

【詩意】 王君御機嫌よろしう。君と僕との以前の交は御承知で御坐らう。共に黃氏の酒を買ひ、俱に莫愁の樓に上り、親切に語り合つた事もあり、狂亂の遊を共にした事もあるでは御坐らぬか。近頃は何となくよそよそしい御樣子で御坐るが、こんな御方とは兼ねて思ひ設けなかつた。

惜小園花

曉來紅蕚凋零盡。
但見空枝四五株。
前日狂風昨夜雨。
殘芳更合得存無。

小園の花を惜む

曉來紅蕚凋零し盡き、
但見る空枝四五株。
前日の狂風昨夜の雨、
殘芳更に合に存するを得べきや無や。

【字解】【一】 紅蕚　紅の花。凋零は萎み落ちる。【二】 殘芳　殘りの花。

【題義】 自分の家の庭園の花を惜んだ詩である。

【詩意】 曉に見れば紅花が落ち盡して、ただ四五本の枝が空しく存してゐるばかりだ。昨日は狂風が吹き昨夜は雨であつたから、花も殘つてはゐられぬ筈だ。

蕭相公宅遇自遠禪師有感而贈

蕭相公の宅にて自遠禪師に遇ひ、感ありて贈る

宦途堪笑不勝悲。
宦途は笑ふに堪へて悲みに勝へず、

【字解】【一】 蕭相公　宰相蕭俛であらう。

昨日榮華今日衰。
轉似秋蓬無定處。
長於春夢幾多時。
半頭白髮慙蕭相。
滿面紅塵問遠師。
應是世間緣未盡。
欲拋官去尚遲疑。

【語義】宰相蕭俛の家で自遠禪師に遇ひ、感ずる所を述べて此詩を贈つたのである。

【詩意】官吏生活は笑ふべく亦悲むべきものである。昨日まで榮華を誇つてゐた者と、今日は免官の憂目を見る事が多い。その定まりなきことは秋の蓬の風に飄へるが如く、その果敢ない事は春の夜の夢と同じである。頭髮半白くして微官に沈淪してゐるのは蕭相に對して恥づかしく、滿面世塵に汙れて自遠禪師に問ひたいと思ふ。官を退かうとは思ひつつも尙躊躇してゐるのは、まだ俗緣が盡きないからであらうかと。

昨日は榮華今日は衰。
轉た秋蓬の定處無きに似たり
春夢より長きこと幾多時ぞ。
半頭の白髮蕭相に慙ぢ、
滿面の紅塵遠師に問ふ。
應に是れ世間緣未だ盡きざるなるべし、
官を拋ち去らんと欲して尙ほ遲疑せり。

【三】官途　官吏生活。
【四】紅塵　世間の塵。
【五】遲疑　躊躇なり。

草詞畢遇芍藥初開因詠小謝紅藥當階飜詩。

以爲一句未盡其狀偶成十六韻

詞を草し畢り、芍藥の初めて開くに遇ふ。因つて小謝の紅藥、階に當りて飜へるの詩を詠ず。以爲らく一句未だ其狀を盡さずと。偶〻十六韻を成す

罷草紫泥詔。起吟紅藥詩。
詞頭封送後。花口拆開時。
坐對鉤簾久。行觀步履遲。
兩三叢爛熳。十二葉參差。
背日房微斂。當階朶旋欹。
釵亭抽碧股。粉蘂撲黃絲。
動蕩情無限。低斜力不支。
周廻看未足。比喩語難爲。
勾漏丹砂裹。僬僥火焰旗。
彤雲賸根蔕。絳幘欠纓緌。

紫泥の詔を草するを罷め、起つて紅藥の詩を吟ず。
詞頭封じ送る後、花口拆開の時。
坐對して簾を鉤くること久しく、行き觀て步履遲し。
兩三叢爛熳、十二葉參差。
日に背きて房微く斂り、階に當りて朶旋欹つ。
釵亭碧股を抽き、粉蘂黃絲を撲つ。
動蕩して情限り無く、低斜して力支へず。
周廻して看れども未だ足らず、比喩せんとするも語爲し難し。
勾漏丹沙の裹、僬僥火焰の旗。
彤雲、根蔕に賸り、絳幘纓緌を欠く。

況有晴風度。仍兼宿露垂。
疑香熏罨畫。似淚著胭脂。
有意留連我。無言怨思誰。
應愁明日落。如恨隔年期。
菡萏泥連蕚。玫瑰刺繞枝。
等量無勝者。唯眼與心知。

況んや晴風の度る有り、仍宿露の垂るるを兼ぬ。
香の罨畫に熏ずるかと疑ひ、淚の胭脂に著くに似たり。
意有りて我を留連せしめ、言無くして誰をか怨み思ふ。
應に明日の落つるを愁ふべし、隔年の期を恨むが如し。
菡萏は泥は蕚に連なり、玫瑰は刺枝を繞る。
等しく量るに勝る者無し、唯眼と心と知る。

【字解】【一】小謝　晉の謝靈運の族弟謝惠連をいふ。詩に巧なり。紅藥は芍藥の花。【二】紫泥　詔書には紫の印泥を用ひる。【三】詞頭　詔の草稿。頭の字は次の句の花口の口に對するので、意味の方には別に意味はない。【四】十二葉　十二樓、十二街など用ふ、實數にあらず。【五】菱　菱は高低長短相齊しからぬ貌。【六】勝　はなぶさ。【七】柔枝。【八】叙事　分れた枝。【九】勾漏山の名。廣西省北流縣の東北十五里に在り、其巖穴勾曲穿漏す、故に名づく。相傳ふ葛洪嘗て此山の最勝處に修煉す。其下に漏井數處あり、皆當時沙を採りし處なりと。【一〇】彤霞　赤き霞。【一一】絳幘　赤き冠。緋綾は冠の紐。【一二】宿霧　宵の霧。【一三】毫釐　雜彩色の霧。霧は霧に同じ。【一四】胭脂　化粧料。べに。【一五】隔年期　一年ぶりに會ふこと。王禹偁の中秋月詩に、「莫ん辭絲夕看。勸是隔年期とある。【一六】菡萏　蓮花。【一七】玫瑰　薔薇の灌木にして庭に植う。蓋だ薔薇に似て花は紫にして春は綠。花托には密刺を生ず。香氣清烈なり。

【題義】中書省で詔を草し畢つた時、偶然芍藥の花が始めて開いた。因つて謝惠連の紅藥階に當りて韻へるといふ詩を詠じたが、一句だけでは其狀を盡して居ないと考へて想を錬つた結果、偶然此十六韻三十二句の詩が出來たといふ意。

【詩意】詔を草し畢つて芍藥の詩を吟じた。丁度詔を封じて送つた時、方に此花が蕾を破つた。因つて簾を捲き上げて久しく眺め、又おり立つて歩きまはつた。花も葉もよく茂り、枝が叙の如く股を分ち、葉は黄粉を點じたるが如く、無限の情を含んで、なよなよとして力なく、いくら眺めても飽くことなく、喩へるに言葉もない。勾漏山の丹砂の裏が僬僥國の火焰の旗かと疑はれ、赤い雲が根帶まではびこり、紐を取り去つた赤い冠のやうである。まして晴風が吹き渡り宵の露が垂れて、彩色畫に香の熏ずるが如く、花の顏に淚の浮んだ如くである。心ありげに我を引き留め、無言の間に人を怨むやうである。日の暮るるを愁へて來年の春を待ち遠しく思ふものの如くである。蓮花は泥にまみれ、玫瑰は刺が多く、皆それぞれの疵がある。公平に考へて見るに芍藥にまさるものはない。我が目と心とが能く之を見知つてゐる。

喜張十八博士除水部員外郎

張十八博士が水部員外郎に除せらるるを喜ぶ

老何歿後吟聲絶。老何歿して後吟聲絶ゆ、
雖有郎官不愛詩。郎官有りと雖も詩を愛せず。

【字解】【一】老何　樂の何遜をいふ。八歳能く詩を賦し、翰冠にして花雪と忘年の交を結ぶ。官尚書水

無復篇章傳道路。復篇章の道路に傳はる無し、
空留風月在曹司。空しく風月を留めて曹司に在り。
長嗟博士官猶屈。長嗟す博士の官猶屈するを、
亦恐騷人道漸衰。亦恐る騷人の道漸く衰へしを。
今日聞君除水部。今日君が水部に除せらるるを聞き、
喜於身得省郎時。身の省郎を得し時よりも喜べり。

【三】博士　國子學の教授張籍を指す。【四】騷人　詩人。【五】省郎　中書舍人。

【題義】國子博士張籍が水部員外郎に任せられた事を喜んだ詩である。

【詩意】梁の水部郎何遜が死んでからは、郎官で詩を善くする者がなくなつて、其詩の世上に傳誦せらるるものもなく、ただ吾が張君あるのみである。然もその張君は國子博士といふ閑職に屈してゐる。之を觀ても詩道の衰頽した事がわかる。所が今度水部員外郎に任せられたと聞き、自分が中書舍人に任せられた時よりも喜ばしく感じた。

【餘論】唐宋詩醇に「一氣呵成、句句轉じ筆筆靈なり。章法亦杜甫に本づき、其貌を襲はずして其神を得たり。故に佳なり。宋人楊廷秀輩の如き意ありて此種を摹倣し、徒らに油腔滑調を成すのみ」と評してある。

都郎に至る。其詩は艷麗の習なく本眞を直寫す。齊梁間の嬌嬌たる者なり。【三】曹司　官吏の職司。ここは國子博士張籍を指す。唐書郎虞傳に、明皇愛二其才一、更爲置二廣文館一、以虞爲二博士一、虞聞レ命不レ知二廣文曹司何在一、訴二宰相一、宰相曰、上增二國學一、置二廣文館一、以居二賢者一、今三後世言二廣文博士一自レ君始一、不二亦美一乎とある。

與沈・楊二舍人閣老同食敕賜櫻桃翫物感恩因成十四韻

沈・楊二舍人閣老と同じく敕賜の櫻桃を食ひ、物を翫び恩に感じ、因つて十四韻を成す

清曉趨丹禁。紅櫻降紫宸。
驅禽養得熟。和葉摘來新。
圓轉盤傾玉。鮮明籠透銀。
內園題兩字。西掖賜三臣。
熒惑晶華赤。醍醐氣味眞。
如珠未穿孔。似火不燒人。
杏俗難爲對。桃頑詎可倫。
肉嫌盧橘厚。皮笑荔枝皴。
瓊液酸甜足。金丸大小勻。
偸須防曼倩。惜莫擲安仁。

清曉丹禁に趨れば、紅櫻紫宸より降る。
禽を驅つて養ひ得て熟し、葉に和して摘み來りて新なり。
圓轉として盤玉を傾け、鮮明にして籠銀を透す。
內園兩字を題し、西掖三臣に賜ふ。
熒惑晶華赤く、醍醐氣味眞なり。
珠の如くにして未だ孔を穿たず、火に似て人を燒かず。
杏は俗にして對を爲し難く、桃は頑にして詎ぞ倫す可けん。
肉は盧橘の厚きを嫌ひ、皮は荔枝の皴むを笑ふ。
瓊液酸甜足り、金丸大小勻し。
偸は須らく曼倩を防ぐべし、惜みて安仁に擲つこと莫れ。

手擘纔離核。匙抄半是津。
甘爲舌上露。煖作腹中春。
已懼長尸祿。仍驚數食珍。
最慙恩未報。飽餒不才身。

【字解】【一】閑老　中書舍人の年久しき者の稱。【二】櫻桃　さくらんぼ。果實の名。【三】丹禁　宮城。【四】紫宸　御所。【五】盤　盆。【六】内園　天子の御園。【七】西掖　中書省。【八】熒惑　星の名。【九】醍醐　最上の飲物の名。【一〇】盧橘　柑橘類の果物。【一一】荔枝　果物の名。【一二】酸甜　酸味と甘味。【一三】曼倩　漢の東方朔の字。漢武故事に、東郡獻二短人一呼二方朔一曰、王母種レ桃、三千歲一結レ子、此兒不良、已三偷レ之矣とある。【一四】安仁　晉の潘岳、字は安仁。美姿容あり。嘗て洛陽道に出づ。婦人の之に遇ふ者皆手を牽れて投擲し之に投するに果を以てす。【一五】津　液。【一六】春　酒なり。【一七】尸祿　功なくして祿を食むこと。【一八】飽餒　餒は飢なり。

【題義】中書舍人沈・楊二氏と恩賜の櫻桃を食ひ、恩に感じ十四韻二十八句の此詩を作つたといふ意。

【詩意】曉に參内した所が畏多くも櫻桃を賜はつた。平生鳥さへ寄せ附けずに大事に養ひ來つたもので、葉の附いた儘もぎ取つてある。盆の上に圓い玉がころがつてゐるやうに見え、銀色の葉が籠の目から鮮かに透いて見える。籠には「内園」の二字が書き印され、吾等中書の三臣に賜はつたのである。その色は星の輝くが如く、その味は醍醐味の如く、その形は孔なき珠の如く、熱くない火の如くである。杏は俗で桃は頑であつて到底此に比ぶべくもない。肉は虛橘ほどに厚くなく、皮は荔枝のやうに皺がない。瓊の如き汁は酸甘相混じ、金丸の如くにして大きさが能く揃つてゐる。東方朔に偸まれぬやうにすべく、潘岳に投げつけるには惜しい。手で擘けば核を離れ、匙で抄へば半は汁である。舌に載せれば甘露の味があり、腹にはひると煖かな酒の氣味がある。自分は常に無能にして祿位を食むを懼れつつあるに、かくの如く屢珍味を賜はるは誠に恐縮である。御恩も報いずして不才の身を飽かしめるのは最も慚愧に堪へない。

送嚴大夫赴桂州

地壓坤方重。官兼憲府雄。
桂林無瘴氣。柏署有清風。
山水衙門外。旌旗艨艟中。
大夫應絕席。詩酒與誰同。

嚴大夫の桂州に赴くを送る

地は坤方の重を壓し、官は憲府の雄を兼ぬ。
桂林瘴氣無く、柏署清風有り。
山水衙門の外、旌旗艨艟の中。
大夫應に席を絕すべし、詩酒誰と與にか同うせん。

【字解】【一】坤方　西南方。桂州の方角。【二】憲府　御史臺。刑獄の事を掌る役所。【三】瘴氣　毒氣。【四】柏署　御史臺ないふ。漢時御史の府中には柏樹を列植せる故なり。【五】衙門　役所の門。【六】艨艟　舟の名。

【題義】御史大夫嚴氏の桂州（今の廣西省桂林縣）に赴任するのを送つた詩である。

【詩意】君は御史大夫を以て桂州刺史を兼ねることになつた。桂州は氣候のよい處で瘴氣もなく、君

は清嚴の職に在る身であるから、定めて能く任を全うするのであらう。又桂州は佳山水に富み廳外に之を望むことも出來、舟を泛べ旌旗を連ねて遊賞することも出來る。併し此地を去れば心の合ふ友がなく、詩酒の會にも相手がなくて困るであらう。

春夜宿直

三月十四夜、西垣東北の廊。
碧梧葉重疊、紅藥樹低昂。
月砌漏幽影、風簾飄閣香。
禁中無宿客、誰伴紫微郎。

【字解】【一】西垣　中書省。【二】紅藥　芍藥の花。【三】月砌　月光のさす庭。【四】紫微郎　中書舍人。樂天自ら謂ふ。

【題義】春の夜に中書省に宿直した時の詩である。

【詩意】三月十四日の晩に中書省の東北の廊に宿直した。窓外を見れば梧の葉が重り合ひ、芍藥の花が高く低く咲いてゐる。月影は微かに庭に漏れ、暗香は簾中に飄へる。この時禁中に獨り宿直し、坐ろに幽閑の情味を感じた。

夏夜宿直

人少庭宇曠、夜涼風露清。
槐花滿院氣、松子落階聲。
寂寞挑燈坐、沈吟蹋月行。
年衰自無趣、不是厭承明。

【字解】【一】松子　松の實。まつかさ。【二】承明　承明廬。漢時侍從の臣の居る處。中書舍を指して言ふ。

【題義】夏の夜に宿直した時の情景を敍した詩である。

【詩意】人稀にしてあたりも靜かで、風露が清く涼しい。槐の花の香が庭に滿ち、松子の階に落つる聲がする。獨り淋しく燈を挑げて坐し、微吟しつつ月下を散歩しなどした。年老いては何にも趣味がなくなつた。强ち中書舍人があきたからばかりではない。

七言十二句贈駕部吳郎中七兄

七言十二句贈駕部吳郎中七兄　時早夏朝歸、閉レ齋獨處、偶題二此什一。時に早夏、朝より歸り、齋を閉ぢて獨處し、偶此什を題す

四月天氣和且清。　四月天氣和にして且清し、

綠槐陰合沙堤平。
獨騎善馬銜鐙穩。
初著單衣肢體輕。
退朝下直少徒侶。
歸舍閉門無送迎。
風生竹夜窓間臥。
月照松時臺上行。
春酒冷嘗三數盞。
曉琴閒弄十餘聲。
幽懷靜境何人別。
唯有南宮老駕兄。

【題義】夏の朝中書省の宿直から下つて自宅に歸り、此詩を作つて駕部郎中（官名）吳七（七は排行）に呈したのである。

【詩意】四月清和の候、宿直から歸れば、綠槐の陰が茂り合ひ、沙も平であつた。駿馬に跨り單衣を

【字解】【一】銜鐙　くつわ、あぶみ。

【二】三數盞　數杯。

【三】別　特に識別し愛好すること。卷十五の戲題二虞祕書新移書藏一を見よ。

【四】南宮　尚書省をいふ。駕部郎中は此省に屬する官なり。

著て、身も輕輕と自宅におちついて閉居し、竹風に臨んで窓間に臥し、松月を仰いで散歩し、酒を酌み琴を弄して樂む、この時の幽懷靜境を解する者は、恐らく君だけであらう。

玉眞張觀主下小女冠阿容

玉眞の張觀主が下の小女冠阿容

綽約小天仙。生來十六年。
姑山半峯雪。瑤水一枝蓮。
晚院花留立。春窓月伴眠。
廻眸雖欲語。阿母在傍邊。

【字解】【一】玉眞　道觀の名。唐書に「景雲元年、金仙玉眞觀を作る」と見ゆ。張觀主は玉眞觀主張氏、女冠は女道士。【二】綽約　柔弱なる貌。【三】姑山　姑射山。莊子に「藐姑射山に神人あり居る。肌膚氷雪の若く綽約として處子の若し」云云とある。【四】瑤水　瑤池なり、神仙の居る處。【五】晚院　夕の庭。【六】阿母　母。

【題義】玉眞觀主張氏の下に事へてゐる年若き女道士阿容といふ者の事を詠じた詩である。

【詩意】阿容は生れて十六歳のしとやかな天女のやうな少女で、仙山半峯の雪、仙池一枝の蓮にも比すべく、夕の庭には花に留りて立ち、春の窓には月に伴つて眠る。袖引き留めて語らうと思へば、生憎母親が傍にゐる。

龍花寺主家小尼　郭代公愛姬薛氏、幼嘗爲尼、小名仙人子。

龍花寺主の家の小尼　郭代公の愛姬薛氏、幼にして嘗て尼となる、小名は仙人子

頭青眉眼細。十四女沙彌。頭青くして眉眼細し、十四の女沙彌。
夜靜雙林怕。春深一食飢。夜靜かにして雙林怕し、春深くして一食飢う。
步慵行道困。起晚誦經遲。步むこと慵く道を行くこと困み、起くること晚く經を誦
應似仙人子。花宮未嫁時。應に仙人の子に似たるべし、花宮未だ嫁せざる時。

「すること遲し。」

【字解】【一】龍花　寺の名。寺主は寺の主座の僧。【二】女沙彌　女僧。尼。【三】雙林　寺をいふ。【四】一食飢　佛家では朝と晝の食を齊といひ、午後の食を非時といふ。飲食を節することも修行の一だから極めて粗食をする。大抵午後四時頃には夕飯をすますから春の日永の時は忽ち腹がすくのである。【五】花宮　寺をいふ。

【題義】龍花寺の主座の和尙の家の小尼を詠じた詩である。この小尼は後に郭代公の愛姬になつた。

【詩意】頭は青く眉細き生れて十四歲の尼は、夜が靜かなので寺に住むのを怖ろしがり、春の末には腹がすいてたまらぬといふ初初しさで、道を行くのも難儀に感じ、朝も起きるのが晚くて讀經も隨つて遲い。寺にゐて未だ人に嫁せぬ頃は、その名の通り仙人の子かとも思はれるほどであつた。

訪陳二

陳二を訪ふ

曉垂朱綬帶。晚著白綸巾。曉に朱綬の帶を垂れ、晚に白綸の巾を著く。
出去爲朝客。歸來是野人。出で去りて朝客と爲り、歸り來れば是れ野人。
兩餐聊過日。一榻足容身。兩餐聊か日を過し、一榻身を容るるに足る。
此外皆閒事。時時訪老陳。此外皆閒事、時時老陳を訪ふ。

【字解】【一】朱綬　赤色の印綬。【二】白綸巾　野人の頭巾。【三】朝客　朝廷の官吏。【四】一榻　一つの寢臺。【五】閒事　むだごと。

【題義】陳二（陳は姓、二は排行）を訪うた事を敍した詩である。

【詩意】曉には朱綬の帶を垂れて出仕し、夕に歸れば白綸子の頭巾をかぶつてゐる。出でては朝廷の官吏であるが、歸れば一個の野人である。一日に二食ですませ、一つの寢臺に身を託してゐる。その外は總て無用の長物と考へてゐる。自分は時時此翁を訪うては俱に幽閑を樂んでゐる。

晚庭逐涼

晚庭に涼を逐ふ

送客出門後。移牀下砌初。客を送り門を出でて後、牀を移し砌を下る初。
趁涼行繞竹。引睡臥看書。涼を趁うて行くゆく竹を繞り、睡を引いて臥して書を看る。

老更爲官拙。慵多向事疎。　老いて更に官を爲すこと拙し、慵きこと多くして事に向ひて疎なり。
松窓倚藤杖。人道似僧居。　松窓藤杖を倚す、人は道ふ僧居に似たりと。

【字解】【一】牀　腰掛。砌は庭。【二】藤杖　藤の杖。

【語義】夕の庭を涼みながら散歩した狀を寫した詩である。

【詩意】客を送り出してから腰掛を庭に移し、やがて涼を逐うて竹林のまはりを一周し、睡を催す爲に臥して書を讀んだ。老いては務も下手になり、何事も大儀になつて、ひつこんでばかりゐる。家はひつそりとして松下の窓に藤の杖がよせかけてある。世間の人は評して僧侶の住のやうだと謂つてゐる。

曲江憶李十一[一]

李君歿後共誰遊。　李君歿して後誰と共にか遊ばん、
柳岸荷亭兩度秋。　柳岸荷亭兩び秋を度る。
獨遶曲江行一匝。　獨曲江を遶り行きて一匝す、
依前還立水邊愁。　前に依り還水邊に立ちて愁ふ。

【語義】曲江に遊んで李建（十一は排行、字は杓直、長慶元年に死んだ）を憶うた詩である。

【詩意】李君が死んでから後は俱に遊ぶ友達もなくなり、柳岸荷亭空しく二回の秋を過した。今我獨り曲江を一周し、以前のやうに水邊に立つて愁を深うした。

【字解】【一】曲江　長安の遊の名。士女の遊賞地。【二】荷亭　蓮花の咲いてゐる水亭。

江亭翫春

江亭乘曉閲衆芳。　江亭に春を翫ぶ
春妍景麗草樹光。　江亭曉に乘じて衆芳を閲す、
日消石桂綠嵐氣。　春妍く景麗かにして草樹光る。
風墜木蘭紅露漿。　日は石桂綠嵐の氣を消し、
水蒲漸展書帶葉。　風は木蘭紅露の漿を墜す。
山榴半含琴軫房。　水蒲漸く書帶の葉を展べ、
何物春風吹不變。　山榴半琴軫の房を含む。
愁人依舊鬢蒼蒼。　何物か春風吹きて變せざる、
愁人舊に依りて鬢蒼蒼。

【語義】江亭で春色を賞した詩である。

【詩意】朝早く江亭に遊んで春景色を探つた。草も木も皆つやつやと光を放つてゐる。日は石桂を照して嵐氣が消え、風は木蘭を吹いて紅露を墜し、蒲は書帶草に似た葉を展べ、山榴は琴軫の如き花

【字解】【一】書帶　草の名。【二】山榴　山石榴。やまつつじ。【三】琴軫　琴の下の枝を轉ずるもの。【四】愁人　樂天自ら謂ふ。蒼蒼は頭髮の白くなる貌。

房を含んでゐる。かくの如く春風は總ての物を一新し盡してゐるが、吾が頭髮のみは依然として白い。

聞夜砧

誰家思婦秋擣帛。
月苦風凄砧杵悲。
八月九月正長夜。
千聲萬聲無了時。
應到天明頭盡白。
一聲添得一莖絲。

【題義】秋夜の砧を聞いて作つた詩である。

【詩意】どこの家の思婦であらうか、月冴え風凄じき夜に、悲しげな音を立てて砧を打つてゐる。今や八月九月の夜の永い時なのに、千聲萬聲いつやむべしとも見えない。かうして夜明けまで聞かされたら、吾が頭髮は盡く白くなつてしまふであらう。實にあの一聲が、一本の白毛を增すかと思はれる。

夜砧を聞く

誰が家の思婦か秋帛を擣つ、
月苦かに風凄じくして砧杵悲む。
八月九月正に長夜、
千聲萬聲了る時無し。
應に天明に到らば頭盡く白かるべし、
一聲添へ得たり一莖の絲。

【字解】【一】思婦　夫の遠征を思ふ妻。

【二】絲　白毛。

板橋路

梁苑城西二十里。
一渠春水柳千條。
若爲此路今重過。
十五年前舊板橋。
曾共玉顏橋上別。
不知消息到今朝。

【題義】板橋の路を通りて往事を憶うた詩である。

【詩意】梁苑城の西二十里にあり、一筋の川が流れて岸に柳の竝び立つてゐる此路をば、十五年ぶりで通つて見ると、昔ながらの板橋が架つてゐる。此橋は以前美人と別れた處であつたが、その後どうなつたか消息も知らずに今日に及んだ。

【餘論】この詩は通首對句を成してゐないが六句律の中に編入してある。卷十三の縣西郊秋寄二贈馬造一を參照せられよ。

板橋の路

梁苑城西二十里
一渠の春水柳千條。
若爲ぞ此路今重ねて過ぐる、
十五年前の舊板橋。
曾て玉顏と共に橋上に別れ、
消息を知らずして今朝に到る。

【字解】【一】梁苑　漢の時、梁の孝王が營んだ苑囿である。

【二】玉顏　美人をいふ。

青門柳

青青一樹傷心色。
曾入幾人離恨中。
爲近都門多送別。
長條折盡減春風。

【題義】 青門の柳を見て作つた詩である。

【詩意】 青青として、人の心を傷ましめる一本の柳がある。此柳は幾人の別れの悲みの中にはひつたことであらう。都の近くに在つて送別が多いから、枝が殆ど折り盡されて風情がなくなつてゐる。

【字解】 【一】青門　漢の長安城の東南の門。
【二】離恨　別離の恨。
【三】長條　長き枝。人と別るゝ時は柳を折る習なり。

梨園弟子

白頭垂淚話梨園。
五十年前雨露恩。
莫問華清今日事。
滿山紅葉鎖宮門。

【題義】 梨園弟子の昔の榮華を追憶し、今の寂寞を悲むことを述べた詩である。

【詩意】 玄宗時代の梨園弟子であつた老女官が當時君恩を蒙つて御前で演奏した事などを、白髮を垂れ淚を流して語り、且曰はく、今日の華清宮のさびれた樣は語るに忍びないから、どうぞ問うてくれるな。紅葉が山に滿ちて宮門が淋しく鎖されてゐるばかりであると。

【字解】 【一】梨園弟子　唐の玄宗坐部伎の子弟三百を選びて梨園に教ふ。皇帝梨園弟子と號す。宮女數百亦梨園弟子となり、宜春北院に居る。事唐書に見ゆ。【二】五十年前　玄宗時代をいふ。【三】華清宮の名。驪山の上に在り。安祿山の亂後荒廢した。

暮江吟

一道殘陽鋪水中。
半江瑟瑟半江紅。
可憐九月初三夜。
露似眞珠月似弓。

【題義】 秋の夕の江上の景を寫した詩で、眞に一幅の著色秋江の圖とも評すべきものである。

【詩意】 夕日の光が一筋深く水中に射し込み、江水が之が爲に、くつきりと界されて一半は青く一半は紅に見える。やがて日が沒して、九月三日の夜となれば、露は眞珠のやうに輝き、月は弓のやうに山の端に懸つてゐる。

【字解】 【一】殘陽　夕日。
【二】瑟瑟　寶石の名。其色碧なり。青き貌。
【三】可憐　愛すべしの意。

思婦眉

思婦の眉

春風搖蕩自東來。　春風搖蕩して東より來り、
折盡櫻桃綻盡梅。　櫻桃を折り盡して梅を綻ばし盡す。
惟餘思婦愁眉結。　惟餘す思婦愁眉の結べるを、
無限春風吹不開。　限りなき春風吹けども開かず。

【題義】夫の遠征を思うて愁へてゐる妻の眉を詠じた詩である。

【詩意】春風が東から吹いて來て櫻桃といはず梅といはず、盡く花を綻ばせたが、ただ思婦の眉のみは例外で、固く結んで春風に吹かれても一向開かない。

怨詞

怨詞

奪寵心那慣。尋思倚殿門。　寵を奪はれて心那ぞ慣れん、尋ね思うて殿門に倚る。
不知移舊愛。何處作新恩。　知らず舊愛を移して、何れの處にか新恩を作す。

【題義】宮女の君寵を失つて怨思する樣を述べた詩である。

【詩意】寵を奪はれて心に諦めがつかず、どうしてかうなつたかと殿門に倚つて思案にくれてゐる。君は我に對する愛情を移して、誰に新恩をかけられたのであらう。

寒閨怨

寒閨怨

寒月沈沈洞房靜。　寒月沈沈として洞房靜かなり、
眞珠簾外梧桐影。　眞珠簾外梧桐の影。
秋霜欲下手先知。　秋霜下らんと欲して手先づ知る、
燈底裁縫剪刀冷。　燈底裁縫して剪刀冷かなり。

【題義】寒夜空閨を守る妻の怨情を敍した詩である。

【詩意】寒月が冴えて夜もふけ渡り奥まつた室が一層靜かである。玉だれの外には梧桐が淋しく立つてゐる。燈下に裁縫してゐると、剪刀を持つ手が特に冷く感ずるので、今夜は霜がふるであらうことが知れる。

【字解】【一】沈沈　夜の深け行く貌。洞房は奥深き室。
【二】眞珠簾　珠をつられた簾。玉だれ。
【三】燈底　燈下。剪刀は、はさみ。

秋房夜

秋房の夜

雲露青天月漏光。　雲は青天を露はし月は光を漏す、

中庭立久却歸房。　中庭立つこと久しくして却りて房に歸る。
水窓席冷未能臥。　水窓席冷かにして未だ臥す能はず、
挑盡殘燈秋夜長。　殘燈を挑げ盡して秋夜長し。

【字解】【一】水窓　水ぎはの窓。

【題義】秋夜獨り房室の中に坐してゐる樣を述べた詩である。

【詩意】雲が切れて青天を露はし月が光を漏した。久しく庭に立つてゐたが、やがて部屋の中に歸つた。水亭の窓際は涼しくもあり、まだ寢るに早いので、獨り殘燈を挑げて長き夜を過ごした。

採蓮曲

菱葉榮波荷颭風。　菱葉は波に榮ひ荷は風に颭る、
荷花深處小船通。　荷花深き處小船通ず。
逢郎欲語低頭笑。　郎に逢うて語らんと欲し頭を低れて笑へば、
碧玉搔頭落水中。　碧玉の搔頭水中に落つ。

【字解】【一】荷　蓮の葉。
【二】郎　情夫。
【三】搔頭　かんざし。

【題義】採蓮曲は樂府題の名で、女子の蓮花を採る嬌態を寫したのである。

【詩意】菱の葉は波に漂ひ蓮の葉は風に飜へり、蓮の花の陰を小船が通る、偶然想ふ男に逢つたので積る思を語らうとして、につこり笑へば、碧玉の搔頭が水の中に落ちた。

鄰女

嫦娥十五勝天仙。　嫦娥十五天仙に勝る、
白日姮娥旱地蓮。　白日の姮娥旱地の蓮。
何處閒教鸚鵡語。　何れの處にか閒に鸚鵡をして語らしめん、
碧紗窓下繡牀前。　碧紗窓下繡牀の前。

【字解】【一】嫦娥　美しき娘。
【二】白日　白晝。姮娥は月。旱地は陸地。
【三】繡牀　刺繍をした腰掛。

【題義】鄰家の美女を思ふ情を敍した詩である。

【詩意】年のころ十五ばかりの少女で、天女が天降つたかと思はれるほど美しい。白晝の月、陸地の蓮かと怪まれる。どうか鸚鵡をして、綠の紗を張つた窓、刺繍の飾をした腰掛の前に我が思を語らせたいものだ。

閨婦

斜凭繡牀愁不動。　斜に繡牀に凭りて愁へて動かず、

【字解】【一】繡牀　刺繍をした腰掛。
【二】綠鬢　綠の黑髮。

紅銷帶緩綠囊低。　紅銷し帶緩くして綠囊低る。
遼陽春盡無消息。　遼陽春盡きて消息無し、
夜合花前日又西。　夜合花前日又西す。

【題義】閨中に獨居して遠征せる夫を思ふ妻の樣を敍した詩である。

【詩意】斜に腰掛に凭つて愁に沈み、紅白粉もはげ、身痩せて帶も緩み、頭を垂れて身動きもしない。遼陽からは春も盡きた今日まで、待てど暮らせど何の便もない。今日も今日とて早や合歡花の前に日が傾いた。

【字解】【一】遼陽　夫の遠征してゐる處。
【二】夜合花　合歡花。ねむの花。夏花開く。夜合といひ、合歡といふ者が妻の夫を思ふ情を深からしめる。

移牡丹栽

金錢買得牡丹栽。　牡丹を移して栽う
何處辭叢別主來。　金錢もて牡丹を買ひ得て栽う、
紅芳堪惜還堪恨。　何れの處か叢を辭し主に別れて來る。
百處移將百處開。　紅芳惜むに堪へ還恨むに堪へたり、百處に移し將ちて百處に開く。

【題義】牡丹を移し栽ゑて所感を敍した詩である。

【詩意】金で牡丹を買つて我が庭に栽ゑた。何處の花壇から主人に別れて來たものであらう。思へば牡丹は愛すべくもあり又恨むべくもある。何處に持つて行かれても處嫌はず咲き誇る。その輕薄さが恨めしい。

【字解】【一】紅芳　牡丹の花。惜は愛なり。

聽夜箏有感

夜箏を聽いて感あり

江州去日聽箏夜。　江州に去りし日箏を聽きし夜、
白髮新生不願聞。　白髮新に生じて聞くを願はず。
如今格是頭成雪。　如今格に是れ頭雪と成る、
彈到天明亦任君。　彈じて天明に到るも亦君に任す。

【題義】夜箏を彈ずる聲を聽いて感慨を敍した詩である。

【詩意】嘗て江州に貶せられて行く時、夜箏の音を聽いて悲みに堪へず、爲に白髮が生じた。今では既に頭髮が雪のやうになつてしまつたのであるから、この上白髮の生えようはない。夜あけまででも彈きたければ勝手に彈くがよい。

【字解】【一】如今　今日。

琵琶　琵琶

絃清撥刺語錚錚。　絃清く撥刺として語錚錚たり、
背却殘燈就月明。　殘燈に背却して月明に就く。
賴是心無惆悵事。　賴ひに是れ心に惆悵する事無し、
不然爭奈子絃聲。　然らずんば子が絃聲を爭奈せん。

【題義】琵琶の音を聽いて所感を述べた詩である。

【詩意】絃が鋭く音が冴え、殘燈に背き月に對して彈じてゐる。幸に心に悲みがないからこそ聽いてゐられるが、若し然らずんば君の絃聲は聽くに堪へない。

【字解】【一】撥刺　勢のよい貌。語錚錚は琵琶の音が冴えてゐる貌。

和殷協律琴思　殷協律の琴思に和す

秋水蓮冠春草裙。　秋水の蓮冠、春草の裙。
依稀風調似文君。　依稀として風調文君に似たり。
煩君玉指分明語。　君が玉指分明の語を煩はすは、
知是琴心伴不聞。　知んぬ是れ琴心伴りて聞かず。

【字解】【一】依稀　さも似たり。風調は容姿。文君は蜀の卓王孫の女卓文君なり。司馬相如卓氏に飲む。時に文君新に寡す。相如琴心を以て之を挑む。文君夜相如に奔る。【二】語　琴の音。前の琵琶の詩を見よ。

【二】知　知らずといふ意。

【題義】殷協律（殷は姓、協律郎は官名）の琴思と題する詩に和したのである。

【詩意】一人の美人が蓮花のやうな髪飾をして、春草のやうな著物を著てゐる。その容姿は卓文君によく似てゐる。君の明かにかなで盡す琴心を聽いても、一向に君に靡かないのは、わざと聞かないふりをしてゐるのであらう。

後宮詞　後宮詞

雨露由來一點恩。　雨露由來一點の恩、
爭能遍布及千門。　爭か能く遍く布きて千門に及ばん。
三千宮女胭脂面。　三千の宮女胭脂の面。
幾箇春來無淚痕。　幾箇か春來りて淚痕無からん。

【題義】宮女の君寵に浴する者の稀なることを述べた詩である。

【詩意】天子の御恩はもと一人の御身に基づくのであるから、遍く宮中に及ぶことは出來ない筈だ。されば三千の宮女の美しき顏には、春が來ても淚痕を留めないのは殆ど稀である。

【字解】【一】雨露　君恩に喩ふ。【二】千門　宮殿をいふ。【三】三千　宮女の數多きこと。胭脂は化粧料。べに。

聽彈湘妃怨

湘妃怨を彈ずるを聽く

玉軫朱絃瑟瑟徽。
吳娃徵調奏湘妃。
分明曲裏愁雲雨。
似道蕭蕭郎不歸。

江南新詞有云、暮雨蕭蕭郎不歸。

【字解】【一】湘妃怨　琴曲の名。湘妃は舜の二妃で、舜の南巡して崩ずゝや、之を追ひて江南に到り、湘水に溺れて死す。【二】玉軫　軫は琴の下に在りて絃を轉ずるもの。朱絃は琴の絃。瑟瑟は碧色の貌。前の暮江吟に見ゆ。徽は琴の宮商高下の節を定むるシルシ。全絃すべて十三徽ある。【三】吳娃　美人をいふ。徵調は哀調。【四】雲雨　男女の艶情をいふ。巫山の神女の故事。【五】蕭蕭　雨の淋しく降る貌。郎は情夫。

【題義】湘妃怨の曲を彈ずるのを聽いて作つた詩である。

【詩意】美美しき玉の琴を抱いて、美人が湘妃怨の哀調を彈じ、恰も暮雨蕭蕭として郎歸らずとでもいひ顏に、曲中に分明と雲雨の情を說き盡してゐる。

閒坐

閒坐

煖擁紅爐火。閒搔白髮頭。
百年情裏過。萬事醉中休。

煖かに紅爐の火を擁し、閒に白髮の頭を搔く。
百年情裏に過し、萬事醉中に休せん。

有室同摩詰。無兒比鄧攸。
莫論身在日。身後亦無憂。

室有ること摩詰に同じく、兒無くして鄧攸に比す。
身在るの日を論ずる莫く、身後亦憂ふる無けん。

【字解】【一】百年　一生をいふ。【二】室　妻。摩詰は盛唐の詩人王維、字は摩詰。【三】鄧攸　晉の襄陽の人。石勒の兵起るや家を擧へて走る。其弟早く亡せるを以て特に其姪を全うせんとし、子を木に繫けて去る。死して竟に嗣なし。【四】身後　死後なり。

【題義】閒坐の情思を敍した詩である。

【詩意】紅爐を抱き白頭を搔いて閒坐し、一生涯を情中に過し、萬事を拋擲して醉うて暮らさう。摩詰と同じく妻はあるけれども、鄧攸と同じく三界の首枷たる子はない。さつぱりしたものだ。生きてゐる時は無論の事、死んでの後まで憂といふものなくてあらなんか。

不睡

不睡

焰短寒釭盡。聲長曉漏遲。
年衰自無睡。不是守三尸。

焰短くして寒釭盡き、聲長くして曉漏遲し。
年衰へて自から睡る無し、是れ三尸を守るならず。

【字解】【一】寒釭　寒燈。【二】曉漏　曉の水時計。【三】三尸　人の腹中に三尸蟲がゐて人の隱微失誤を伺ひ、庚申の日に出でて天帝に讒するといふ俗說がある。故に庚申の晩には眠らずに夜を守る。

【題義】夜眠れない樣を述べた詩である。

【詩意】夜が更け油盡きて燈の焰が短くなり、水時計の音も緩かに響いて仲仲夜が明けない。年老いて自然と眠れなくなつた結果で、敢て尸蟲の爲に寢ず番をしてゐる譯ではない。

白樂天詩集　巻二十

律詩　五言七言　凡四十首

初罷中書舍人

初めて中書舍人を罷む

自慙拙宦叨清貴。　自ら慙づ拙宦の清貴を叨にするを、
還有癡心怕素餐。　還た癡心有りて素餐を怕る。
或望君臣相獻替。　或は君臣の相獻替せんことを望み、
可圖妻子免飢寒。　妻子の飢寒を免れんことを圖る可し。
性疎豈合承恩久。　性疎にして豈合に恩を承くること久しうすべけんや、
命薄元知濟事難。　命薄くして元より事を濟すの難きを知る。
分寸寵光酬未得。　寸分も寵光酬ゆること未だ得ず、
不休更擬覓何官。　休めずして更に何の官をか覓めんと擬せん。

【字解】【一】清貴　清も貴の意。
【二】素餐　功なくして祿を食むこと。
【三】獻替　善事をすすめ惡事を諫めること。
【四】命薄　運拙し。
【五】分寸　すこし。寵光は君恩。

【題義】長慶二年、中書舍人を罷めた時に作つた詩である。

【詩意】拙陋の身で貴官を叨にし、功なくして素餐するのを慙ぢる。君の爲に獻替の功を立てんことを望み、妻子をして飢寒を免れしめるやうに圖るべきであつたが、性疎懶にして久しく君恩を承くるに勝へず、運拙くして事を濟し難きを悟つた。少しも君寵に報い奉ることも出來ずにゐるのは、誠に申譯のないことであるから、もう官を辭して退かう。更に何の官をか求めようぞ。

宿陽城驛對月　自此後詩、赴杭州路中作。　陽城驛に宿し月に對す　此より後の詩、杭州に赴く途中の作

親故尋回駕。妻孥未出關。親故尋いで駕を回し、妻孥未だ關を出でず。
鳳凰池上月。送我過商山。鳳凰池上の月、我を送りて商山を過ぐ。

【字解】【一】陽城驛　商山の附近の驛の名。卷二の和三陽城驛に見ゆ。【二】親故　親友。【三】妻孥　妻子。樂天は免官し、妻子は後よりおひつきしこと、前の詩に見ゆ。【四】鳳凰池　禁中の池の名。中書舍の在る處。【五】商山　陝西省商縣の東に在る山。

【題義】長慶二年七月杭州刺史に任ぜられ、赴任の途中陽城驛に宿し月を觀て作つた詩である。

【詩意】我を送つて來た親友たちも既に駕を回して長安に歸り、妻子は一足あとから來るのでまだ關を出ない。今日まで鳳凰池のほとりで見慣れた月も、我を送つて商山までやつて來た。

商山路有感　并序

商山の路にて感あり　并に序

前年夏。予自忠州刺史除書歸闕。時刑部李十一侍郎。戶部崔二十員外。亦自澧・果二郡守徵還。相次入關。皆同此路。今年予自中書舍人。授杭州刺史。又由此途出。二君已逝。予獨南行。追歎興懷。慨然成詠。後來有與予杓直・虞平游者。見此短什。能無惻惻乎。儻未忘情。請爲繼和。長慶二年七月三十日。題於內鄉縣南亭云爾。

【訓讀】前年の夏、予忠州刺史より除書ありて闕に歸る。時に刑部李十一侍郎・戶部崔二十員外も、亦澧・果二郡の守より徵されて還る。相次ぎて闕に入り、皆此路を同じくす。今年予中書舍人より杭州刺史を授けられ、又此途より出づ。二君已に逝きて、予獨南行す。追歎して懷を興し、慨然として詠を成す。後來、予が杓直・虞平と游びし者有りて、此短什を見ば、能く惻惻たること無からんや。儻し未だ情を忘れずば、請ふ繼和を爲せ。長慶二年七月三十日、內鄉縣の南亭に題すと爾云。

【字解】【一】商山　前詩に見ゆ。【二】除書　任官の辭令書。【三】李十一　刑部侍郎李建、字は杓直。【四】崔二十　二十は二十二の誤か。卷十六の東南行一百韻、及び聞李十一出牧三澧州崔二十二出牧果州因寄三絕句を見て知るべし。戶部員外郎崔韶、字は虞平。【五】杭州　浙江省杭州府。【六】短什　短篇の詩。【七】內鄉縣　河南省南陽府に屬す。

憶昨徵還日。三人歸路同。　憶ふ昨徵し還さるる日、三人歸路同じ。

此生都是夢。前事旋成空。　此生都て是れ夢、前事旋空と成る。
直泉埋玉。虞平燭過風。　杓直は泉に玉を埋め、虞平は燭風を過ぐ。
唯殘樂天在。頭白向江東。　唯樂天を殘して在り、頭白くして江東に向ふ。

【題義】商山の路を經て感慨を述べた詩である。

【詩意】憶へば去年徽し還された時は、李・崔二君と我と同じく此路を經て都に歸つたが、此世はまるで夢のやうで、以前の事は皆空に歸してしまつた。今や李君は黄泉の客となり、崔君は風前の燭と共に消え果て、唯我ひとり此世に殘つたとはいふものの、白髮を垂れて又杭州に赴任する始末だ。

重感

停驂歎路隅。重感一長吁。
擾擾生還死。紛紛榮又枯。
困支青竹杖。閒捋白髭鬚。
莫歎身衰老。交游半已無。

【字解】【一】驂　馬をとどめる。【二】長吁　長嘆なり。【三】擾擾　紛紛に同じ。【四】交游　友人。

重感

驂を停めて路隅に歎み、重ねて感じて一たび長吁す。
擾擾たり生還死、紛紛たり榮又枯。
困して青竹杖に支へられ、閒に白髭鬚を捋る。
身の衰老を歎く莫れ、交游半は已に無し。

【題義】重ねて感慨を述べた詩である。

【詩意】馬を停めて路傍に休憩し、重ねて感慨に耽つて嘆息した。此世の生死榮枯は紛紛擾擾として定まりがない。くたびれて青竹の杖に倚り、靜かに白鬚をしごいてゐる。身の衰老したことなどはまだまだ歎するには足らない。交友の半は既に死んでしまつたのであるから。

逢張十八員外籍

旅思正茫茫。相逢此道傍。
曉嵐林葉闇。秋露草花香。
白髮江城守。青衫水部郎。
客亭同宿處。忽似夜歸鄉。

【字解】【一】旅思　旅愁なり。【二】江城守　杭州刺史。樂天自ら謂ふ。【三】青衫　青い上衣。官服なり。水部郎は水部員外郎張籍をいふ。

張十八員外籍に逢ふ

旅思正に茫茫、相逢ふ此道傍。
曉嵐林葉闇く、秋露草花香ばし。
白髮江城の守、青衫水部の郎。
客亭同じく宿する處、忽ち夜鄉に歸るに似たり。

【題義】水部員外郎張籍に逢つたことを述べた詩である。

【詩意】旅愁が茫茫として窮りなき時、偶然君と途中で逢つた。折しも嵐氣深く罩めて林葉茂り、露にぬれて草花が香ばしい。白髮の杭州刺史と青衫を著てゐる水部郎とが、同じ宿に落ち合つて、故鄉

にでも歸つたやうな嬉しさを感じた。

赴杭州重宿棣華驛。見楊八舊詩。感題一絶

杭州に赴くとき重ねて棣華驛に宿し、楊八の舊詩を見、感じて一絶を題す

往恨今愁應不殊。　題詩梁下又踟躕。
羨君猶夢見兄弟。　我到天明睡亦無。

【題義】杭州に赴任する時重ねて棣華驛に宿し、楊八（前に見ゆ）の題した舊詩を見、感じて此絶句を書きつけたといふ意。卷十八の棣華驛見楊八題夢兄弟詩を參照せられよ。

【詩意】吾が今日の愁恨は君が往年の愁恨と同じである。吾も今詩を梁の下に題して感慨のあまり暫く徘徊した。君は兄弟を夢に見たといふからまだしも我よりはましだ。我は夜の明けるまで睡れないでしまつた。

【字解】〔一〕往恨　楊八が先年の愁恨。今愁は樂天が今日の愁恨。〔二〕踟躕　さまよふ。

寓言題僧

寓言、僧に題す

切風火起燒荒宅。　切風火起りて荒宅を燒き、
苦海波生蕩破船。　苦海波生じて破船を蕩す。
力小無因救焚溺。　力小にして焚溺を救ふに因無し、
清涼山下且安禪。　清涼山下且安禪す。

【題義】寓言とは寄託する所ある言をいふ。寓意を含めて僧に題したのである。

【詩意】此世は切風に火が起つて荒宅を燒き、苦海に大浪が起つて破船を吹き拂ふにも喩ふべきである。然るに此僧は微力にして燒溺の災を救ふことが出來ず、ただ清涼山下に禪定を事としてゐる。

【字解】〔一〕切風　世の災厄をなす風。〔二〕苦海　佛語。無窮の苦境をいふ。〔三〕清涼山　五臺山ともいふ。華嚴經の疏に「清涼山は卽ち代州雁門郡の五臺山なり」とある。安禪は入定といふが如し。

內鄉縣村路作

內鄉縣の村路の作

日下風高野路涼。　日下り風高くして野路涼し、
緩驅疲馬闇思鄉。　緩かに疲馬を驅りて闇に鄉を思ふ。
渭村秋物應如此。　渭村の秋物應に此の如くなるべし、
棗赤梨紅稻穗黃。　棗赤く梨紅にして稻穗黃なり。

【字解】〔一〕內鄉縣　前の題山路有感に見ゆ。〔二〕渭村　村の名。長安の近くに在り、樂天の家の在る處。

【題義】内郷縣の村路を通つた時に作つた詩である。

【詩意】日西に傾き風強く野路が涼しい。吾は疲馬を驅りて暗に故郷を思ひつつ杭州を指して行く。渭村の秋景色も丁度此處と同じであらう。棗や梨が色づき稻の穗も黄色になつた。

路上寄銀匙與阿龜

謫宦心都慣。辭鄕去不難。謫宦心都て慣れ、鄕を辭して去ること難からず。
緣留龜子住。涕淚一闌干。龜子を留め住せしむるに緣り、涕淚一に闌干たり。
小子須嬌養。鄒婆爲好看。小子須らく嬌養すべし、鄒婆好く看ることを爲せ。
銀匙封寄汝。憶我卽加餐。銀匙封じて汝に寄す、我を憶うて卽ち餐を加へよ。

【字解】【一】阿龜　龜子なり、樂天の妾、行簡の子。【二】闌干　涙の流れる貌。【三】嬌養　愛育する。【四】鄒婆　鄒は姓。龜子の保姆か。【五】加餐　からだを大事にすること。

【題義】杭州に赴任する途中から銀の匙を阿龜に送つてやつた時の詩である。

【詩意】貶謫される事は慣れてゐるから格別悲しいとも思はず、故郷を去ることも敢て厭はない。併し龜子を吾が家に同居させて置くので、龜子の事を思ふと涙がこぼれる。よくあの子を愛育するがよい。鄒婆よ、どうぞ能く目をかけて世話してやつてくれよ。今銀の匙を汝に送り屆ける。よく我を憶うて體を大事にするがよい。

山泉煎茶有懷

坐酌泠泠水。看煎瑟瑟塵。坐して泠泠たる水を酌み、看すみす瑟瑟たる塵を煎る。
無由持一盌。寄與愛茶人。一盌を持つて、茶を愛する人に寄せ與ふるに由なし。

【字解】【一】泠泠　水の聲。【二】瑟瑟　碧色の寶石。瑟瑟塵とは茶なり。【三】一盌　盌は椀に同じ。

【題義】山泉を酌み茶を煎じて飲み、感懷を敍した詩である。

【詩意】坐して泉の水を酌み、碧玉の如き茶を煎じて獨りで飲んだ。一杯を茶を好む人に與へて飲ませたいと思ふが、與ふべき人もゐない。

鄂州贈別王八使君

昔是詩狂客。今爲酒病夫。昔は是れ詩狂客、今は酒病夫たり。
强吟翻悵望。縱醉不歡娛。强ひて吟じて翻りて悵望し、縱ひ醉ふとも歡娛せず。

鬢髮三分白。交親一半無。
郢城君莫厭。猶校近京都。

【字解】【一】郢州　湖北省鍾祥縣治。使君は刺史の稱。

【題義】郢州刺史王八（八は排行）に贈りて別を敍した詩である。

【詩意】吾は昔は詩狂客であつたが、今は酒病夫である。強ひて詩を吟じて又故郷を悵望し、縱ひ酒に醉つても一向愉快にならない。鬢髮は既に三分どほり白くなり、友達も半分は死んでしまつた。それから見れば君などは遙によい方なのだから、郢州に居るのを厭うてはならない。僕の任地たる杭州に比べると餘程都にも近いのだから。

吉祥寺見錢侍郎題名　吉祥寺にて錢侍郎の名を題せるを見る

雲雨三年別。風波萬里行。
愁來正蕭索。況見故人名。

【字解】【一】蕭索　淋しき貌。【二】故人　舊友。

【題義】吉祥寺で錢侍郎（錢徽、字は蔚章。前に見ゆ）が嘗て名を題せるを見て作れる詩である。

【詩意】雲雨の相分散するが如く君と既に三年の間相別れてゐたが、吾は更に風波を凌いで萬里の杭州に行くのである。されば愁心湧き來りて淋しさに堪へない。まして舊友の題名を見ては尙更である。

重到江州感舊遊題郡樓十一韻

重ねて江州に到り舊遊に感じて郡樓に題す十一韻

掌綸知是忝。剖竹信爲榮。
才薄官仍重。恩深責尙輕。
昔徵從典午。今出自承明。
鳳詔休揮翰。漁歌欲濯纓。
還乘小艓艜。却到古湓城。
醉客臨江待。禪僧出郭迎。
青山滿眼在。白髮半頭生。
又校三年老。何曾一事成。
重過蕭寺宿。再上庾樓行。
雲水新秋思。閭閻舊日情。

郡民猶認得。司馬詠詩聲。　郡民猶認め得たり、司馬詠詩の聲。

【字解】【一】掌綸　詔を草すること。中書舍人の職。【二】剖竹　符を剖きて刺史に任ぜられしこと。【三】典午　司馬の官。【四】承明　承明廬。侍從の臣の居る處。【五】揮綸　筆を振つて詔を草する。【六】濯纓　冠の纓を洗ふ。滄浪の水清まば以て我が纓を濯ふべしといふ歌がある。【七】艤棹　小舟。【八】古澁城　江州をいふ。【九】蕭寺　寺院。【一〇】庾樓　晉の庾亮が江州を鎮ぜし時建てし所の樓。【一一】閭閻　町なか。【一二】司馬　樂天嘗て江州司馬たり。

【題意】重ねて江州に到り舊遊を憶ひ、州城の高樓に題した詩である。

【詩意】中書舍人として詔を草するの忝きを知り、又符を剖いて杭州刺史に任ぜられたのも光榮となすに足る。才の薄きにも拘らず、官尙重く、恩深くして譴責の輕きを感ずる。昔は江州司馬から徵されて忠州に遷り、今は承明廬から出されて杭州に往く道すがら此地に來たのである。筆を揮つて詔を草することを罷め、漁歌を唱へて纓を濯はうと思ひ、小舟に乘つて又此地に來た。醉客は江に臨んで待ち、禪僧は城外に出て迎へ、靑山は昔ながらに見えるが、ただ吾が頭髮は半白くなり、昔に比ぶれば三年老いたが、其間に成し遂げた事は何もない。重ねて寺に往きて宿り、又庾樓に上つて眺めた。雲水の樣を見ては新秋の思を起し、町中を見ては懷舊の情を起した。江州の人民は吾が詩を詠ずる聲を今だに覺えてゐる。

贈江州李十使君員外十二韻　江州の李十使君員外に贈る十二韻

我本江湖上。悠悠任運身。　我は本江湖の上、悠悠として運に任する身なり。
朝隨賣藥客。暮伴釣魚人。　朝には藥を賣る客に隨ひ、暮には魚を釣る人に伴ふ。
迹爲燒丹隱。家緣嗜酒貧。　迹は丹を燒くが爲に隱れ、家は酒を嗜むに緣りて貧し。
經過剡溪雪。尋覓武陵春。　剡溪の雪を經過し、武陵の春を尋ね覓む。
豈有疎狂性。堪爲侍從臣。　豈疎狂の性有り、侍從の臣と爲るに堪へんや。
仰頭驚鳳闕。下口觸龍鱗。　頭を仰ぎて鳳闕に驚き、口を下して龍鱗に觸る。
劍珮辭天上。風波向海濱。　劍珮天上を辭し、風波海濱に向ふ。
非賢虛偶聖。無屈敢求伸。　賢に非ずして虛しく聖に偶び、屈する無くして敢て伸を求む。
昔去曾同日。今來卽後塵。　昔は去りて曾て日を同じくし、今は來りて後塵に卽く。
元和末、余與李員外同日黜官、今又相次出爲刺史。
中年俱白髮。左宦各朱輪。　中年にして俱に白髮、左宦各朱輪。
長短才雖異。榮枯事略均。　長短才異なりと雖も、榮枯事略均し。
殷勤李員外。不合不相親。　殷勤なり李員外、相親まずんばある合からず。

【字解】【一】使君　刺史の稱。【二】燒丹　仙藥を煉ること。【三】剡溪雪　剡溪は浙江省剡縣の南に在り、晉の王子猷が雪夜

獄逃を防ひし處。【四】武陵巷　桃源の巷。【五】直鑣　天子の御怒をいふ。【六】左官　左遷せられること。朱輪は朱塗の馬車。刺史になること。

【題意】江州刺史李員外に贈つた十二韻二十四句の詩である。

【詩意】我はもと江湖の間に悠遊し、身を運に任せ去留に委ね、朝には藥を賣る隱者に伍し、暮には魚を釣る漁父に伴ひ、隱者を學んで仙藥を煉り、酒を嗜むが爲に常に貧しく、剡溪の雪を訪ひ、桃源の春を尋ねて暮してゐた。天性疎狂であるから侍從の臣たるには堪へぬのである。されば宮中に仕へて常に心を驚かし、言を發して君の怒に觸れ、遂に宮闕を辭して濱海（杭州を指す）に向ふことになつた。賢にあらずして聖に偶ばんとし、屈することなくして伸を求めようとしても、それは不可能であつたのである。昔は君と僕と同日に官を黜けられ、今又相次いで出され、中年白髮にして、左遷されて朱輪に乘る身になつた。才の優劣こそ異なれ、身の榮枯は能く相似てゐる。されば懇に相親むべきである。

題別遺愛草堂。兼呈李十使君 李亦廬山人、常隱白鹿洞。

遺愛の草堂に題別し、兼ねて李十使君に呈す 李も亦廬山の人、常に白鹿洞に隱る

曾住爐峯下。書堂對藥臺。　曾て住む爐峯の下、書堂藥臺に對す。

斬新蘿徑合。依舊竹窓開。　斬新蘿徑合し、舊に依りて竹窓開く。

砌水親開決。池荷手自栽。　砌水親ら開決し、池荷手自ら栽う。

五年方暫至。一宿又須回。　五年にして方に暫く至り、一宿して又須らく回るべし。

縱未長歸得。猶勝不到來。　縱ひ未だ長く歸り得ざるも、猶到り來らざるに勝れり。

君家白鹿洞。聞道亦生苔。　君白鹿洞に家し、聞道く亦苔を生ずと。

【字解】【一】李十使君　前の詩に見ゆ。【二】爐峯　廬山の香爐峯。【三】藥臺　仙藥を煉る臺。【四】斬新　極めて新しきこと。蘿徑は、つたかつらの生えた小道。【五】砌水　庭前の池の水。【六】池荷　池の蓮。

【題意】樂天は嘗て江州司馬たりし時廬山に草堂を構へた。遺愛といふ所以である。此詩は草堂に題して別を告げ、兼ねて江州刺史たる李氏に呈したのである。自註にある通り李氏も嘗て廬山の白鹿洞に隱居してゐた。

【詩意】吾は嘗て香爐峯下に住んだが、その讀書の堂は今以て藥臺と相對して存してゐる。今來て見れば徑には新しく生えた蔦葛がはびこり、昔の儘に竹窓が開けてゐる。庭の水は嘗て親ら引き來つたもので、池の蓮も自ら栽ゑたのである。五年ぶりで訪ねて來て一晩宿つて又去るのである。たとひ此地に歸りきりに歸つてしまふことは出來ずとも、全く來ないよりはましであらう。聞けば君の白鹿洞の隱居處も久しく棄てて顧みないので苔が生えたといふが、務を持つ身に取つては殘念ながら致方が